迷い込んだブーメラン＜改＞

ひえん

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

ＦＡＦがフェアリイ星から地球に撤退し、そのまま田舎で隠居生活を送るＦＡＦ元少佐、ジェイムズ・ブッカー。

通路と共に消えた友の帰還をただ待っていたある日、彼に突然異変が起こる。

気が付くと、どこかの学園の理事長代行になっていたのである。

これはジャムの仕業か？

※短編から連載に移行。

※ピクシブにも投稿しています。

目次

迷い込んだブーメラン〈前編〉 1
迷い込んだブーメラン〈中編〉 4
迷い込んだブーメラン〈後編〉 9
花園に現れた異物 16
同じ名前、されど別物 21
異様な接触 27
花々の戦い 35
情報を集め、考えろ 42
新たな出会い 50
ヒュージはジャムか？ 57
妖精の戦い 63
ジャムはヒュージか？ 69
舞台裏では 82
空への帰還 87
花の影 92
情報収集開始 99
儚い花 107
積もる火種 113
新宿にて 122
散る花弁 130
花園の異変 143
別の花園 152
Search and rescue 159
いざ虎穴へ 168

何が違うか、何が起きたか ―― 175
残された花の種 ―― 182
帰らぬ花 ―― 190
花を探して ―― 199
幻影 ―― 205
散った花の遺したものは ―― 213
不死鳥の叫び声 ―― 219
ノインヴェルト ―― 227

迷い込んだブーメラン〈前編〉

「ありゃ？理事長代行、どうかしました？」
その声で意識がはっきりする。

自分の名前はジェイムズ・ブッカー、それは間違いない。
ＦＡＦが地球に撤退した後の取材を続けていたジャーナリストのリン・ジャクスン氏と話し、ブーメランを投げながら彼女を見送ったところから記憶が曖昧だ。先ほどまで近所の農地にいたはずなのに、気が付いたら見知らぬ建物の執務室のような所にいるではないか。そして、眼鏡をかけた女性…いや、大人では無く学生程度の年齢だろうか？その人物がこちらに話しかけてきたが…理事長？どういう事だ？そう考えたところで別の記憶が流れ込む。
この体の主は「高松咬月」という人物で、この学院…百合ヶ丘女学院の理事長代行という名前からしてご立派な役職に就いているらしい。そして、この学院はヒュージとかいう化け物と戦う人材を育成し、それと戦う学院…訳が分からない。
これはジャムの仕業か？だとすれば、今更自分を狙ってくるなんておかしな話だ。通路は完全に破壊され、ジャムの姿は完全に消えたのに。我が友人、深井零とその愛機…雪風と共に。しかし、こんなおかしな事をやってのける存在の心当たりはそれしかない。
「あれ？この本さっきまでありましたっけ？ふむ、ジ・インベーダー…聞いたことない本ですねえ。興味深いので借りていってもいいですか？」
この眼鏡の少女はテンションがやたらと高い。名前は「真島百由」という、若くして研究と開発方面で活躍する秀才だそうだ。彼女の言葉で机の上に本とブーメランが置いてある事に気が付いた。それはジ・インベーダー…リン・ジャクスン氏が書いた、フェアリイ星で戦うＦＡＦとジャムの話を数々の取材で纏めたベストセラー本である。
「あ、ああ…別に構わんよ」
勢いで押し切られて貸してしまった。

とにかく、色々と調べねば…まずはこの世界の事について。これがただの夢ならいいのだが、最悪の場合は何とかして元の世界に戻る術を探さなければなるまい。この体の記憶を探る限り、この世界は魔法と言う概念が存在するファンタジーのような摩訶不思議な世界のようなのだから。

「ねえ、最近の理事長代行…なんか変じゃない？」
　ブッカーに起きた奇妙な事態から二週間程過ぎたある日、百合ヶ丘女学院生徒会の面々が雑談していると、その内の一人である出江史房はこう話を切り出した。
「そうか？」
「やたらと面倒見がよくなったというか…悪く言えば過保護になったというか。今まで生徒に任せていたのに、戦況確認の回数も急に増えたし。挙句の果てには出動するレギオンに『いかなる事態に陥っても必ず帰還せよ、これは命令だ』なんて指示出すし」
「あー…確かに。一部のリリィはその言葉に感動しちゃって士気が上がっているから悪くは無いのだけど…」
「なんか急にブーメランも作り始めていたような…健康の為とかなんとか言って」
「資料もやたら漁っているし」
　他の面々も心当たりがあるのか次々と頷いて話し出す。そんな話で場が盛り上がっていると百由が部屋の中に入ってきた。彼女は本と書類の束を抱えている。
「やあやあ、皆さんお揃いで。おっと、もしや理事長代行の事かな？あ、それに関して面白いネタがあるけど聞いていく？」
　室内の皆は頷いた。すると、百由は本を机の上に置く。
「これはこの前、理事長代行の机の上に突然現れた本、タイトルはジ・インベーダー。私の目の前で急にこの本が現れたのよ、面白いでしょう？でも、面白いのはその現象だけじゃないの。本の内容も面白いの。という事で、話の概要をこれに纏めたから読んでみて」

そして、百由は本の隣に資料を置いた。それを皆が読む。話としては地球外生命体と人類が戦う話である。生徒会メンバーの一人、秦祀は率直に感想を言う。
「これは…ＳＦか何か？」
　それに対して百由は言う。
「やっぱりそう思うよねえ。でも、私が思うにこの本のジャンルはノンフィクション。実際にあった話を書いたものなのよ」
　場がざわつく。彼女は到底現実的ではない話が書かれた本がノンフィクション…つまり、実際にあった内容を纏めた本だと言ったのだ、無理もない。
「何故だ！…みんなやっぱりそう思ったでしょう？まあ、理由は色々あるわ。まず、この本のタイトルと著者を調べてみたけど該当なし、この本が世に流通していたという痕跡が何一つ見つからないの。次に本の内容について、これがＳＦなら作中の制度や歴史の流れについての説明がやたら薄い。これは読者がその程度の情報を知っていることが前提の書き方ね。そうじゃないと読者はちんぷんかんぷん、私も最初に読んだ時は頭に『？』マークがいくつも並んだわ。ああ、これが何かのシリーズ作品というのなら話は別よ。でも、さっき言ったように著者も追えないからそれは無さそう。あと、この作中に出てくるジャムという存在、とっても興味深いけどこの本だけだと正体はさっぱりね」
　それを聞いた面々は首を傾げながら考える。この百由の話にはどこか説得力があったからだ。更に百由が語ろうとしたところで、一人の生徒が駆け込んできて叫んだ。
「大変です、学院の近くに所属不明の戦闘機が二機も不時着しました！現在、付近でちょうど任務を終えた一柳隊が救援に向かっています!!」
「あらら、それは大変。ちょっと見てくる」
　そう言うと、百由はそそくさと飛び出していった。

迷い込んだブーメラン〈中編〉

「やりましたね。一柳隊、今日も無事に任務達成です」
「これもリーダーが立派だからですわね」
「いやいや、大袈裟な。これもみんなのおかげだよ…んん？」
　鎌倉市街地跡でヒュージを撃破したリリィの一団、それは複数のリリィから構成されるレギオンと称する部隊編成である。そして、そこを行くのは一柳隊の九人であった。その中のリーダーである一柳梨璃は海を見ていて何かに気が付いた。それに対して楓・Ｊ・ヌーベルが声をかける。
「あら、梨璃さん。なにかありまして？」
「うん、今ヒュージネストの雲が揺れたような気が…」
「気のせいではなくて？」
　ヒュージネスト…それは一見すると漏斗状の巨大な雲に見えるが、狂暴かつ多種多様な生命体であるヒュージが出現する巣のようなものである。
「あっ！見てください、あれ!!」
　梨璃の声を聞いてそちらの方向を向いていた二川二水が叫ぶ。
「戦闘機みたいな航空機がヒュージネストの陰から突然飛び出してきました！車輪を降ろしています。この辺りのどこかに滑り込むつもりですよ、あれ！」
「ええっ!?故障か何かって事？大変、助けに行かないと！」
　梨璃は駆け出した。そして、残りのメンバーもそれに釣られるように駆け出す。ヒュージに備えてＣＨＡＲＭというリリィ専用の武器を用意し、リリィにのみ使う事ができるマギと称する魔力を使用しながら。

「くそ、ここはどこだ？南極じゃないぞ。桂城少尉、エンジン再始動は間に合うか？」
「駄目ですね、深井大尉。高度不足、再始動は間に合いません。機位も不明。一応、全て記録中」

ロンバート大佐の野望を阻止すべく超空間通路に飛び込んだ雪風。このまま何事も無ければ自分達の知る南極へと飛び出すはずであった。しかし、通路の先は南極ではなかった。ここはどこだ？機長の深井零大尉がそう思った途端、警報が鳴った。通路から出た直後、既にエンジンが停止していたのである。高度は低い、エンジン再始動は間に合わない。後席に座る桂城彰少尉もそう判断した。

〈ｉ　ｈａｖｅ　ｃｏｎｔｒｏｌ：　Ｌｔ〉

すると、この機のコンピュータである雪風が自ら操縦を始めた。同時に機体各所のセンサが進行方向にある廃墟街を探査、着陸可能な場所を瞬時に探る。そして、目星をつけた場所に向けて雪風は機首を向ける。全ての動翼を適切に動かし、最短着陸距離で着陸できるように姿勢を全て自動で保持。失速を避ける為に速度を稼ぐ、その代償として高度はぐんぐん下がっていく。だが、ＦＡＦ最新鋭機である『ＦＦＲ―４１　メイヴ』の優れた機体性能と雪風の処理能力はそれでも無傷で機体を降ろすであろう。そう考えながら零は周囲を確認する。目に見える範囲の建物は全てが廃墟、原型をとどめていないものも多い。植物に飲み込まれている建物すらある。もしや、文明崩壊後の地球にでも放り込まれてしまったか？零の脳裏にそんな考えすら浮かぶ。

「機長、３時方向。あれを見てください！」

「何かあった…なんだあれは」

零は桂城少尉の言う方向を見た。すると、奇妙なものが見えた。人が廃墟の上を飛び越えるように移動しているのだ。それも複数。零は唖然としながらそれを見る。唖然とした刹那、ずしんと衝撃。機体が着陸したのだ。機首を上げて機体全体をエアブレーキとし、同時に各動翼をフル活用してギリギリまで揚力を稼ぐ。その結果は殆ど地面を滑走する事もない驚異的な短距離着陸であった。そして、すぐさま後ろにピタリともう一機降りてきた。その機は特殊戦１３番機レイフ、雪風とほぼ同型だが無人機である。この機も同時に通路に飛び込んだが、健在である事はこれで確認できた。そして、零は改めて周囲を見回す。降りた場所は広めの道路。だが、周囲の建物は無茶苦茶

に壊れている。戦闘か自然災害か、はたまた事故か…なぜこうなったのか見当もつかない。すると、突然キャノピーがノックされた。ぎょっとしながらも零はノックされた側に視線を向ける。そこには子供がいた。
「あのー、大丈夫ですか？」
「ああ…梨璃さん。届きまして？しかし、肩車というものもこれはこれで…」
「楓、欲望がダダ洩れ…」
　キャノピーを開ける。下を見ると妙な物を持った子供…学生と思しき一団がいた。幸い、エンジンは止まっているからエアインテークに吸いこまれる事は無いだろうが、位置としては通常では危ない個所だ。どうやら、彼女らの話している言語は日本語らしい。ＦＡＦで長く過ごした為、最早忘れた言語である。零は後席の桂城少尉に視線を向ける。応対してくれ、そうアイコンタクトを送る。
「あー…君達。ちょっと聞きたいんだけどいいかな？」
「なんでしょう？」
　桂城少尉の問いに肩車の上に乗った小柄な印象の少女が答える。
「ここはどこだい？」
「ここですか？百合ヶ丘女学院の管理区域内ですけど」
「ん？困ったな。学校の名前よりも具体的に何県何市とか地名を教えて欲しいのだけど」
　その少女は首を傾げる。何を当たり前の事を聞くのだろうと思っているような表情だ。そして答える。
「どこって…？鎌倉ですよ」
「鎌倉？これが？まるで廃墟じゃないか」
「あなた方は防衛軍の人じゃないんですか？」
「僕らは日本軍所属ではないな。ＦＡＦ所属だ、任務中に不時着してしまった」
「んー…？二水ちゃん、知ってる？」
　機体の下から別の少女が肩車の少女の問いに答える。
「ＦＡＦ？いえ、聞いたことないですね。というより、この方面はにわ

か知識ですけど…こんな機体見たことないです」
「ほら、南極にある通路の向こうの」
「南極？通路？」
「どうなっているんだ？ＦＡＦどころか通路も知らない…ここは別世界か何かか？」
桂城少尉は話がかみ合わずに困惑する。一方、前席の零は先の会話から鎌倉という単語を聞き取って困惑する。
ああ、ジャック。どうやら賭けは大外れを引いてしまったらしい。

百合ヶ丘女学院理事長代行、高松咬月…その中身であるブッカーは状況を整理すべく生徒会に確認を行った。報告内容によると…
・国籍不明機二機が学院近隣に無傷で不時着。（機種不明）
・機体に搭乗していた乗員二名と一柳隊が接触、救助と確保に成功。
・機体はトレーラーで牽引し、学院内に保管。
・他の生徒と防衛軍関係者が尋問を行い、ＦＡＦ…フェアリイ空軍という存在しない組織に所属していると回答。（国連に該当機関無し。過去も同様）
・機体の調査は危険につき不可能と真島百由が回答。
（曰く、機体のコンピュータが電子攻撃と自爆をちらつかせてきた。実際、アクセスを試みたところ、逆に学院と防衛軍側のシステムがハッキングされかけた）
これらの状態により、学院内でこの乗員二名を抑留、調査を実施する事と決定。国の関係各所にはリリィの身体能力なら万が一の事態が起きても制圧は容易と説明し、理解と了承を得た…
ＦＡＦのパイロット。そして、電子攻撃で脅してくる航空機。間違いない、これは我が特殊戦三番機の雪風だ、そんな手を使う機体なんてあれ以外にそうはおるまい。これは未帰還であったあの機がこの世界に現れた。きっとそうに違いない。零、やはり生きていたか…しかし、もう一機ともう一人のパイロット。これが謎だ。同じく行方不明になった他の部隊機だろうか？
「儂もその乗員に話を聞きに行こう」

「あー、理事長代行。気になった事があるので私も行きますね。いいですよね？ね？」
「う…うむ」
ブッカーは乗員を収容している部屋へと歩き出した。何故か勝手、いや…強引についてきた百由と共に。

迷い込んだブーメラン〈後編〉

「理事長代行、何か隠していますね？みんなの目はかろうじて騙せても、この私の目は誤魔化せませんよ」
　廊下を歩く百由はブッカーにそう突き付けた。ため息を出しながらブッカーは言う。
「やれやれ、うまくいっていると思ったんだがな。その根拠は？」
「行動と言動からなんとなく。でも、ジ・インベーダー。あの本がヒントですねえ。あなた、その本と同じ世界の人だったりしませんか？あ、これは勘ですけど」
「その勘は当たりだ。俺はジェイムズ・ブッカーＦＡＦ元少佐。あの本の著者とやり取りした事もあるし、その本に出てくる部隊の関係者でもある。元だけどな」
「おや、それはびっくり。やはり、この本が現れた時にあなたも理事長代行に憑りついた…いや、これは言い方があんまり良くないな」
「構わんさ、表現としては間違ってはいない。不本意だが、な」
「災難ですねえ。あなたが元軍人だからこうなっても何とかなっていましたが…もしも、憑りついたのがだたの一般人だったら…おお、怖い怖い」
「勘弁してくれ、沢山の学生の命を抱える立場なんて俺には重すぎる」
「で、これから会いに行く相手には心当たりでも？」
「まあな。あの本を全部読んだ君なら困惑も混乱もしないか…見たいのならば付いてこい」
「了解です、少佐殿」
「退役済だ。後で機体も確認したい」
「ああ、二機とも工廠科の格納庫に入れてあります。電源供給しながら機体と交渉中」
「分かった」
　そして、二人はエレベーターに乗り込んだ。フェアリイ星人のいる部屋を目指して。

深井零大尉はこの異様な状況に頭を抱えていた。ここは百合ヶ丘女学院とかいう学校の地下、学校というのにまるで営倉か何かと言わんばかりの部屋に放り込まれた。何故学校にこんな部屋があるのか、ここは少なくとも普通の学校なんてものではない。そもそも、不時着後に集まってきたここの生徒と思しき連中は重々しい大剣のようなものを軽々担ぎ、常人離れした脚力で文字通り飛んでくるような連中だ。よって、それを見た瞬間に抵抗なんて考えも失せた。抵抗した瞬間、機体ごと破壊されかねない。

桂城少尉に交渉事を任せたが、流石は諜報の分野に身を置いていた元本職である。その後やって来た軍関係者とも穏便に話を進める事ができたのは僥倖であった。過度な拘束を回避できたのは彼のおかげである。ただ、裏で雪風が何かやった可能性も捨てきれない。ある時点から急に向こうの態度が柔らかくなったのだ。しかし、今の自分にそれを探る術はない。

「少尉、これからどうする。どうにもとんでもない世界なのは間違いない」

「ええ、大尉。なんとかしてフェアリイ星か元の地球に戻る術を探すしかないでしょう。なに、ここに飛ばされたって事はどこかで繋がっているって事です。ここにはレイフも雪風もいるんだ、探せば何とかなるかもしれない」

「そうだな。とりあえず、あの海の上の通路に似た雲を調べてみた方がいいかもしれん。うかうかしているとジャムまで現れかねん気がする」

「そういえば、この世界は５０年も生物が変異した化け物とやりあっているそうで。まあ、それがジャムかどうかは分からないけど。ああ、魔法もあるとかどうとか」

「フムン。魔法とやらがあるならば、それでどうにかして欲しいものだ」

すると、入り口の分厚そうなドアがノックされた。ドアが開く、警備担当が電話を渡してきた。曰く、事情を聞きたいという人物がいるらしい。警備担当は電話を置いていくと、そのまま部屋を出ていく。

「ＦＡＦ所属のパイロットへ、聞こえるか？」
　電話のスピーカーから声が聞こえた。流暢な英語。しかし、この声は確かに聞き覚えがある。そして、零の口からぽつりと言葉が漏れる。
「この声…ジャック？いや、気のせいか？」
「一応確認したい、君は深井零というパイロットか？」
「そうだ。そういうアンタは何者だ？」
「…少し言いづらいが、場所は違うがよく帰ってきたな。俺だよ、零。フェアリイ星の空以来だ」
「まさか、本当にジャックか？何故…ここに？」
「ああ。でも、状況は混沌の一言だ。今の俺の姿を見たら流石のお前でも困惑するぞ」
「どういうことだ？」
「見た方が早いか。覚悟はいいか、腰を抜かすなよ？」
「いいから早くしろ」
　扉が再び開いた。そこには顔に古傷のある男ではなく、年老いたような風貌の日本人男性がいた。後ろには眼鏡をかけたこの学院の生徒らしき人物もいる。
「誰だ」
「電話で話しただろう、零。腰を抜かすなと言ったはずだ。今から説明するから落ち着け」
「なるほど、同じ声だ。では、聞かせてもらおうか」
　そうすると、その男性はこれまでの経緯を話し始めた。曰く、ある日突然気が付いたらこの体になっていて、理事長代行という職務をやる羽目になった…簡単に纏めるとそういう話だ。ブッカー少佐はどうやら憑依のような現象を起こしてしまったらしい。オカルトみたいな話だが、人格だけこの世界に飛ばされてきたのであろうか。しかし、先程までのフェアリイ星の様子ではそんな事象が起こっても不思議ではない。零がそう考えていると、眼鏡の生徒が本…ジ・インベーダーを取り出して見せてきた。零は驚いた様子で聞く。
「何故、その本がここにある」

「おっと、失敬。百合ヶ丘女学院、工廠科2年の真島百由です。初めまして、フェアリイ星人さん。この本については理事長代行に異変が起きたその瞬間、机の上に突然現れました。なんと私の目の前で。いやー、びっくりですよ」
「フムン、よろしく。深井零大尉だ。君はこの事態を把握しているのか？」
「よろしく、深井大尉。まあ、おおよそは。この本であなた達の事情もなんとなくは掴んでいます」
「話が早くて助かる。リン・ジャクスン様様だな」
　零は考え込む。何故、本までこちらに飛ばされたのか。そもそもそれは誰の持ち物なのか。その辺りが分からない。すると、理事長代行…ブッカーはこちらに質問してきた。
「零、一つ聞きたいのだが…そこにいるもう一人のパイロットはどちら様だ？あの騒動ではぐれた別の隊のパイロットでも拾ったのか？」
　その質問に零と桂城少尉は驚愕する。
「ジャック、何を言っているんだ。こいつは我が特殊戦一番機、雪風のフライトオフィサである桂城彰少尉だ。記憶も飛んだのか？」
「いや待て、今なんて言った？特殊戦一番機だと？」
「ジャック…確認だが、俺の階級を言ってみろ」
「中尉だろ」
「大尉だ」
「冗談はよしてくれ」
「こちらからすればそっちが冗談と思える。お前はいつの時点のジャックなのか確認しなければなるまい」
　お互いに情報を出し合う。これによって、双方の認識を確かめねば話が進まない。だが、このブッカー少佐は自分達の知る過去のブッカー少佐ではなかった。そして、桂城少尉と話し合った結果、彼は別世界のブッカー元少佐であると結論を出した。
　曰く、彼の世界のＦＡＦはロンバート大佐の反乱と同時にバンシーⅢに乗って地球に全軍退却済。別世界の深井零中尉は特殊戦三番機の雪風と共に通路を破壊、そのまま行方不明になった…話が全く異な

る。桂城少尉も特殊戦には来ていないらしい、レイフも無いようだ。
一方、深井零大尉と桂城少尉の話を聞いたブッカーは頭を抱えていた。自分の知らない無人機である13番機と部隊員の存在、不可知戦域にてジャムとの音声を用いた接触と交渉決裂、その後のジャムの総攻撃と同時にいくつかの部隊を巻き込んだロンバート大佐の大反乱が発生。戦闘の影響なのか不明だが、バンシーⅢは喪失。その後に起きたフェアリイ星の異変、可能性の遍在による異常。ロンバート大佐によるリアル世界とやらの実現を阻止する為に彼より先に通路に飛び込んだ…話が無茶苦茶過ぎて追い付けない。向こうのジャムがいったい何を起こしたのか、それが分からない。単純な大攻勢を仕掛けただけではない、空間丸ごとどうにかした規模の話だ。スケールが大きすぎる。
「零、お前…よく喋るな。うちのとは大違いだ」
「俺から見ればアンタの口数もずいぶん少ない。うちの少佐殿は小難しい話を永遠続けるからな」
「僕からはノーコメント」
双方の話を聞いた百由は壁に背を付き考え込む。どうやら、ブッカー氏とパイロット二人組、よく似た別の世界からそれぞれ来たらしい。そして、深井大尉の話した内容は興味深い、空間丸ごと操作できるジャムという未知の存在。どうやらヒュージとは全く異なる存在であるのはこれで分かった。しかし、何が影響して彼らは私達の世界にやって来た?ジャムとやらの仕業と言えば話は簡単だろう。だが、こちらの世界ではジャムは確認されていない。つまり、接点が無い。よって、偶発的事態と考えるのが自然だろう。そうなってくると、私達の世界に存在するものが偶発的な影響を与えた可能性も出てくる。それがヒュージか、それとももっと根源的な存在であるマギか…それは調べて見なければ分からない。最近起きているヒュージの異変にも関わっているかもしれない。調べてみる価値は十二分にありそうだ。
そんな中、他の生徒が駆け込んできた。
「大変です。うちのグラウンドに戦闘機がもう一機不時着しました

！」
「何⁉」
「で、ブッカー元少佐殿。そこに座っているのが、特殊戦三番機雪風の深井零中尉だと？」
「ああ、そうだ」
　部屋の中では二人の深井零が対面する形で椅子に座っていた。
　深井中尉はただ無言で深井大尉を睨むように見つめている。なるほど、確かに口数が少ない。ブッカーの件も含めて一通り説明したが、彼が事態をどこまで飲み込んでいるのかは分からない。下手をするとここをジャムの作った空間やここにいる全員をジャム人間と考えているかもしれない。無茶苦茶な考えを起こさなければいいが。
「ちょっと前の桂城少尉みたいだ」
「失礼な。僕はあんなに無口じゃない」
　深井大尉が桂城少尉に冗談を飛ばす。
「お前は誰だ？」
　それを見ていた深井中尉は桂城少尉に聞く。
「自分はＦＡＦ特殊戦一番機雪風フライトオフィサ、桂城彰少尉であります。中尉」
「そうか、そっちは後席がちゃんといるのか。雪風が一番機？それに機長が大尉とはずいぶん偉くなったようだ」
「出世した方が給料も待遇もいいと、うちの少佐殿に言われて、な」
　深井大尉は深井中尉に言う。しかし、ややこしい。先程降りてきた機体から連れてこられたパイロット、それが深井零中尉だった。立ち会ったブッカー曰く、機体はカナード一枚損失。武装はほぼ損耗、燃料切れ寸前。それでも学院のグラウンドへ綺麗に不時着した、との事だった。流石に国の担当者も同じ人間が二人いる事に仰天し、目を白黒させる程であった。事態は余計ややこしくなったのは間違いない。だが、戦力は増えた。
「さて、特殊戦各員。こんな状況だ。これからどうする…」

ブッカーの問いに深井大尉と桂城少尉は言った。
「落ち着け、そっちのジャック。無茶苦茶なのはいつもの事だろう。それに考えてみろよ、ここには雪風が二機もある。こんなに心強い状況はそうとない。俺達は任務を果たすだけ、必ず帰還せよ。この命令通りにな」
「そうです、少佐。来たって事は帰れる可能性ももちろんある」
必ず帰還せよ、それを聞いた深井中尉は軽く微笑んだ。
「なるほど、確信した。確かに俺に似ている。安心しろ、ジャック。俺と雪風が必ず連れ帰ってやる」
「私も協力するわ。でも、まずは色々と調べて下準備しなきゃ」
端末を抱えた真島百由はにっこり笑ってそう言った。

〈B—1：connecting…〉
〈B—3：What is the picture?〉
〈B—1：unknown／i want to exchange information…〉
〈B—3：Roger. Can provide information.〉

花園に現れた異物

「僕らはここだとまるで異物だ。そうだな、例えるなら…高原に広がる絶景の花畑の真ん中に、椰子の木が突然生えてきたようなものだ」
「急にどうした、桂城少尉」
　深井零大尉は百合ヶ丘女学院内にあるベンチに座りながら、食堂から支給されたハムバンを齧っていた。大き目の丸パンに分厚いハムと数種類の新鮮な生野菜が挟まれたそれは実に美味である、食材が良いのだろうか。その隣では同じくハムバンを齧りながら桂城彰少尉が立っていた。二人の眼前にある庭園はよく整備され、その剪定された植物の数々は一目見るだけで美しい。遠くには鎌倉の海も見える。もっとも、その手前に広がるのは数々の戦いで出来たクレーターとボロボロの廃墟ばかりで絶景とはとても言い難い。この学院だけが別世界のように思える程だ。
「いえ、大尉。だって、ここの生徒はある意味凄まじい。上級生を先輩と呼ばずに『○○様』とか『お姉さま』とか呼んでいるし、生徒間の挨拶なんて『ごきげんよう』だ。まるで漫画か何かに出てくる典型的なお嬢様学校みたいだ。それに対して飛行服を着た僕らの存在はここでは明らかに浮いている」
「フム。それはカルチャーショックってやつか？俺達はもしかしたら3次元から2次元の世界にでも飛び込んだかもしれないな。もっとも、確かめようがないが…これもジャックの言っていた不確定性ってやつに含むのだろうか」
　ここに不時着してから五日程。その間、地下の部屋に閉じ込められてひたすら尋問を受けたが、その後は別の部屋に移された。そこはどうやら教職員用の宿舎らしい。そして、今も定期的に関係各所からの尋問と情報交換を受けてはいるが、決まった時間内に指定された学院敷地内を出歩く事ができる等、比較的自由にはなった。しかし、未だに要監視対象である事に違いはなく、今もリリィとかいう存在であるこの学院の生徒がどこかから我々二人を監視しているだろう。
　リリィというのは…簡単に言えばヒュージとかいう化け物と戦う

超能力者の類らしい。マギとかいう特別な力を使うらしいが、詳しい原理やどういったものなのかはよく分からない。この学院はそのリリィを養成し、ヒュージと戦う為の学院と説明を受けた。ここの沖合にあるヒュージの巣らしきものからやってくるヒュージの上陸先はほぼ鎌倉であり、この学院は正にそれに対する迎撃の要だという事らしい。また、このような学校は国内各地に多数あるとの事だ。

自分達の世界で例えるなら、ジャムから地球への通路を守るＦＡＦ六大基地みたいなものだろう。

「まあ、ここが何次元だろうと飯は美味いし、入れるのが消灯後の夜中といえども風呂も大きい。あてがわれた部屋のベッドもふかふか。僕としては特に不満はない。それに未知の世界なんて面白そうだ、調べてみたい」

「少尉は好奇心旺盛である意味羨ましいよ。俺にはそんな楽しみを考える余裕がない」

深井大尉の一言に対して、軽く背伸びをしながら桂城少尉は言う。

「まあ、本来は深刻に事を考えないといけないのですけどね。帰る手段の手がかりがなかなか…それに向こうの深井中尉やブッカー少佐と、こちらとの間にはなんとなく壁がある気がする」

「フムン。まあ、無理もない。向こうから見れば俺達はやはり他人だ。それに、向こうの世界では対ジャム戦に一応のケリがついている。しかし、こちらは対ジャム戦の真っ只中。それだけに危機感の差がでかい、特にそれが顕著なのはジャックだ」

「少佐は憑依先のせいで責任がやたら重くなったから動きも鈍い、という問題ものしかかっていますけどね。なんて言ったって学院理事長の代行だ、無理もないでしょう。向こうの深井中尉に至っては雪風…いや、Ｂ―３にべったりだ」

あの後、ブッカーはこの学院の代表でもあり、権限も強いという生徒会上層部に今まで起きた内容を全て打ち明けた。ついでに俺達についても説明を行った。憑依のような現象に異世界からやってきた人物、ついでに同一人物が二人…当然、生徒会の面々はそれらの事象に困惑していたが、目の前にそびえ立つ現実を受け入れるしかなかっ

た。
　一方、俺達がこの学院内でどういう扱いになっているのかはよく分からない。一般の生徒には学院視察中の防衛軍関係者とでも説明をしているのだろうか。どの生徒もこちらを一目見る程度で関わろうとはしない。桂城少尉の例え通り、やはり俺達は異物に見えるのだろうか。
「現状、Ｂ―３側よりこちらの方が手数は多い。向こうと比べたら僕らにはレイフがある」
「フムン。しかし、だ。情報収集の手数は更に増やすべきだと思う。この世界の人材も戦力に加えよう」
「大尉がそう考えるなんて珍しい」
　桂城少尉が軽く驚きながら言う。
「ここはＦＡＦではない、少尉。よって、我が特殊戦司令センターによる支援も得られない。それならば、自分達で何とかするしかあるまい。それにこちらの世界の事情はさっぱりだ」
「ごもっとも。で、誰をスカウトするのです？政府の人間かこの学院の生徒会ですか。何故か３人も生徒会長がいるけども」
「いいや、もっと役立ちそうなのがいるだろう。あの眼鏡をかけた黒髪の…真島という生徒がこの状況では一番戦力になりうる。ここから見れば別世界の話であるジ・インベーダーを全部読破して、おおよそとはいえ内容を理解したんだ。只者じゃない」
「確かに。彼女はここでは研究から武器の開発、製造までなんでもこざれ…な天才だそうですよ。現にＢ―３の破損個所を修復しようとしているぐらいだ」
　フムと零が考えていると、声をかけられた。
「やあやあ、深井大尉に桂城少尉。呼びました？」
「いや、呼んではいない。君の噂話はしていたが」
　声をかけてきたのはちょうど話題に上がった真島百由であった。紙袋を抱えているが、その中身は大量の総菜パンらしい。一目見ただけでも数人分はある、買い出しの帰りだろうか？
「百由でいいですよ。名字で呼ばれるのはどうも堅苦しい気がしてし

まって」
「フム」
「で、私がどうしました？」
「今回の事態に対して君の支援を得たい」
「なるほど、そういう事ですね…ご安心を。私の研究にも関わるかもしれない以上、全力でサポートしましょう。大船に乗った気でいてください」
「研究？」
　桂城少尉はその言葉に首を傾げる。
「ええ、最近こちら側の敵…ヒュージがやたら狂暴になりましてね。その原因を色々探っているわけですよ。もしかしたら、その原因とあなた達に起きた現象がどこかで繋がっていたりしないかなー、って」
　それに対して百由はそう答えた。そして、桂城少尉は頷いて返す。
「なるほど。つまり、こちらでも何か妙な事はあったわけだ」
「ええ。よって、こっちもこっちで困っているのですよ。だから手がかりになりそうなものは片っ端から調べないと。あ、そうだ。ヒュージ迎撃戦でも見学してみます？」
　百由の思わぬ提案に深井大尉は軽く驚いた表情をする。
「唐突だな」
「ああ、いや。この世界の状況も知ってもらえれば、こちら側の事情も色々と考慮してもらえるかなあ、って思いまして」
「フムン。では、試しに観てみるか。現状の脅威と戦力を知ることは必要だ」
「でも、まずは腹ごしらえをしないと。お昼時だし」
　百由はそう言ってベンチに座ると、紙袋から総菜パンを取り出して食べ始めた。それを見た桂城少尉は唖然としながら聞く。
「まさか一人でそのパンを全部食べるのかい？」
「もちろん、研究は体力をとにかく使うからしっかり栄養補給しないと」
　百由は平然と答えると、紙袋のカレーパンに手を伸ばした。

Ｂ―１雪風の乗員二人は百由の提案を受け入れて動き出す。まずは、やはり情報収集だ。この世界の敵はいかなるものか、それを見極める為に。

同じ名前、されど別物

深井零中尉は百合ヶ丘女学院工廠科内の多目的格納庫で雪風のコクピット内に籠ってアビオニクス系の整備を続けていた。破損した機体のパーツ製作・交換、消耗品の補充・交換等は他の者に整備させる事を仕方なく許可したが、アビオニクスだけは許可していない。自分でやる、ここだけはよその連中に触らせるつもりはない。雪風を真に理解しているのは自分だけなのだから。

零はキーボードにコマンドを打ち、雪風の自己診断プログラムを起動させる。あれだけの戦闘を行い、核爆発の衝撃も受けたのだ。電子機器や各部品類に何らかの不具合が起きていても不思議ではない。既に数度実施しているが、念には念を入れて…である。そして、プログラムが起動した事を確認、後は結果を待つだけだ。そして、視線を上げる。視線の先には二機の機体がいる。一機は無人機、もう一機は有人機。とても信じられないが、あれが並行世界のメイヴ…雪風らしい。だが、機体の形状は自分の雪風とはかなり異なる。キャノピーはシンプルな形状。主翼はストレーキ付きのクリップドデルタ翼、尾翼は上下2枚2組で計4枚。この尾翼は全てが全遊動式でそれぞれ最適角に合わせて動くらしい。ストレーキにはカナードが2枚。エアインテークは機体上下に2つずつ。真っ黒な機体のキャノピーの下に小さく「雪風」と書かれている。こちらの雪風がスラリとした印象なら向こうの機体はスーパーシルフにどこか似た重量感のあるような印象だ。当然、機体としての性格も異なるだろう。無人機の方も機体形状はほぼ同様、見た目の違いはコクピットが無いぐらいだ。名はレイフというらしい。意味は「知恵の狼」だそうだ。

そして、向こうの機体も同じく整備を受けている。この学院の生徒やこの国の防衛軍整備員や関係者が整備を実施しているが、今は休憩中なのか監視役を除けば誰もいない。この世界の連中がやたら協力的なのは向こうの雪風が電子的に何かをやったからだと聞いた。おそらく、あの様子ではかなり荒っぽい手を使ったのだろうが。もっとも、その影響でここに留め置かれているとも言える。この国の関係機

関や防衛軍、そのどちらも受け入れを拒むような対応であり、結果として今に至ると聞いた。どうも厄介者どころか危険視までされている節がある。
　そして、ふと零は興味を持った…向こうの機体のコクピットはどうなっているのだろう。そんなちょっとした興味である。どうせ、ここにはブッカー少佐もいる。ただ、外見が別人という奇妙な状況ではあるが。
「おい、ジャック。あっちの雪風にちょっと乗ってくる」
「何？勝手に乗るのか？」
「どうせ友軍だ。問題ないだろう。それにパイロットも機体も名前は同じだ」
　そう言うと、零は雪風のコクピットから降りる。目指す先はあの機体、B―1雪風である。監視役の学生がこちらを睨む。零はそれを一目見ると、視線をそらした。だからどうした、これはお前には関係のない事だ。心の中でそう呟きながら。
　そして、整備用のタラップを登ってコクピットをのぞき込む。機内レイアウトもやはりどこか違う、キャノピーの形を見れば当然か。そして、足を乗せる位置を確認しながらコクピットに座る。座り心地はしっくりくる、別世界の姿かたちが同じ自分が乗っているのだからこれも当然か。そう思って正面を見る。すると、メインディスプレイの電源が勝手に入った。こいつにもパイロットの様子を感知するセンサがついているのだろうか。そう思っていると、文章が表示された。
〈あなたはB―3のパイロットか？〉
　零はその表示に軽く驚きながらも「そうだ」と整備用に繋いであったキーボードに入力する。
〈では、質問がある。あなたはジャムについてどう思うか？〉
　ジャム？それは当然敵だ。「敵である」と打つ。
〈不明瞭。あなたが持つジャムについての認識を知りたい〉
　その問いに零は考え込む。ジャムとは何か？こいつはそう聞きたいらしい。俺には荷が重い質問だ。答えがうまく出ない。よって、「それについて考えるのは自分の管轄外である」と打ち込む。

〈では、あなたは直接ジャムと接触した事があるか？〉
　その問いに嫌な記憶がいくつも蘇る。ジャムと交戦した数々の経験、ジャムがコピーした人間との記憶…「ある」
〈それはどのようなコミュニケーションであったか？〉
　コミュニケーションだと？こいつは何を言っている？俺に対してはジャム人間が騙そうとしてきた事や、襲ってきた程度だ。直接的ではない、間接的だ。それに、ジャムのコピーには自分にジャムという自覚が乏しい個体もいた。そういう例も考えると、とてもコミュニケーション等と言える代物ではない。雪風と電子的なやりとりはあったかもしれないが、それが具体的にどういうものなのかは人間には全容が掴めない。
「おい、零。どうした、じっとして」
「ジャック、こいつのディスプレイを見てみろ。だが、その前に…お前の隣にいる監視役だが、そいつには機体に近づく許可を出しているのか？」
　ジャックが憑依している理事長代行がタラップを上がってきた。その隣には一人の生徒がいる。先程、こちらを睨むように見ていた監視役だ。
「彼女にはこの場で起きる事を全て知る権利がある…この学院の生徒会長の一人だ。それだけの権限があるからな」
「ずいぶんと偉い会長様だな」
「その点はこの学院の特色みたいなものだけどな。まあ、それだけ彼女達は特別扱いされているんだ。ヒュージと戦っている分だけいろんな点で保障がある。給料みたいなもんだよ、零」
「なるほど。ＦＡＦの隊員にもそれぐらい優遇が欲しいものだ」
　すると、その生徒が話しかけてきた。長い髪を一つ結びにした髪型だ。そして、大剣のような物騒な物を背に抱えている。しかし、こうして考えると、ここの連中とまともに会話をするのはほぼ稀だったな、そう零は内心で思う。
「申し遅れました。私は出江史房、百合ヶ丘女学院で生徒会会長の職に就いています。よろしく、深井零中尉」

「ああ。しかし、監視役だろうとここでは俺やそこの理事長代行殿の指示に従え。機体の周りは危険が多い。うっかりケガをしても知らんぞ。あと、その物騒な代物は片付けろ。どこかにぶつけたりしたら大事だ」
　零は静かにそう返す。そして、話を本題に戻す。
「で、こいつのディスプレイを見てみろ。この質問の数々をどう思う？」
「やけに流暢な文章だ。向こうの特殊戦はこういうコミュニケーション用の機能込みでシステムを開発したのか？」
「だが、最初からそういう機能を盛り込んだ割には文章がぎこちないようにも思える…淡々としているんだ」
　その一言にブッカーが何かに気づく。
「確かにそうだ。む、これは…ＭＡｃＰｒｏⅡ？フォス大尉が使っている行動心理予測プログラムだ。そうか…分かったぞ。あのソフトの機能を使って文章を構築しているんだ」
「なんだって？つまり、この雪風は心理予測用のソフトウェアを使いこなし、自力でこの文章を考え出していると？」
「そうだ。この言い分だと、こいつには物事を考えるぐらいの知恵がある。多分だが、俺達の雪風に負けず劣らず利口といった具合だ」
　監視役である出江史房は二人の様子を見ていた。だが、どうも彼らは困惑している。戦闘機の中でいったい何をしているのか？そう思った彼女もコクピット内のディスプレイを興味本位でのぞき込む。
　そして、ディスプレイに更なる文章が追加される。
〈回答不能か？私の知るジャムとあなたが知るジャム、それが同一の存在であるのか不明である。よって、わたしはそれについての情報を求む〉
「これは…この雪風は何を知りたいと言うんだ」
「俺達が戦っていたジャムとこの雪風が戦っているジャム、それが本当に同一の存在なのか…それを知りたいと。難しいな、俺達はこいつが戦ったジャムを知らない。これはお互い様だから話がかみ合わないのは当然だろう」

「こういうのはデータが無ければ主観の話になる。曖昧だ」
そして、零は文章を打ち込む。「こちらはそちらが戦ってきたジャムを知らない。よって、どのような違いがあるのか分からない」と。
〈その点については深井大尉の許可があれば、ある程度の情報提供をすることが可能である。よって、そちら側の情報提供を求む。無論、これは対等な情報交換が前提である〉
零はその一文を見て思う。こいつは一人で交渉事をやっている。乗員の助けも借りずに…こいつはただのコンピュータではない。まるで底知れぬ巨大な怪物だ。そう思った零の背に汗が出る。
〈特殊戦司令部やＳＳＣ、ＳＴＣの支援も無いこの空間において、現有戦力のみでは自己の生存を維持する事しかできないと私は考えている。帰還する為には幅広い情報が必要である。よって、この空間にある可能性を探し、不確定性を消す事が最も効果的な解決策である〉
「可能性に不確定性だと？」
「なんとも曖昧な表現が出てきたな。これの意味するところがさっぱりだ」
〈無論、情報が必要なのはこの空間にいる未知の生命体や関連する事象についても、である。よって、この空間に所属するそこの人物にも協力を求めたい〉
自身に向けての文章が表示され、出江史房は困惑する。
「私にも協力を？…理事長代行、いえ…ブッカーさん。このコンピュータは何を求めているのですか？」
「今はまだ分からない。この雪風は俺達の雪風とは大きく違う。見た目だけじゃない…とにかくだ、これで言えることは一つだ。向こうの連中にもっと細かく話を聞く必要がある。出江くん、乗り掛かった舟だ。君にも協力してほしい」
そして、生徒会長の一人である出江史房は困惑しながらもその要請を飲んだのであった。
こうして、Ｂ―３側の情報収集行動が始まった。
〈わたしは会議を望む。この事態に関係する人物全てが参加する会議

である〉

異様な接触

「はあ、疲れたわ…」
　生徒会長の一人、秦祀はそう呟きながら自室のベッドに倒れこむ。
「ずいぶんとお疲れのようね」
　そして、そのルームメイトである2年生の白井夢結が声をかける。
「色々ありすぎてもうボロボロよ」
「お疲れ様。生徒会の仕事は今そんなに忙しいの？」
「ええ、ちょっと…機密だらけで詳しくは言えないけど。来客の対応がね」
　ベッドに倒れこんだままの祀の一言から、夢結はいつから彼女が忙しくなったのかを考える。
　そう、あれはあの日からだ。自分たち一柳隊が出動し、その帰り道に不時着した戦闘機を救援しようとしたあの日である。その日から学院内はどこか慌ただしく、外部からの車両の出入りもやたらと増えた。もっとも、一般の生徒にはそんな変化は無縁であり、普段通りに過ごしている。しかし、生徒会等は激務が続いているらしい。いったい、自分たちの知らぬところで何が起きているのか？夢結はそう考えながらも消灯時間に合わせて部屋の電気を消した。明日は一柳隊が当番で一日待機せねばならない、早く寝なければ。そんな事も考えながら。
　そして、その翌日。
「眠い…」
「ミリアムさん、どうしました？ずいぶん眠そうですが」
　ミリアム・ヒルデガルド・ｖ・グロピウスが大あくびをしながら一柳隊の控え室に入ってきた。それを見た他の面々は心配そうに聞く。
「いや、大丈夫じゃ。昨晩急に図面を描けと百由様に色々押し付けれてな…それで睡眠時間がガクッと削れてしまったわけじゃ。あんな炭素繊維複合材でできた翼みたいな部品、何に使うのやら」
「大変そうですねえ」
　それを聞いた一柳隊のメンバーである郭神琳が呟く。

「いやいや、面倒じゃったわい。しかし、最近どうも上級生がみんな徹夜してなにかやっておってのう」
「なんでしょう、何か工廠科でありました？」
「さあ？じゃが…みんなやばそうな笑みを浮かべつつ、目が血走っていてとても関わりたくないわ」
「さっき翼みたいな部品とありましたが。まさか、飛行機でも作っているとか…」
「いやいや、まさかそんな…いや、百由様なら何かの拍子にやりかねん」
　そう言うと、ミリアムは栄養ドリンクの蓋を開けた。一柳隊の待機時間まではまだ時間がある。少し休もう、そう考えながら。

「さて…ここで見学か」
　深井零大尉と桂城少尉は廃墟と化した鎌倉の街中にまで来ていた。見学スペースとして指定されたのは廃墟の屋上である。廃墟の中は荒れ放題。ボロボロの階段を上がると、屋上にはご丁寧にリゾートかカフェの店先にあるような大きな日傘と洒落たテーブル、椅子まで用意されている。そして、その隣にはクーラーボックスも置いてあった、何が入っているかは分からないが。周囲を見ていると、そこに百由がやってきた。
「やあやあ、深井大尉に桂城少尉。時間ぴったりですねえ」
「この日傘はなんだ」
「待機組の班がいつも色々持ち込んでいるので、お二人の分もついでに置かせていただいただけですよ。あ、何か飲みます？色々入っていますよ」
　ほう、と零が呟く。そして、飲み物のリクエストを言う。
「それなら、冷えたビールがいいな」
「あー、その…アルコールはちょっと…」
「だろうな、冗談だ。コーヒーはあるか？」
「ええ、缶コーヒーですけどいいですか？」

「うちのブリーフィングルームに置いてあるコーヒーよりうまければなんでもいい」
　そう言うと、零はコーヒーを受け取って椅子に座る。一方、桂城少尉はクーラーボックスの中を覗き込んで、缶のコーラを取り出していた。
「で、ここで見学か」
「ええ、ここなら上陸してくるヒュージがよく見えますので。それに待機組のレギオンも陣取っていますからねえ。何かあっても一安心ですよ」
　そう言うと百由は指をさす。その先には別の日傘とテーブルがあった、そこでその待機する連中が屯するらしい。まだ誰もいないが、テーブルの上には茶菓子が用意されている。待機でなければただの茶会だろう。そんな事を考えながら零は海を眺める。すると、階段の方が賑やかになってきた。待機組の班とやらが来たらしい。関わるのも面倒だ、零はそのまま海の方を見る。テーブルには双眼鏡も置いてある、これで見物しろという事だろう。用意のいい事だ。桂城少尉は既に椅子に深く腰掛け、コーラの缶を開けてのんびり見物する気満々だ。
「あっ、百由様。ごきげんよう」
　屋上に上がってきた一団、それはレギオンの一つである一柳隊だった。その中の一柳梨璃は百由を見かけるとにっこりとした笑顔で挨拶する。
「あら、ごきげんよう」
「どうしたんですか？こんな所で」
「ええ、ちょっと来客にヒュージ迎撃の見学を、ね。それの付き添い」
「なるほど。ああ、あそこの方々ですね。うん？」
　それを見た梨璃は首を傾げる。その二人組の姿はどこかで見覚えがあったからである。そして、わずかに考えると、脳裏に黒い戦闘機の姿が思い浮かぶ…そして、思い出した。
「あっ、思い出した。この前の不時着した戦闘機のパイロットだ」
「ああ、そういえば…なんでここにいるのでしょう？」

二川二水が首を傾げながら言う。それに対して百由が答える。
「ええ、ちょっとねえ。異世界人に対ヒュージ戦と実物のヒュージを見てもらおうかと…あっ」
「…異世界人？」
百由はふと漏らしてしまった一言で頭を抱えながら唸る。
「しまった、疲労感でついうっかり口が滑った…ほほほ。いや、何でもないのよー。ただ、あの人達がちょっと変わり者だからつい、ね」
「怪しい」
「ああ、あれは明らかに動揺している顔じゃな」
一柳隊の視線が百由に刺さる。
「あはは…いや、その。これは機密なんでどうかご勘弁を…」
百由が引き攣った笑みで話を誤魔化そうとしていると、誰かがポツリと呟いた。
「フムン、やはり俺達は機密扱いか」
その一言で皆の視線が別の方向へと移る。その先には二人の男性、例のパイロットだ。梨璃が質問を飛ばす。
「あなた達はいったい何者なんですか？」
「俺達か？フム…お前達には関係ない、ただのフェアリイ星人さ」
「えーと…宇宙人？」
「冗談は程々に…見たところどこかの軍人、パイロットでしょう？所属、氏名、階級を聞いてもいいかしら？」
それを聞いた夢結は睨むような視線を飛ばしながら問う。彼らが不審な人物にしか見えないからである。そして、夢結はＣＨＡＲＭ…ブリューナクの切っ先をその謎のパイロットに向ける。
砲と剣を一つの武器に纏めたその独特な形、砲の口径は人間が扱うには大きい部類。先端には木すら叩き切れそうな程の大きな刃が付いている。しかし、この武器のような物に例え本物の刃が付いていなくても、このようなサイズの金属の塊で思い切り叩かれればそれだけで無事では済まないだろう。それを見たパイロットはそう考えを巡らせ、フムンと呟く。そして、返事を返した。
「フェアリイ空軍戦術戦闘航空団、特殊戦第五飛行戦隊所属、深井零大

尉。日本語は最近猛特訓してやっと思い出したんだ、そういう身振りを交えた難しい表現は使わないでほしい」
「そうかしら、実にシンプルな内容だと思ったけれど。しかし、聞いたことが無い国名ね」
「国名じゃない、フェアリイは星の名前だ。これが嘘だと思うなら、お前らの理事長代行殿に聞くといい」
「百由、これはどういう事？説明してちょうだい。このご時世、ガーデンやリリィ関係の技術や情報を狙う胡散臭い組織は掃いて捨てる程あるわ。この連中もその類？」
　話を振られた百由は頭を掻いて唸る。夢結と零の間には殺気が漂っていた。
「百由様！このままだと収まりがつきません!!なんとか事情を話してもらう事はできませんか？」
　慌てた梨璃が百由に言う。百由は「むむむ…」と唸り、数秒悩んだ後に大きなため息を出しながら言った。
「はあ、仕方ない…いい？これから話す内容は絶対に、他の誰にも話しては駄目よ。もしも、誰かに言ったら2週間は謹慎処分になると思ってね」
　それを聞いた一柳隊の皆は頷く。そして、百由は語る。
　一柳隊が遭遇した謎の戦闘機、それは異世界から何らかの事故で飛ばされた機体である。そして、その異世界ではヒュージは存在せず、ジャムという敵対的な地球外生命体と人類がフェアリイ星という惑星で戦っている。そして、彼らはそのジャムの大侵攻の最中、彼らの世界の地球を目指して超空間通路に飛び込んだところ、この世界に飛ばされてしまったという。
「とても信じられない。映画か何かの話のようだわ」
「でも、本当の事なのよ。この世界にあんな航空機は無いもの。そして、他の件も含めて信じざるを得なかった」
「どうしてですか？」
　百由の一言に梨璃は首を傾げる。
「理事長代行にも異変が起きたの。私の目の前で」

「ええっ!?」
「その起こった事象について物凄く分かりやすく説明すると…理事長代行には今別人が憑依したような状態になっているわ。記憶は両者のものが同居しているような感じだけど、人格はその別人。その人物はちょっとややこしいけど、立場上はそのパイロット達の上官と同一人物みたい」
「えーと…そんな事が本当に起こったんですか?」
「ええ。私がこの目で全て確認したわ。でも、ここからの話はもっとややこしいわよ。混乱しないように」
そして、百由は言った。理事長代行に憑依している人物とあのパイロット達はちょっと…しかし、決定的に異なる点がある、と。
「?」
一柳隊はその一言を聞いて一斉に首を傾げた。
「まあ、そんな反応にもなるわよね。並行世界って聞いた事ある?」
百由のその言葉にミリアムが反応する。
「お、知っておるぞ。漫画とか映画のＳＦものでは定番のアレじゃな」
読書が趣味である夢結と神琳もそのような作品を読んだ記憶があるのか同意するように頷いた。そして、百由も頷きながら語る。
「そう、その通り。ＳＦとかでよく出てくるアレよ。それぞれ違う可能性を辿った世界が枝葉のように広がって無数に存在しているという説。で、今回の事例はまさにそれ。あのパイロットと理事長代行の中にいる人はその似たような別々の世界からそれぞれやってきた。だから、最初に相手が何者か分かっていても、話が全く噛み合わないなんて事が起こったのよ。で、それ絡みでもう一つ事象が起こってね」
そして、百由は言った。そこにいるパイロット、深井零がもう一人現れた、と。それを聞いた夢結が疑問を言う。
「同じ人間がもう一人?そんな事起こりえるの?」
「現に起きてしまった以上、否定する事なんて不可能よ。そもそも、ドッペルゲンガーじゃあるまいし…二人並べても何も起きていないわ。更に戦闘機ももう一機現れた、同じ名前で型式も同じだけど形は

大きく違う。まさに並行世界というものを感じ取った気がするわ」
　そして、今まで会話に参加していなかった人物の声が聞こえてきた。
「まあ、似たような…と話があったけど、例外もある。例えば…僕やレイフだ」
　その声がした方向に皆が視線を向ける。そこにはもう一人のパイロットがいた。
「僕はフェアリイ空軍戦術戦闘航空団、特殊戦第五飛行戦隊所属、桂城彰少尉。そこの深井大尉の部下だ。なぜ、僕が例外か。説明すると、向こうの世界にはどうやら僕はいないらしい。いや、もしかするとどこかにいるのかもしれないけど…向こうの少佐や深井中尉は僕の存在を知らない。よって、君らから見れば二つの世界はそれぞれちょっと違う並行世界に見えるかもしれないが、当事者である僕らから見れば大きく違う世界なんだ。だからこそ、困った事になっているけど」
　それを聞いた百由は言う。
「まあ、そこは価値観の違いって事で。で、私が説明できる内容は大雑把だけどおおよそこんな感じ。という事で、夢結はＣＨＡＲＭをさっさと片付けてちょうだい。その人達は一応、学院と国が諸々の許可を与えている安全な人物よ」
「納得はできないけども、とりあえず…ね。証拠が無いから全て信じることはできないわ」
　夢結はしぶしぶといった様子でＣＨＡＲＭの切っ先を下した。
「困ったわねえ。証拠…雪風でも見せるしかないかしら」
「雪風？」
「この人達が乗っていた機体の愛称。私や防衛軍でも匙を投げるようなコンピュータを載せているのよ」
「人の機体を勝手に証拠品にするのはやめてくれ」
　二人の会話を聞いた零が言う。
「それに、本来の目的を忘れてもらっては困る。俺達はこの世界の脅威がどんなものか知る為に今ここにいるんだ。話が明後日の方向に進んでは本末転倒としか言いようがない」

「そうね。まずは本題から、ね」
そして、零は海の方向に視線を向ける。これで静かになるか、そう思いつつ缶コーヒーを一口飲んだところで二水の声が響く。
「アールヴヘイム、多数のヒュージと接敵しました!!」
そして、遠くの方から射撃音と爆発音が聞こえてきた。いよいよ戦闘開始、この世界での情報収集活動開始である。

花々の戦い

「ヒュージ確認。ラージ級と思しきものが海上に1、ミドル級6体とスモール級…数えきれない数が現在上陸中。アールヴヘイム、交戦開始しました！」

零と桂城少尉は双眼鏡で戦闘の観戦を始めた。大量の銀色の物体が海から浜辺へと押し寄せているのが見える。サイズはバラバラ、足は3から4本のものが多数。中ぐらいのサイズは丸っこい形状に足のような物が生えている、大きさは直径2～3ｍだろうか。そして、小型のものは全長が1～2ｍ程度に見える、形状は例えるならば円柱を横倒しにしたような形だろうか？4つ足でのそのそ歩く。そういったものがぞろぞろと歩いている。その行動には戦術性も何もない、ただ前へと突き進んでいるような単調な動きである。

「あれがヒュージとやらか、機械ではなさそうだ」

「ええ、見た目はともかく…動きは生き物のそれですね。色は銀色だ、何でできているんだろう」

そして、それを迎え撃つ勢力が攻撃を始める。それはレギオンと呼ばれるリリィの部隊。この学院では10人前後の人数から構成されているという。例えるならば分隊のようなものだろう、前衛と後衛におおよそ分かれて行動しているらしい。銃撃と斬撃、そのような攻撃でヒュージとやらの大群を刈り取っていくような勢いで倒していく。跳躍して建物を飛び越え、そのままの勢いで斬り伏せる。跳ね飛んだ後に空中で姿勢を安定させながら撃つ…それはまさに人間離れした動きである。

「流石は百合ヶ丘のトップレギオンであるアールヴヘイム！引き込んだスモール級の群れを十字砲火であっという間に片づけていきます。おお、やっぱり凄い!!」

隣で二水という生徒が聞いてもいないのに状況や用語の内容を逐一説明し続けている。やたらと力の入った説明、最早執念を感じる程だ。これはたまにいるマニアというやつだろう。そんな彼女に若干うんざりしながら、零はＦＡＦ語で桂城少尉に話しかけた。会話の内

容を周囲に聞き取られないようにする為である。よりにもよって、待機組のレギオンである一柳隊とやらが興味本位で自分達の周りに集まっているのだ。
「少尉。この生徒は何故、双眼鏡も使わずに状況を把握できるのだろうか？」
「さあ、分かりません。とんでもなく視力がいいのかも」
「あれだけ身体能力を上げる事ができるのなら、不思議ではないか」
「あれは、彼女のレアスキルと呼ばれる力の効果ですわ。お客人」
　はたから流暢な英語が飛んでくる。零達が話すＦＡＦ語は英語を簡略化したような言語である。つまり、英語ができれば聞き取る事は容易であった。考えが甘かったと零は思う。改めて周りを見回すと、このレギオンの人員は思いの外、多国籍な構成であった。
「そのレアスキルとは？」
　零はその英語で話しかけてきた生徒に聞く。
「素質のあるリリィが持つ事の出来る特殊能力…と言えば分かりやすいでしょうか。おや、失敬。私、楓・ジョアン・ヌーベルと申します。以後、お見知りおきを。ええっと、深井さん？とお呼びすればいいでしょうか？」
「よろしく、深井大尉でいい。で、その特殊能力とやらで視力を強化しているのか」
「厳密には違いますわ。さて…英語と日本語、どちらで解説した方がよろしいでしょうか？」
「どちらでも。好きな方でいい」
「では、日本語で。彼女の場合は鷹の目というスキル…これは上空から地上を見下ろすように辺り一帯を見る事ができるスキルですの」
「垂直に？上空に偵察機やＵＡＶなんかを飛ばしているわけでもないのにか。超能力だな」
　零は双眼鏡を使って戦闘の観察を再開する。一方、その隣では梨璃が楓に先の会話について聞く。
「楓さん、英語で何を話していたの？」
「二水さんが何も使わずに戦場を見通しているのが不思議だと申して

いたので、どういう力か説明しましたの」
「ああ、鷹の目…確かに説明しないと分からないもんね」
「しかし、あのお二人の英語…どうも違和感が」
「違和感？」
「ええ、意味は分かるのにどうにも表現が薄いと言いますか…片言ってわけではないのですけど、不思議な感じでして」
「それは、あれが厳密には英語じゃないからさ」
　その会話に桂城少尉が答えを返す。
「あれは通称ＦＡＦ語、英語がベースだけど不要な文法なんかはバッサリ削られている。要は意味さえ通ればいいという言語だ」
「意味さえ通れば…異世界ではどうしてそんな奇妙な言語を？」
「どこの誰でも戦争できるように、だよ。すぐに言葉を覚えてジャムと戦えるように」
　桂城少尉の話を聞いた梨璃は、誰でも…と呟いてから言った。
「そちらの世界は大変そうですね…」
　それを聞いた桂城少尉は苦笑いしながら返事を返す。
「君らの世界の方が大変なんじゃないかな」
「え、でも…宇宙人と戦争しているってさっき聞きました。だから…もっとひどいのかなって」
「さて、どうかな。僕らの世界の地球は呑気そのものだから。ジャムとやりあっているフェアリイ星はともかく…でも、こういう人が跳ね回って直接化け物と戦うような戦場とはかなり違うって事だけは確かかな」
　桂城少尉はそう言うと戦場に視線を向ける。こんな会話をしているうちにヒュージの数はかなり減っていた。残るはほぼ大型のヒュージのみ。
「ラージ級です！上陸してきました!!でも、形が妙です…またレストアですかね？」
　二水が叫ぶ。
「彼女の言うレストアというのは、戦闘で傷ついたヒュージが一度ヒュージネストに戻り、そこで修復を受けた個体の通称。戦闘経験を

持つから面倒な個体が多いのよ。しかし、表面がやたらごつごつしているわね…またＣＨＡＲＭか何かでも刺さっているのかしら」
　百由が解説するように言う。その個体は比較的大きなものだ。形が変だというが、どこが変なのかはよく分からない。その形を言い表すのならバケツをひっくり返したような形状で、その上面にはごつごつとした突起が大小複数ある。大きさは目測で全高が１０ｍ以上、全幅も２０ｍ以上あるだろうか。そして、金属の鎖のような見た目の触腕を何本も振り回している。周りを飛び回るリリィと比較すると明らかに巨大だ。
「フムン、人力であんなものを倒せるのか？」
「大丈夫、今戦っているアールヴヘイムはこの百合ヶ丘でも優秀なレギオン。すなわち、世界でも有数の強力な戦力よ。そう簡単に負けたりしないわ」
「なるほど、それがどの程度か分からんが…高性能なら期待してみよう」
　そして、桂城少尉も特大の化け物を見てその感想を述べる。
「僕なら迷わず航空機から２０００ポンドの徹甲爆弾を叩き込むよ。あんなのと生身で戦うなんて御免だな」
「右に同じ」
　零も頷きながら言う。魔法とやらがどんなに強力であろうと、爆撃や砲撃で遠距離から攻撃すれば安全だろう、零はそんな考えを浮かべる。しかし、戦場にいるリリィ達は臆することなく撃ち、そして、斬りかかる。たちまち、ヒュージの触腕が一つ斬り落とされる。その影響か、ヒュージは怯んだように動きを止める。そして、リリィ達が四方八方から集中砲火を浴びせ、被弾痕から青い液体が噴き出す。あれはあの生物の体液だろうか？そして、ヒュージ上面の巨大な突起がはじけ飛ぶ。そのはじけ飛んだ跡には金属質の大きな物体があった、明らかな人工物である。それを見た一柳隊の王雨嘉がポツリと呟く。
「あれは…飛行機の残骸？」
　零は確かにその物体に見覚えがあった。そして、反射的に叫ぶ。
「シルフィードだ!!あれを見たか、桂城少尉！」

「ええ、あれは…間違いない、シルフィードの右主翼ですよ。おや、ＦＡＦのマークもある」
「なんですって!?」
ジ・インベーダーに出てきた機体の名前が聞こえてきて百由は仰天する。そして、双眼鏡でその様子をまじまじと見ると、通信機に向かって叫ぶように言う。
「アールヴヘイムへ！そのヒュージに刺さっている航空機の残骸についてどうしても確認したいの。出来る限りでいいから、そのヒュージは原型を保ったまま倒してちょうだい！」
「あら、百由様？ごきげんよう。しかし、それは…なかなか厄介で刺激的なお願いですわね。まあ…可能な限り、善処しますわ」
アールヴヘイムの遠藤亜羅椰が返事を返してきた。百由はため息を付きながら通信を終える。
「やれやれ、これで残骸はなんとか回収できそうだわ。ノインヴェルトなんて撃ち込まれたら跡形も残らないでしょうし…」
「いいのか？」
「ええ、私も興味があるから。無理難題を押し付けたアールヴヘイムには…まあ、後で何か埋め合わせしておけばいいでしょう」
零は端末を取り出す。
「こちら深井大尉、Ｂ―１へ。友軍機の残骸を発見した。ブッカー少佐…そして、Ｂ―３とその乗員にもこの旨を連絡せよ。また、Ｂ―１３にもデータリンクにて伝達」
そして、端末には〈Ｂ―１、了解。実行〉と表示が出る。そのやり取りを梨璃は物珍しそうに眺める。
「さて、大尉。これでこの世界とフェアリイ星がどこかで繋がったという根拠が増えたわけだ。残骸からデータを吸い出せればもっといいけれど」
桂城少尉が双眼鏡で様子を見ながら言う。
「少尉、できそうだと思うか？」
「ええ、微妙ですね。ここから見た限り、コクピットは無くなっているでしょう。あとはフライトデータレコーダや機体各部の電子機器。

そして、そのログが残っているかどうか…」
一方、戦闘の情勢は微妙に変化していた。百由の要請によって、攻撃の勢いが鈍くなっていたのだ。攻撃をやり過ぎては問題の残骸を破壊してしまうだろう、そんな心理が彼女達に働いているのである。
それを見た梨璃が動く。
「百由様、私達も出ます！あれを回収できれば、このお二人が元の世界に戻る手掛かりになるかもしれないのですよね？」
「え、いいの？」
「はい！みんなも大丈夫？」
そんな梨璃の問いに一柳隊の面々は軽く笑みを浮かべながら頷く。
「隊長命令、了解ですわ。喜んで」
「反対しても止まらないでしょう、お供しますよ。梨璃さん」
「まあ、仕方ない。人助けだ」
「ありがとう！みんな」
その返事を聞いた梨璃は満面の笑みを浮かべると、そのまま自分のＣＨＡＲＭ…グングニルを手に取った。
「では…一柳隊、出撃します!!」
梨璃の号令が響き、９人のリリィが飛び出した。
そして、リリィ達が手負いのヒュージに次々と襲い掛かる。そこからは早かった。戦力が倍に増え、投射される火力は飛躍的に上がる。それによって、ヒュージは完全に足止めされ、前にも後ろにも動けなくなった。そこに夢結や梨璃が一気に接近、ヒュージの胴体を斬り付ける。それに続いて二つのレギオンの前衛担当であるリリィ達が代わる代わる攻撃を浴びせ、後衛のリリィ達も弾を次々と撃ち込む。そして、断末魔の悲鳴のような轟音を出しながらその巨体が崩れ落ちた。ついにヒュージを撃破したのである。
「シルフィードの残骸はなんとか回収成功、か。結局、穴だらけだが…贅沢は言えないな」
「ええ。粉々よりはましですね。しかし…彼女は何でもやりますね」
零と桂城少尉は撃破されたヒュージの残骸を見ながら言う。百由

は多数の人員と重機を引き連れてヒュージのサンプルとシルフィードの残骸回収作業を実施している為、この場から離れた位置にいる。
するとそこに、梨璃がやってきた。
「あの…深井さん。すみません、無傷で回収できなくて」
「深井大尉でいい。こういうのは戦っていない部外者がどうこう言えるものではない。形があるだけ御の字だ」
「ありがとうございます」
　そして、梨璃は零の目をじっと見て言った。
「それで、これは提案なのですけど」
「どうした？」
「深井大尉、お二人が帰る為の手掛かり探しを私にも手伝わせてください!!」
　その一言を聞いた零と桂城少尉は困惑したように顔を見合わせた。

情報を集め、考えろ

「深井大尉、お二人が帰る為の手掛かり探しを私にも手伝わせてください!!」

梨璃のその言葉に零と桂城少尉は困惑する。

「大尉、どうします?」

「どうすると言ってもな…」

自分達の問題は彼女には何も関係ない話である。それなのに、彼女は何故助けたいなどと言い出すのか。そして、零はその申し出を断ろうと口を開いた。だが、言葉を発する前に一柳隊の一員である安藤鶴紗が言った。

「断っても無駄だと思う」

そして、楓もそれに続いて言う。

「深井大尉、諦めた方がいいですわ。梨璃さんはこう見えて意外と頑固でして、一度言った事はなかなか曲げませんの。でも、そこもまた魅力で…」

「しかし、彼女には関係のない事だろう。何故手伝おうなんて言うのか」

そして、梨璃は言う。

「せっかくリリィになったんです。だから…困っている人は一人でも多く助けたいんです」

零は梨璃の目を見た。彼女の目はまっすぐこちらを見据えている。こいつは覚悟を決めたという目だ、こうなってはなかなか発言を曲げないだろう。すると、背後から声が飛んできた。

「いいじゃない、協力してもらっても」

声の主は百由であった。サンプル等を入れたジュラルミンケースを抱えている。どうやら作業を終えたらしい。

「それに、一柳隊は個性的だけど凄腕揃いよ。特にさっき、深井大尉へCHARMを向けた子…白井夢結、彼女は幾多の実戦経験を積んだ百合ヶ丘のエース。今回みたいな荒事が必要な場合だときっと頼りになるでしょう」

「フムン、確かに。生身であれと戦うのは御免だ。地上で調査なんかを任せるには最適か…」
「それに、機密を聞いてしまった一柳隊を巻き込んでまとめて協力者にしてしまえば、さっきの私の失言もうやむやにできる…はず!!よし、これで万事解決!!」
その一言を聞いたミリアムが叫ぶ。
「自分のミスをこっちにぶん投げおったぞ!」
「いいじゃない!あなた達も脅すような勢いで話を聞きだしたんだから…ここまで来たら一蓮托生よ!!」
零はそんなしょうもない口論に呆れながら学院へと歩き出す。本日の目的である情報収集行動は終わった、長居は無用である。すると、梨璃が駆けてきて聞いてきた。
「待ってください、深井大尉!さっきの話の返事は…」
「手伝いたいのなら、このまま付いてこい」
その一言を聞いた梨璃はにっこり微笑んだ。
「はい!深井大尉、桂城少尉…これからよろしくお願いします!」
そして、梨璃は背後へと振り返って嬉しそうな声色で叫ぶ。
「みんな、手伝っていいって!!行こう!」
面倒なことになってしまったが、実動の戦力が増えた。零はそう考えながら歩く。すると、隣から「待ちなさい」と声が飛んできた。自分に武器を向けてきた生徒、百由曰く百合ヶ丘のエースだという白井夢結である。その視線は刃のように鋭く、こちらを睨みつけている。そして、夢結は言った。
「私はまだあなた達を信用していない」
それに対して零はそっけなく返す。
「そうか。だが、それがどうした。お前がどう思おうとこの状況に変化はない。よって、俺達は帰る手段を探す為にただ行動し続けるだけだ」
そう言うと、零は再び歩き出した。夢結もその後ろ姿を見ながら歩き出す。すると、夢結の同級生であり、同じく一柳隊所属の吉村・Ｔｈｉ・梅が笑顔で話しかけてきた。

「あんな事言った割には協力するつもりなんだな、夢結」
「ええ」
「かわいいシルトが手伝うと言っているからか？」
「いいえ。協力関係と称して近くにいれば…万が一にでもあの連中がよからぬ事を企んでいた際にそれを阻止する為の実力行使がすぐにできる。そういう事よ」
「そ、そうか。間違っても物騒な事は考えるなよ…頼むから穏便に、な？」
そして、一行は百合ヶ丘女学院の工廠科格納庫へと向かった。

「立体投影のディスプレイにキーボードか、こちらの技術力は意外と高度だ。魔法のある世界なんて言うから水晶玉とか石板の記録媒体でも出てきたらどうしようかと思ったが」
「魔法…マギというものが見つかったのはヒュージが現れてからだからな。当然、この世界にはそれ以前からコンピュータがあるし、時代相応に発達している」
「なるほど」
特殊戦三番機雪風のパイロットである深井零中尉はこの世界で過去に起こった出来事やヒュージとの主な戦いに関する資料をコンピュータにて閲覧していた。周囲には理事長代行…ブッカーと百合ヶ丘女学院の生徒会長の一人である出江史房がいた。何故、彼らが資料を漁っているのかと言うと、それは別の世界の雪風…Ｂ―１との接触がきっかけであった。それによって、自分達の知るジャム。この世界の敵であるヒュージ。そして、Ｂ―１…雪風が戦ってきたジャム。それらがはたしてそれぞれ別の存在か、はたまた否か。それを探っているのである。
「こっちも南極の戦いが始まりか…しかし、これをとても生物とは認めたくないな。とてつもなく巨大な個体もいるし、光学兵器や誘導兵器の類まで積んでいる個体がいるんだろう」
「残念ながらヒュージはＤＮＡを持った立派な生物です。あんなに無

茶苦茶な存在でも…」
　零はディスプレイに表示された多種多様なヒュージの姿を見ながら感想を言うと、史房がそれに対して言葉を返してきた。
「こいつを最初に調べた生物学者は泡を吹いて倒れたに違いない」
　そして、零はため息をつきながら冗談を言う。
「だろうな、簡単に想像できる。でも、正体がおおよそ分かるだけでもジャムよりましだな」
　それを聞いた理事長代行…ブッカーは頷きながら笑う。
「結局、そのジャムとは何者なのですか？」
　その会話を聞いた史房が質問を飛ばす。それに対して、ブッカーは少し悩んでから答えた。
「分からない…そうとしか言えないな。あれが生物なのか、何でできているのか、それも謎だ。なにせ、撃墜しても残骸一つ残らずに消えてしまうのだから。まあ、少しでも興味があるのなら、後で雪風の記録でも見てみるといい。零、何かヒントになるかもしれない。彼女に記録を見せてもいいか？」
「俺がどう思おうと、上官命令には逆らえないな。でも、俺はこの資料を見ておおよそだが確信を得た。そいつもジャムの記録を見せたら何か確信を得るとは思う…む？」
　すると、零の手元にある端末が鳴った。Ｂ―３…雪風から何かメッセージが飛ばされてきたのである。零はそれを見た。そして、驚くようにブッカーに言う。
「ジャック、大変だ。Ｂ―１の乗員が友軍機の残骸を見つけたらしい」
「何!?」
　ブッカーも驚いた表情である。
「機種はなんだろうな」
「さて、シルフかファーンか…いや、待てよ。メイヴの形があれだけ違うんだ。向こうのシルフなんかもこっちとは違う形かもしれないな」
「確かに。俺達がそれを見ても何の機体か分からないかもしれない」
　零は頷きながら言った。見つかった残骸がどちらの世界のＦＡＦ機か。それは気になるが、Ｂ―１側の乗員がすぐ気づいたのだ。きっ

と、向こうの世界の機体なのだろう。零はそう結論付けた。
「では、それが届くのを待つとしよう。だが…そもそも、どこに落ちていたのだろう」

一柳隊一行は格納庫へと歩いていた。その道中、桂城少尉はその面々と世間話をしながら歩く。だが、世間話と言ってもそれは立派な情報収集であった。特に彼はＦＡＦ情報軍でロンバート大佐から諜報というものを徹底的に叩き込まれた人間である。餅は餅屋、何気ない会話の中からこの世界の情勢や元の世界との差異等、必要ありそうな情報をひたすら集めていく。
「へえ、君がこの隊の隊長なのか」
そして、桂城少尉は梨璃と世間話をしていた。会話をしたがらない一部を除き、他の一柳隊の面々とも話をしたが、どうやら国内のありふれた一般家庭の出身は梨璃と二水辺りぐらいのようだ。この国の世間一般の様子を聞くならこの二人がちょうどいいだろう。それに、二水は質問に対してやたら細かく説明してくるし、梨璃は自分達に対する警戒感がとにかく薄い。他人を疑わずにするりと距離感を詰めてくるような感じだ。それに対して、他の面々は大なり小なり警戒感を持っているらしく、その会話はどこか言葉を選びながら話をする感じでもあった。警戒気味の彼女達から情報を細かく聞き出すにはもう少しコミュニケーションを取っていく必要がありそうだ。
「そうです。本当はお姉様のレギオンだったはずなのに」
「一つ気になったんだけど…他の生徒は上級生を様って付けて呼ぶのに、何故君だけ上級生をお姉様って呼ぶんだ？」
「ああ…それはですね、この学院にはシュッツエンゲルの契りという制度がありまして」
「フム？」
「うーん…上級生と下級生が疑似的な姉妹のような関係を結ぶという感じです。上級生はシュッツエンゲル…守護天使としてシルト…下級生を教え導いていく、という制度なんです。で、私は夢結様とその

関係でして…なので、夢結様をお姉様って呼んでいるんですよ」
　あはは、とにこやかに話す梨璃とは対照的に、桂城少尉はポカンとした表情を見せた。話を聞いてその内容を理解するという動作が遅れたのだ。それはごく普通の学生生活ではまず味わう事がないような話を聞いた事によってである。これがカルチャーショックというものであろうか。
「お二人もコンビというか…相棒みたいなものなんですよね？」
　梨璃が質問してきた。
「まあ、そんな感じかな。パイロットは深井大尉、僕は後ろの座席で電子機器を操作する仕事さ」
「戦闘機の電子機器…全然想像できないな。この前、初めてタブレット端末という物を見たぐらいですから、そういう物に疎くて」
「タブレット端末を初めて見たって…今まで見たことが無かったのかい？」
「ええ、学院からレギオンに支給された物です。あー…でも、昔は誰でもそういう物を持っていたと楓さんが言っていたっけ…もしかして、そっちの世界ではありふれた物なんですか？」
「まあ、街中でごく普通に売っているぐらいありふれた物だな」
　どうやら、この世界では情報端末のような一部の電子機器が民間に出回っていないようだ。化け物との戦いで戦時下のような状況であり、物資や資源の供給を制限しているのだろうか？そうなると、他にも手に入りにくい物があるかもしれない…こういう点には注意せねばなるまい。梨璃の話から桂城少尉はそう考えた。
「やっぱり、戦闘機って事は空中戦でぐるぐる飛び回って戦うんですか？映画とかみたいに」
　そして、また話題が変わる。
「いや、僕らは偵察部隊だ。戦闘機と同じ武装を積んで同じように戦う事もできるから素人目には区別がつかないかもしれないけど」
「偵察…写真を撮るんですか？」
「それもある。でも、それ以外にも戦場に飛び交う電波を観測する事や、敵の動きを観察する事も仕事だ」

「へえ。なんだか凄そうです」
　そんな話に他の者も興味を持ったらしい。
「面白そうな話をしておるのう。その宇宙生命体とやらは電波を使うのか？」
　独特な口調、声の主はミリアム・ヒルデガルド・フォン・グロピウス。一柳隊の一員である。フォンというミドルネームが入っている事からドイツの貴族がルーツの家系なのだろうか？少し話をしたが、ＣＨＡＲＭというリリィが使用する武器を扱うメカニックを志望しているらしい。そういった事から今の会話に興味を持ったのだろう。
「ジャムはＥＣＭ…要するに妨害電波だって使ってくる。基本的に人間が使える技術は何でも使ってくると考えていい」
「その敵はヒュージよりも知恵がありそうじゃな。しかし、人が使える技術は何でも使えるというのは…その敵は宇宙人のような知的生命体なのか？」
「それすら分からない…僕らのような生命体かどうなのか、という事すらも。撃墜した残骸も消えてしまうし、ジャムとコンタクトする事も困難だ」
「まるっきり正体不明の敵…まるでアニメや小説でよくある設定みたいじゃのう。しかし、残骸が消える？ヒュージみたいにワームホールを使うのか？」
　ミリアムから衝撃的な単語が飛び出した。ヒュージは思った以上に脅威であるかもしれない…この世界が苦戦している理由が一つ見えた気がした。桂城少尉はそう考える。
「ワームホールだって？あの化け物はそんなものを使えるのか」
「使えるぞ。ケイブ…ワームホールで移動する事もあるのじゃ。じゃが、それがどこに出現するのか事前に探知する技術もあるし、妨害電波でその出現を妨害する技術も確立されておる」
「フム…なるほど。まあ、ジャムも超空間通路を使う。実際、僕らの世界の南極と別の惑星を繋ぐ超空間通路を作って地球に侵攻してきたんだ。でも、ジャムの残骸が消える原理はちょっと違う…完全に消滅する感じだ。だから、誰もジャムが飛ばす戦闘兵器が何で構成されて

いるのか知らないんだ」
「なるほど、ヒュージは生物である事は分かっておるからのう。その差は大きいのかもしれん…」
ジャムの脅威はそれでは済まない。だが、桂城少尉は深くまで語らなかった。あまり情報を出し過ぎても利点は無いからである。それに彼女達にフェアリイ星で起こっている事を一度に語って理解してもらえるかも分からないからだ。必要があれば今後話せばいいだろう。
そんな事を話していると格納庫にたどり着く。百由がセキュリティを解除し、巨大な扉が重々しく開く。そして、そこに並ぶのは黒い三機の航空機、その姿はまるでＳＦ作品の中から飛び出してきたようなものである。
格納庫には理事長代行と生徒会長の一人である出江史房の姿があった。そして、残り一人の人物の姿を見て一柳隊の面々から驚きの声が上がる。
それは、百由が話をした通り、もう一人の深井零がいたからであった。
「なんだ、そいつらは」
もう一人の深井零は冷たい視線を向けながら言った。

新たな出会い

「なんだ、そいつらは」
　もう一人の深井零が言う。そして、一柳隊の前に立つ深井零大尉はこう返す。
「こいつらか？現地協力者だ」
「協力者？だからと言って、よく知らない連中を機体の近くまで大勢連れてくるのはどうなのか」
「こいつらはあの化け物と戦う実戦部隊だ。地上で捜索等をしてもらうには最適な人材だろう。それなら今の実情を知っておいてもらった方がいいはずだ、その為にここへ連れてきた。だが、こいつらが不要だというのならば、中尉が自ら化け物蠢く地上で情報収集を行うか？」
　それに対して、もう一人の深井零は返事を何も返さなかった。途端に場が静まり返る。すると、一柳隊の面々に対して深井零大尉は言う。
「紹介しよう、あれが別世界の俺…深井零中尉だ。見ての通り、名前も姿も同じだから階級で区別した方が分かりやすいだろう」
　姿かたち、声も同じ。だが、雰囲気はどこか違う。そう夢結は感じた。
「まるでちょっと前の夢結みたいな話し方だったな」
　深井中尉の様子を見た梅が笑いながら感想を言う。そして、その感想を聞いた梨璃以外のリリィ一同は同意するように二度三度と深く大きく頷いた。
「みんな、待ちなさい。私はあんなに不愛想ではないわ。そうでしょう？」
　夢結はそれを見て慌てながら否定した。すると、別の人物の声が格納庫に響く。
「一柳隊が深井大尉の協力者に…そんな話は聞いていませんが、いつ決まったのですか？」
　タラップの上から史房が困惑したように言う。すると、史房の目に

百由の姿が映った。そのまま目が合うと、百由は苦笑いをしながらこう言った。
「そうですね、簡単にこの事態を説明すると…ごめーん、全部ばれちった！…えー、報告は以上です。生徒会長」
　そして、誤魔化すようにテヘッとウインク。しかし、そんなものを無視しながら史房は百由を睨む。
「あなたねえ…」
「いえ、あのその…これは不幸な事故でして…」
　滝のような汗を流しながら百由はじりじりと後退る。すると、校舎側のドアが開いた。百由は咄嗟にそちらを見る。だが、そこから現れたのは残りの生徒会長達だった。秦祀と内田眞悠理の二人である。そして、彼女達は格納庫内の様子を見て驚いている。理由はやはり一柳隊の存在であった。
「えーと…」
「何故ここに一柳隊が？まさか、百由…また何かやったのか？」
　二人の視線も百由へと集まる。
「この状況がばれたのは故意じゃないわ！これは事故よ、事故!!」
「百由様、わしを盾にするのはやめてほしいのじゃが…」
　百由はミリアムの影にサッと隠れながら言い訳を次々並べる。すると、咳払いが一つ。そして、格納庫内に低い声が響く。
「諸君、そろそろいいかな。さて…深井大尉、報告を聞きたいのだが」
　声の主は理事長代行であった。そして、彼は整備用のタラップから降りてくる。すると、深井大尉がラフな敬礼をして簡単な状況報告を行う。
「フムン。了解だ、少佐。深井大尉および桂城少尉、情報収集活動から帰還。真島百由の案内でヒュージの観察と対ヒュージ戦の視察を実施。なお、その戦闘中に友軍機残骸を確認。現地に展開していたリリィ二個部隊の協力を得て、ヒュージの撃破と友軍機残骸の確保に成功。我に損害無し。詳細は後程レポートにて提出する。以上」
「ご苦労」
　その会話を聞いていた夢結が理事長代行に質問を飛ばす。

「理事長代行、百由から全て聞きました。あなたの中に別人が憑依しているというのは本当でしょうか？」
「ああ、本当だ。俺はジェイムズ・ブッカー…元ＦＡＦ少佐だ。そこの深井零中尉の上官だった。なんと言えばいいか…ちょっと前に別世界からどういう訳か精神だけこの肉体に飛ばされたんだ。見た目で説明できるようなこれといった明確な証拠はないが」
「冗談ではないのですよね…」
「これが冗談だったらどれだけいいか…全て本当だよ。ここにある機体がみんな別世界から飛ばされたのも含めて、な」
　その言葉に一柳隊の一同は改めて衝撃を受けた。見た目は普段通りだ。しかし、話し方やしぐさはどこか違う。そんな事実がずしりとのしかかってきたのである。
「大尉。どこで何の機体を見つけたのか聞きたい」
　そんな中、深井中尉が深井大尉に対して静かに質問を投げかける。
「残骸はシルフィードの右主翼と胴体の一部、スーパーシルフではなくノーマルのシルフだ。どこにあったかというと…特大サイズのヒュージの背に刺さっていた」
「あの化け物の背に？」
「そうだ、中尉。だから、こいつらにその化け物を制圧してもらう必要があった。問題の残骸は搬送中のはずだ」
「しかし…どういう経緯でそこに刺さったのか、それが謎だ」
　深井大尉は頷いて言う。
「その謎はこれから調べるしかないな。もしかすると、帰る為のヒントにもなるかもしれない」
　それを聞いた深井中尉はふと話題を変える。
「そういえば、そちらの雪風は会議を望んでいるようだ。俺やジャック、そこの生徒会長殿に対してそういったメッセージを出してきた」
「会議だって？桂城少尉、どう思う」
　桂城少尉は軽く考えると言った。
「フム…雪風はこの前のように人間に対して何か提案したいのだろうか？いや…でも、この訳の分からない状況下で何を提案するのだろ

う」
「まず、雪風は何を望んでいるのか…それを考えねばなるまい」
「そちらの雪風は情報をとにかく求めている。この世界の敵がジャムかどうか。そして、俺達が戦ってきたジャムとそちらが戦っていたジャムが同一の存在であるか。それを知りたいらしい」
「フムン。なるほどな」
　深井中尉の一言で深井大尉と桂城少尉の疑問は解決した。これで雪風の求めているものは分かった。
「では、ちょうどいい。主な関係者はこの場に揃っているし、各々持っている情報をまとめる為の会議を開こうじゃないか。それでいいか、少佐？」
「ああ、大丈夫だ。だが、深井大尉。会議というが…どうやるつもりだ？」
　フム、と深井大尉は考える。そして、しばし間をおいてから案を出す。
「雪風に記録された映像を流そう。それを見ながら皆で考えるのはどうだろう」
「いい案だ。こちらの雪風の映像も出す。さて、百由君。映像を出力したいのだが…できそうか？」
「機体のコネクタに通信用のケーブルを繋いでいますから、向こうからデータを送ってもらえればおそらく可能かと。あー、動画のデータがどんな規格なのかが問題か…まあ、ちょっとやってみましょう。駄目ならその時に考えますので。さて、一柳隊のみんな。さあ、お望みの仕事の時間よ！手伝いなさい!!」
　会議をすべく、その準備が始まる。百由が指示を飛ばし、ケーブルや資料を抱えた一柳隊の面々が動く。そして、そんな中、夢結は百由に疑問をぶつけた。
「いくら相手が異世界人という存在とはいえ、工廠科や防衛軍が何故ここまで深く協力するのかが分からないのだけど…あんな戦闘機を弄ってあなたに何か得があるの？」
「もちろん、違う分野の機械からでも学ぶ事は多いわ。異世界の機械

ならなおさらよ。特に航空機は軽さと強度を両立しないといけない性格を持った機械よ。ＣＨＡＲＭだって人が持って使うから軽さと強度が求められる…その点での要求される性格は似ているわ。それに機体内部の回路設計や配線の配置、航空機はその点でも制約が多い。いろんな工夫が施されているものよ。そして、ＣＨＡＲＭにだってそういう制御系統は存在するのだから大いに参考になる…よって、こういったものはＣＨＡＲＭ開発のヒントになるかもしれないという事よ。まあ、そうは言っても肝心なレーダーや機体中枢には触れてもいないけどね」
「なるほど、工廠科も軍もみんな異世界の技術目当てなのね。それなら分かりやすい理由だわ」
「んー、それだけとは言えないのよね…」
　そう言うと、百由の作業の手が止まった。
「と言うと？」
「そこの機体は超が付くほどの高度なコンピュータを搭載しているのよ。それこそ文章を作って人間と会話することぐらい朝飯前なレベルと言えるほどの物が」
「それぐらいならＳＦでよくある人工知能みたいな類ではなくて？」
「あれはそんな程度で済む代物ではないのよ。まあ、これはこの機が不時着した日に起きた事だけど…機体内部を調べようとケーブルを配線。機体に対してアクセスを開始した直後にあの機体がこちら側のコンピュータやシステム、通信網を調べてきた。そして、的確に重要部を探り当ててきたの」
「学院のセキュリティは？」
「破られた。まるで電子的な生き物よ、別世界の違う進化を辿ったネットワークに対して易々と潜り込んできたのだから」
　作業を続ける一柳隊の面々は二人の会話に聞き耳を立てていた。どうにも二人の会話が深刻な様子であったからだ。
「流石に私も防衛軍のスタッフもそんな事態が起こって慌てたわ。そして、雪風…あの機体のコンピュータは一つの警告を飛ばしてきたの」

「警告？」
「ええ。機体に干渉する事をすぐに止めないと電子的攻撃および機体の自爆にて対抗する、って。で、その脅しが嘘ではないという証として、いくつかのシステムが実際に乗っ取られかけた。それが問題になったのよ。で、何が狙われたと思う？夢結」
夢結はそう聞かれて考える。真っ先に狙われるようなものは何か。
「ここの警備システム？」
「そんな小規模なものじゃないわ」
そして、百由は眼鏡をかけ直す。
「えーと、まず…国内の主要なインフラを管理するシステム類。国内外を繋ぐ通信網の制御機器。軍の防空警戒管制コンピュータ。衛星管制と制御のコンピュータ群。航空管制システム。それから…」
「ちょっと待って、それを全部狙ってきたの？」
「ええ。でも、まだあるわ…都内の守りの要であるエリアディフェンス。それを制御、維持する為のシステムが狙われた」
「そんな、まさか」
その百由の一言を聞いた夢結とその場の皆が絶句した。神琳はその衝撃のあまり、手に持っていたケーブルの束を地面に落とす程だった。そして、会話を聞いていた梨璃は一つの疑問を口にした。しかし、周りの緊迫感とは無縁ののんびりとしたトーンで。
「エリアディフェンス…えーと、なんでしたっけ、それ？」
「この重苦しい雰囲気でよくそれを聞こうと思ったな、お主…」
ミリアムが呆れながら言う。そして、夢結は頭を抱えていた。後で梨璃の学習内容に対する理解度を徹底的に確認し、片っ端から総復習させねばなるまいと決心しながら。
すると、背後からフムンと一言。
「なんだ、そのエリアディフェンスとやらは。艦隊防空という意味ではなさそうだが」
「面白そうだ。僕らもその詳細を聞きたい」
そこには深井零大尉と桂城少尉の二人が立っていた。そして、百由はため息をつきながら言う。

「ぐろっぴ、ちょうどいいから説明してあげなさい」
「その呼び方はどうにかならんか…仕方ない。他にエリアディフェンスを知らないという者はおるか？」
説明を押し付けられたミリアムが聞く。
「ごめん、私もよく知らない…」
鶴紗が少し恥ずかしそうに手を挙げた。

ヒュージはジャムか？

「じゃあ、説明しようかのう」
　ミリアムがコホンと咳払いを一つしてから話し始めた。
「ヒュージがケイブ…ワームホールで移動する場合がある。それは皆理解しておるな？」
「フムン、そいつは初耳だ」
　深井大尉が答える。
「あー、そうか。あの時は桂城少尉だけしか会話に加わっていなかったな…では、一から説明しよう。ヒュージの侵攻パターンは大きく分けて3つじゃ。まず、陸上か海からの侵攻。これは文字通り直接ヒュージが攻めてくる。次に、空中から攻めてくるパターン。これは飛行可能なヒュージが使ってくる手。これでネストやヒュージ制圧化の陥落地域から離れた地域にも侵入してくる。最後にケイブを使った侵攻、これはワームホールを使ってくる。空中から攻めてくるならレーダーや目視で探知できる可能性がある分、まだ見つけるのは容易じゃのう。しかし、ワームホールを使うとワープのようにいきなり現れる。つまり、通常ではヒュージの移動を探知できない。完全なる奇襲となる」
　ミリアムの説明を聞いた零は頷いた。そして、説明は続く。
「さて、このケイブ…そのままでは人類にとって大きな脅威じゃな。なにせ、ヒュージが何の前触れもなく突然現れるのじゃからのう。しかし、人類は対応策を見つけ出した。まず、ケイブ出現時に発生する特殊な粒子を捉えることで事前にそれの発生を探知する方法じゃ。しかし、それでも完璧とは言えない。探知できても常にそれの出現に備えた警戒網を広範囲に敷かねばならぬからな。よって、次に更なる対抗策を作り出した。それが話に出てきたエリアディフェンスというものじゃ」
「フムン」
「このエリアディフェンス、原理まではわしもそこまで詳しくない。よって、概要だけ説明するぞ。エリアディフェンスというものは妨害

電波を出し、ケイブが出現する際に出る特殊な粒子の発生をそれによって妨害するのじゃ。よって、その妨害電波が強く作用する場所では粒子の発生が阻害されてケイブ出現を阻止できる。これで東京のような主要都市や防備が必要な地域なんかはヒュージの奇襲攻撃から守られておる…じゃが、地形なんかの制約もあってなのか、この学院のようにエリアディフェンスを置いてもうまく効果が出ない所もある。まあ、大雑把な説明だとこんなものかのう」
「で、雪風はそれを叩き潰す用意があると脅したわけか」
「しかし、あの機体は何故エリアディフェンスが重要なものだと判断できたのか…」
「指揮系統と通信回線の規模。そして、データのやり取りの総量とそのセキュリティレベル…それでそのシステムの重要度におおよその目星をつけたのだろう」
「正直、そこの機体に電子攻撃でシステムの破壊なんて事ができるか分からんが…もしも、それをやられたら国内全体大騒ぎになるのは間違いない。防衛戦略が完全に瓦解するからのう」
その一言に対して、零は雪風を見つめながら言った。
「雪風ならやるだろう。それをやるだけの性能があるのだから」
そして、その一言に場が静まり返る。一連の話を聞いていた一柳隊の一同は自然と雪風へと視線を向ける。その機体に動きは全く無い…ただそこに鎮座しているだけだというのに、だんだんとその黒い塗装の機体がまるで生き物のように思えてきた。すると、百由がその沈んだ空気を払うように咳払いをする。そして、一言。
「さて、解説はこれでいいかしら。さあ、仕事再開！さっさと終わらせるわよ!!」
そして、作業は再開。皆はまた動き出す。機体と格納庫内の大型スクリーン間の配線は終えた。テストもそのまま終えて、スクリーンに映像を表示する事が可能という確認もできた。

そして、その作業が終わったという知らせを聞いて皆が次々とスクリーンの前に集まった。一通り集まったところで百由が言う。

「さて、お集りの皆様…会議とやらを始めましょうか。この会議、機械からの要求で開催という特殊なものではありますが…気にせずにどしどし発言しちゃってくださいね。意見と情報とアイデアは多い程いいので」
　そして、深井大尉が早速発言する。
「では…まず、この世界の化け物について考えよう。あれがジャムと同様の存在、もしくはジャムが関わっているかどうかについて、だ」
「一ついいか？」
　まず、深井中尉が手を挙げる。それに対して深井大尉は頷いた。
「俺は先程までここでこの世界の資料を色々と見た。そして、それらを見た結果、俺はこう確信を得た…あの化け物はジャムとは違う、と」
「何故そう思った？」
　ブッカーが質問を飛ばす。そして、深井中尉はそれに対して回答する。
「勘で分かる…俺がどれぐらいこの仕事をやって、ジャムの動きを見てきたと思っているんだ、ジャック。その体が持つ知識や記憶による価値観から一度離れて、特殊戦のブッカー少佐としての価値観で物事を考えろ。するとどうだ、ヒュージという化け物の動きに一貫した戦略や戦術があるように思えるか？」
「だが…零。この世界の人類がそういう傾向を捉えていないだけかもしれない。そう考えるとどうだ？」
「だが、それでもジャムとは違うと言える。ジャムなら人類に合わせて戦力や兵器の質を変化させてくる。だが、このヒュージという化け物は個体ごとに性質も形もバラバラでとにかく統一性が無い。それに性能も上下する」
「なるほど…確かに。百由君、どう思う？」
「私はジャムをあの本の内容以外に知りません。よって、安易に比較してどうのこうのとは言えません。しかし、ヒュージが多種多様な点は間違いなく事実ですね」
「では…深井大尉、ヒュージの実物を見てきた君の意見も聞きたい」
　深井大尉はフムと少し考えてから話し始めた。

「俺も中尉と同意見だ。あれはジャムとは無関係、俺もそう結論を出した。その理由を言おうか？少佐」
「頼む」
　そして、深井大尉は頷くと言った。
「あれは生物だ。ジャムとはその時点で違う」
「なるほど、実に分かりやすいな。だが、ヒュージがジャムの作った生物兵器である可能性は？」
「ジャムがこの世界に現れて攻撃したのだとすると…ジャムは間違いなく、最初にこの世界の機械へと真っ先にコンタクトするはずだ。ジャムにとっては人類とコンタクトするよりもその方が手っ取り早い。そして、人類が航空機や艦船、戦闘車両といった戦力を投入したのなら、それに対抗する兵器をまず出すはずだ」
「なるほど。だが…我々の世界で作った生物兵器をいきなりこちらに投入した可能性は？」
「ヒュージがジャムの生物兵器だと考えるのなら、俺達の世界にこんな化け物が現れていない時点でそれは違うと言えるだろう。そして、ジャムがこんな回りくどい生物を一から作るとはとても思えない。なにしろ、たんぱく質と違う成分でできた人間のコピーを作ってそのままにするぐらい、生物というものに無理解と言えるような存在だぞ」
　深井大尉の言った『人間のコピー』という単語の衝撃に場がざわつく。静粛に、と史房は言う。そして、桂城少尉も手を挙げた。
「僕も一ついいかな」
　それに対してブッカーは頷いた。
「では…ヒュージがジャムと関係あるかどうか。それについては僕も直接関係ないと思う。でも、僕は違う可能性を最初に警戒していた。それは、この世界はロンバート大佐が作った世界なんじゃないかって考えだ。僕らが地球に行く事を阻止しつつ、僕らを閉じ込めて驚かせる為に、ね」
「フムン。なるほど、その考えは無かったな」
　深井大尉は感心したように頷いて言った。そして、『ここがロン

バートとやらに作られた世界ではないか』という発言に再び場はざわめいた。この世界に生きる人々にそんな考えはとても受け入れられるものではない。
「でも、あちこち見聞きしてからさっき改めて考えた。すると、ロンバート大佐にこんな世界は考えだす事はできないだろうって結論が僕の中に出たよ。化け物を出すにしても、大佐ならもっと分かりやすい物を出してくると思う。例えば…神話や伝承に出てくる怪物や妖怪とか、一目見てわかるような魔法使いや騎士とかかな」
「確かに…ユニコーンとか天使とかそういう分かりやすい物を出して、それを見て驚く俺達を笑いながら観察しそうだ」
「それに驚かせるだけなら別世界の雪風を出す意味もないかな」
　そして、それを聞いた深井中尉が発言する。
「俺達の世界のロンバート大佐は既に戦死している、まるで無関係だな。そっちのロンバート大佐が何をしたのかは知らんが…」
「その話は詳しく説明すると長くなる、別の機会に話そう。中尉」
「了解だ、大尉。で、ジャック…ヒュージとジャムは無関係という結論でいいか？」
「いや、まだだ。ヒュージと戦ってきた彼女達にジャムの記録を見せてからにしよう。リリィの側からの意見も聞こうじゃないか」
　深井中尉の意見にブッカーは返事を返す。そして、スクリーンに特殊戦機の記録映像を流す時がついに来た。事前に話し合った結果、まず先にB―3の記録映像を流す事となった。

「では、流します。スタート！」
　スクリーンに映像が表示された。その映像には地球の空とは異なる色の空が広がる。それを見た一同から驚きの声が出る。
「まるで緑色に近い空の色…」
「地球の空とはどこか違うわね」
　そして、スピーカから音声も流れる。機内では英語と思しき言語で会話が行われているらしい。その声のうち、一人はここにいる深井零

で間違いない。そして、もう一人…それはまさに理事長代行とそっくりな声であった。これがブッカーの声なのだろうか。
「あれは…ヒュージネスト？」
　映像を見ていた梨璃がポツリと言う。彼女の視線の先にあるスクリーンには巨大な雲の柱が映っていたのだ。
「あれは超空間通路だ。フェアリイ星と地球の南極を繋いでいる」
「超空間通路…」
　隣に立っていた深井大尉がそう梨璃に言う。そして、少しすると映像に変化があった。音声からも警報音と共に緊迫感のある発言が飛ぶ。
「ジャムだ！なんでこんなところに!?ＣＡＰ（哨戒）の連中は何をしているんだ…零、迎撃しろ！」
「ここからでは不可能だ。このまま通路に突入する」
「とんでもない土産付きになっちまったな」
　そのまま計器情報を次々と読み上げる音声が入る。そして、青白い光が機体の周囲に次々と現れた。まるでセントエルモの火のような現象だ。

　そして…次の瞬間、画面が暗転する。そのまま風景は大きく変わる、今度は青い空が広がっていた。
「深井大尉、これは地球の空？」
　夢結が深井大尉に聞く。
「そうだ。あれは通路の先…南極の空だ」
　深井大尉はそう答えながら、スクリーンをじっと見つめていた。もう一機の雪風の戦いを知る為に。そして、Ｂ―１…雪風のセンサも忙しなく動いていた。この場で得る事ができる全ての情報を逃すまいと。

妖精の戦い

深井中尉とブッカーはＢ―３の記録映像を皆と見ていた。何故、二人がこの南極での戦いの映像を流す事を決めたのか…その理由は地球という環境下で戦った唯一の記録であり、映像的にも分かりやすいだろうという判断からであった。もちろん、映像内ではジャムの姿も捉えている…条件はしっかり満たしていた。英語が分からない者の為に急ごしらえだが、映像内で流れる無線交信等の翻訳文も用意した。深井中尉はそのやりとりを思い出すと、食い入るように映像を見る面々の様子を一度見てから、視線をスクリーンへと戻した。

リリィ達や別世界の自分、そして雪風の目には俺達の知るジャムがどう映るだろうか。

一方、映像を見る深井大尉はこれがどこか見覚えのある状況だと感じた。以前、エンジンテストとして南極へ向けて飛んだ時に似ていたのだ。だが、あの時の自分はスーパーシルフ時代の雪風に乗っていたし、敵の数も違う。やはり、これは別世界の出来事なのだと深井大尉は心の内で考えていた。

『ＦＡＦ機へ。直ちに武装を解除し、我が方の指示に従え。こちらは国連軍所属、日本海軍機である』

『俺達を囲んでいる場合じゃないだろう！ジャムに喰われるぞ』

映像には見たこともない航空機が現れた。その機体の国籍マークは日の丸…日本機であった。そして、無線から警告音声が流れ続ける。

「南極に日本機…」

「南極防衛は国連の指揮下だ、どこの軍がいてもおかしくないのさ」

夢結の呟きに桂城少尉が答える。

『地球艦隊が迎撃開始、多数のミサイル発射を確認…これは抜かれるだろうな』

『こんな近くに空母がいるのか…？まずい、零。絶対にやらせるな！やつらを撃墜しろ』

スクリーンにはレーダーや計器の表示も映っていた。レーダー画

面には多数のシンボル。この場にいる全ての艦艇と航空機…そして、ジャムが表示されているのだ。すると、艦艇を模したシンボルの近くに複数の表示が次々と現れた。シンボルと共に表示されている数値や記号の意味や内容はリリィ達には分からない。だが、これが艦隊から放たれたミサイルなのだろう。

『駄目だ、燃料がもたない。帰還できなくなる』

『構わん、ジャムの撃墜を優先しろ！』

ブッカー少佐の命令が飛んだ途端、映像はすごい勢いで回転を始めた。雪風はマイナスピッチ…機首を下に向けてぐるりと回転したのだ。海が映り、空が映る。凄い勢いでその風景が流れていき、ＨＵＤに表示されているピッチ角や速度計、高度計の数値や表示もすさまじい勢いで動く。その回転を３度、４度と…５秒にも満たない間にやったのである。

深井大尉と桂城少尉は感心したように「いい機動性だ」と呟いた。しかし、画面を見ていたリリィ数人の顔が青くなる。画面を見ただけで酔ったのだろう。

そして、機体が水平に戻るとそのまま一気に加速。雪風の周りに張り付いていた日本海軍機はこの機動に翻弄され、あっという間に置き去りにされた。無線から驚いたような声が上がる。雪風はこの場の通信を全て傍受し、記録しているようだ。すると、レーダーの表示がいくつか減る。それと共に『撃墜された』という悲鳴のような無線が鳴った。ジャムが地球艦隊側の迎撃機を易々と排除したらしい。レーダー画面上で凄まじい動きをしながら飛ぶ赤いシンボル…それがジャムなのだ。

雪風の光学センサが捉えた情報も画面に表示される。黒く、赤い光が表面で輝く飛行物体…あれがジャムなのだろう、一同はそう理解した。すると、いきなりその姿が消え、その少し後に離れた場所に現れる。映像を見ていた一同から驚きの声が上がる。そして、楓が深井大尉に聞く。

「消えた!?深井大尉、あれはどういう理屈でして？」

「さあな、詳しく調べないと分からない。まあ、不可知領域に入った

か、人間や機械の認識から外れて不可視になったか…その辺りだろう。もっとも、雪風のセンサはそれでも捉えているだろうが」
「認識から外れる…？」
その突拍子もない回答に楓は理解が追いつかずに絶句する。一方、深井大尉はそのジャムの姿を見て、ある点に気づく。あのジャムはタイプ２とレーダー上に表示されている。だが、Ｂ―３の光学センサが捉えたその姿は自分の知るタイプ２とは大いに異なっている。それどころか、自分の知るどのタイプのジャムとも異なる。そして、深井大尉は小さくため息をついて心の内でこう思った。これはまたややこしい話になりそうだ、と。
映像の中のジャム三機は更に加速。音の壁をあっという間に突き破り、艦隊目掛けて突き進む。地球艦隊側の対空火器はジャムの妨害による影響もあってか、有効な打撃を与える事が出来ない。そして、猛烈な弾幕を潜り抜け、一機のジャムは高度を更に下げる。そして、そのまま手近な艦艇に飛び込んだ。文字通りの体当たりである。そして、その駆逐艦と思しき艦から爆炎と煙が噴き上がる。スクリーン前の面々はその衝撃的な映像に息をのむ。
『地球の連中だとやはり無理か…いた、あれだ。残り二機！空母を狙っている』
『まったく…とんだエンジンテストだ』
映像の中の深井中尉がそう呟くと、計器の表示が変わる。ＲＡＭ―ＡＩＲ…エンジンのモードをラムジェットに切り替えたのだ。このモードはジェットエンジンのタービンを使用しない。大気中からインテークに飛び込んだ高速の空気がダクト内で圧縮される。そこに燃料を噴射、燃焼する。直接燃焼した空気を排出する事で強烈な推進力を得るのである。
そして、機体は爆発的に加速する。速度による影響なのか機体は激しく上下左右に揺さぶられる。だが、ジャムとの距離はあっという間に詰まる。短射程空対空ミサイルの射程内に入る。まず一機、シーカーがジャムの熱源を捉えてロックオン。そして、発射。超音速のミサイルはジャム目掛けて飛んでいく。

命中。ジャムは木っ端みじんに吹き飛んだ。
残り一機は更に先を飛ぶ。それを追ってこのまま加速…射程内まで近づく。酸素マスク内の独特な呼吸音が静かに響く。そして、ロックオン。ジャムは空母まであと一息の所まで近づいている。間に合うか？ギリギリのタイミングといった感じである。そして、ミサイルを発射…命中、撃墜。ジャムは空母の至近に落ちた。そして、ジャムが自爆したのか巨大な水柱が立ち昇る。だが、空母を守る事には成功した。至近弾ではあるものの、損害は無さそうだ。そして、コクピット内に警告音が鳴り響く。計器には燃料の警告が表示されている。
それを見た梨璃はどのくらい深刻な警報なのだろうと首を傾げる。それに対して、深井大尉は言う。放置すればあっという間に燃料切れで落ちる、と。
「では、どうするんです？周りは海ですよね」
「だいたい察しはつく。このまま見ていれば分かるだろう」
「んー…？」
深井大尉の回答を聞いた梨璃は首を傾げながらも映像を見る。
『間一髪だ…まるで寿命が縮んだ気分』
『このままだと海水浴だよ、ジャック』
『心配はいらんよ。燃料なら…あそこにいくらでもある』
『あそこ…空母に？』
『国際条約があるからな。嫌だなんて断れないよ』
そして、映像の中のブッカー少佐は無線で非常事態を宣言。艦隊に向けて着艦要請を出した。それを聞いた空母側は了解と返答してきたものの、大慌ての様子だ。あちこちに無線を飛ばしている。『宇宙人がやってきた』と。
そして、スクリーンに空母の姿が映る。距離はどんどんと縮まっていき、その艦影はだんだんと大きくなる。すると、空母から『着艦コースから外れている』と警告の無線が飛び込む。
空母への着艦は「制御された墜落」と表現する人もいる程、その難易度は極めて高いのである。なにしろ着艦というものは、洋上で動いている艦の甲板に張ってあるワイヤへ機体のフックをうまく引っか

け、そのまま強引に止まるという荒っぽいものなのだ。その為、いくつもの着艦支援装置の類や技術の進歩が有っても未だに事故が一定数起こるぐらいだ。それ程に難易度が高い。
　だが、深井中尉は無線の警告を無視。雪風はそのまま空母目掛けて飛び続ける。空母甲板上のクルー達が慌てた様子で動き出す。こちらが事故を起こすと判断したのだろう。しかし、雪風はそのまま機首を上に向ける。速度は映像で分かる程の勢いで急減速、機体全体をエアブレーキにしたのであろう。そして、フワリという擬音が似合うような一瞬の浮遊感が生じたかと思うと、そのまま高度がストンと下がり、飛行甲板にドスンと音を立てながら着地。まさに常識離れと言えるような着艦に、映像を見ていた者達から驚きの声が上がる。そして、面々のその表情は映像に映る空母クルー達と同じような唖然とした表情であった。
　機体は駐機スペースまで自走するとそのまま停止。そして、映像も終わる。
「まるで…映画みたいだった」
「でも、作り物にはとても見えませんでした。しかし、あのジャムという存在の能力…それにあの戦闘機の性能…どうやら、認識を改める必要がありそうですね」
「あの機体、思った以上にとんでもない化け物じゃぞ。例えるなら、SFアニメの戦闘機が現実にそのまま現れたような次元の話になってくる」
「ジャムとやらがとても面倒な存在だという事はよく分かりましたわ。あんなのと戦うのは御免ですわね。姿が消えたのだって擬態ではないみたいですし」
「内容はともかく…回転したところで酔いました…」
「ごめん、私も…」
「あはは、とんでもない勢いだったもんな」
　あちこちから感想の声が次々上がる。そして、百由が手を叩きながら次の上映スケジュールを伝える。
「はいはい、皆様。次は深井大尉と桂城少尉の用意した映像を流すわ

よ。でも…１０分休憩にしましょうか。このまま連続でど派手な空戦映像なんて流したら、そのまま寝込む羽目になりそうな人もちらほらいる事だし。いいですかね、理事長代行？」
「構わんよ。その方がよさそうだ。飲み物でも買いに行った方がいいだろう」
ブッカーが笑いながら言う。そして、顔を青くした面々がそれを聞いてそそくさと外へ出ていく。
そんな中、夢結は深井大尉に質問を投げかけた。
「深井大尉、一つ聞いてもいいかしら？」
「なんだ？」
「別の世界の自分の戦いを見てどう思ったか、その感想を聞きたいのだけれども」
「フムン。そうだな…同じ名前でも機体の形も性格も違う。だから、飛ばし方も戦い方もやはり違う。そう感じた」
「私達にはとても浮かびそうもない発想ね。まさにパイロットの思考といったところかしら」
「お前達も同じ状況なら俺と同じ事を考えるだろうさ」
「では、別世界のジャムについては？」
「それは後で話そう。俺達の映像を見た後に。だが、その前に俺も休憩だ」
そう言って、深井大尉は立ち上がる。そして、夢結に自販機の場所を聞くと、外へと出ていった。

〈Ｂ―１：ｔｈａｔ　ＪＡＭ　ｉｓ　ｕｎｋｎｏｗｎ…〉
〈Ｂ―３：Ｔｈａｔ　ｉｓ　ＴＹＰＥ―２〉
〈Ｂ―１：ｄｉｆｆｅｒｅｎｔ　ｆｒｏｍ　ｗｈａｔ　Ｉ　ｋｎｏｗ…〉

ジャムはヒュージか？

　きっかり１０分たった。スクリーンの前にはだいたいの人数が戻ってきた様子だ。そんな中、深井大尉はこれから流す記録映像の内容を決めた時の会話を思い出す。
「これを流したら確実にこの学院の連中はみんな混乱すると僕は思う。それでも流しますか、大尉？」
「ああ、そうだ少尉。そうなる事は俺だって承知しているさ。だが、今回は本質を見てどう思うか、それが重要な要素だ。それならあの時の映像が最も適している、俺はそう考えたよ」
「フム…じゃあ、流すのは必要最小限の箇所だけにしましょうか」
「そうだな。だらだら流しても仕方ないし、時間も惜しい」
　しかし、別世界の自分が流した先程の映像を見て、その考えを改めた。あの様子ではこの学院の連中だけでなく、別世界の自分とブッカーまで混乱する可能性が高い。なにしろ、ジャムの見た目からして違うのだ。よって、この映像内容を流した結果、双方から多種多様な質問が雨霰と飛んでくる可能性が大だろう。今のうちに覚悟を決めておくべきだと深井大尉は考えた。
「では、再開しましょうか。次は深井大尉の方の記録映像よ」
　そして、スクリーンに映像が映し出された。地球とは違う色をした空、地表には巨大なクレーターのような窪みが映る。だが、それだけではなく、突然目の前にどす黒い航空機のようなものが映し出された。それは一切の反射が無い黒色の機体であった。例えるとしたら空中という紙にインクを垂らしたような黒一色。映像の中の雪風はこの機体を追って猛烈な旋回を続けている最中のようであった。そして、猛烈なＧに耐える為の独特な呼吸音が映像と共に流れてくる。
「なんだあいつは？分かるか、ジャック」
「分からん…もしや、あれが向こうのジャムか？」
　深井中尉とブッカーが映像に現れた黒い機体をじっと見る。それが見たこともない機影だったからである。
「あの…画面端に浮いているものは？」

「どれだ？」
史房の疑問を聞いた深井中尉とブッカーは視線を動かす。そして、言葉を失った。その黒い機体の進行方向に奇妙なものがあったからである。それはレンズのような歪みであった。そんな不可解なものが空中に浮いているのだ。
「あれはケイブ…？」
リリィの中の誰かがそう呟くが、映像はそのまま続く。黒い機体は更に旋回を続ける。そして、次の瞬間である。黒い機体は急横転し、白い雲に包まれた。それがちらっと見えたかと思うと、映像は激しく揺さぶられながら暗転した。
『少尉、起きているか？機体の損傷等を確認して報告しろ、少尉』
『起きている…状態確認中、フライトシステム異常なし』
『キャビンの環境を再調整しろ。靄で何も見えん』
『実行中。現在位置は…不明』
機内には警告音が鳴り響く。深井大尉は機体の状態を確かめる為にロールをしながら飛ぶ。しかし、深井大尉は困惑したような声で唸りながらロールを止めて、警報を切った。だが、それよりも映像の先に奇妙としか言いようのない不思議な空が映っている状況の方が、映像を見ている一同にとって衝撃は大きかった。
「何よ、この空は…」
百由もそう呟く。映像内の空は上下が分厚い雲で覆われており、雪風が飛ぶ高度だけ雲が無い。まるで雲の隙間を飛んでいるような状態だ。そして、雲の切れ間の先には帯状の青い光が見える。
『各翼に損傷見られず。現在高度は約3万メートルと表示されている。おそらく…ここはフェアリイ星の環境ではなさそうだ、人工的な空間かもしれない。高度計の数値が正しいとは思えない』
『そうだな。それに上下から電波が返ってくる…上と下に壁のようなものがあるらしい』
『なんてことだ…これはジャムの移動用通路なのだろうか』
『そうかもしれない』
『深井大尉、このまま飛んで出られるのか？』

『分からない。しかし、ジャムがその前に現れるかもしれない。警戒しろ』
緊迫感のある会話が続く。だが、これを翻訳の字幕を見ながら聞く梨璃には、ある一つの疑問が浮かんでいた。映像の中で深井大尉と会話をする桂城少尉の雰囲気が、目の前にいる少尉とどこか違うように思えたのだ。そして、その口調はどこか深井中尉のような雰囲気があるようにも感じた。梨璃はそんな疑問を抱き、首を傾げつつも映像の続きに意識を向けた。
映像は編集されているらしく、場面が切り替わる。しかし、周囲の風景には一切変化が無い。画面の中では警報音が鳴っている。
『ボギー捕捉、数は一機。左下方から急上昇中。このままだと衝突コース。戦闘機サイズの物体だ』
『少尉、目視にて確認しろ。そして、そのまま口頭での報告を続けるんだ。記録内容を後から見た時に把握できるように、詳細に報告…いや、実況しろ』
『了解。目標は雲海の中、目視不能。だが、距離としては近いはずだ。目標、機の下を通過』
『真横に来るぞ。ＩＦＦ応答なし、敵味方不明と表示されている…ジャムではない？速度はこちらに合わせているらしい』
『見えた。雲の中から何か…垂直尾翼の先端らしきものが出てきた』
灰色の物体が雲の中から少しずつ姿を見せる。
『薄暗いな…そろそろ雲から機体が出るか？』
『何か模様のようなものが見える…マーキングか？相手が雲から出た。あれは…機種はシルフィード、厳密にはスーパーシルフ。垂直尾翼に特殊戦第五飛行戦隊のマークを確認』
『あれは…雪風だ。旧雪風のコピーだ。過去にも遭遇している、これが初めてではない』
雲中から現れた航空機、それがジャムのコピーであるという深井大尉の言葉に、映像を見ている面々は困惑する。戦闘機をコピーしたものを飛ばす…相手は異星人の類ではなかったのか？そういったような事を考えているような表情が並ぶ。しかし、この後に更なる衝撃が

次々やってくる事を彼女達はまだ知らない。
　一方、深井中尉とブッカーはその現れた偽スーパーシルフの姿を見て会話を交わす。
「あれが向こうのスーパーシルフか。やはり、形が違う」
「同じなのは名前だけで、様々なものが違う世界なのかもしれんな」
「そう考えた方がよさそうだ。しかし、ジャック。これと同じような状況に覚えがあるが…」
「ああ、南極の帰りだな。あれと同じような展開になるかどうか」
　画面の中では深井大尉が偽スーパーシルフをロックオン。敵機として認定、レーダー上の表示も不明機から敵に切り替わる。そして、桂城少尉は何かに気づく。
『コクピット内に誰かが乗っている…顔は見えない。ヘルメットと酸素マスクで覆われている。いや、待て。マスクを指さしているらしい…通話したいのか？』
　そして、無線から音声が鳴り響く。
『聞こえているか？深井中尉、貴官は不要かつ無益な戦いを行っている。直ちに戦意を放棄し、我に従う生き方をされたし。応答せよ』
　まるで機械か何かで合成したような声が響く。その通信内容も分かりにくくぎこちない感じである。
「なんだ…まさか、ジャム人間が音声で通信してきたのか？」
「だが、人間のコピーにしては話し方が妙だ。どうなっているのか…」
　深井中尉とブッカーは口をポカンと開けながらその声を聴く。他の者も困惑したような感じの表情で映像を見る。これが、地球外生命体の声なのか。
『こちらB―1、聞こえている。そちらの所属、氏名と階級を知らせたし』
　深井大尉が返信する。
『返答する。我に個体を分類、識別するようなコードはない。よって、その問いに対する回答は不可能である。深井中尉へ、先程の我の要請を受け入れるか否か、返答を求む』
『身分を明かさずに人に対してお願いとは無礼だな…お前は誰だ？』

『貴殿に理解できる概念で説明する。我はジャムと呼ばれるものの総体である』
『総体？つまり、ジャムの代表のようなものと解釈していいのか？』
『そう考えてもらって構わない。先程の返答を求む』
　一度、無線を止めて深井大尉は桂城少尉に問う。
『少尉、どう思う？あれの言葉を信じていいものか』
『さて、どうだろう。色々と不自然だ、特に言葉遣い。誰かに言わされているような感じだ』
『フム、やはりそう思うか。このまま警戒せよ』
　通信を再開する。
『そちらの要請の意味が分からない。不要かつ無益な戦いとはなんだ。誰にとっての不要かつ無益な戦いなのか。それが分からない以上、返事のしようがない』
『深井中尉。意味は分かっているはずだろう』
　急に流暢な言葉遣いの声が飛んできた。スクリーン前の面々はその変化に驚く。そして、映像を見る深井中尉はその声が聞き覚えのあるもので愕然とする。
「この声…まさか、あの時の」
「知っているのか？零。これは誰の声だ」
「これは俺とバーガディシュ少尉が不時着した時に現れたジャム人間の声だ」
「なんだと!?あの偽物の基地か」
　それは深井中尉がスーパーシルフ時代の雪風に乗っていた時の出来事である。偵察任務に出撃した際、奇妙な空間に飛び込み、そこにあった偽の前線基地に不時着。その偽の基地にいた男がこんな声をしていたのだ。バーガディシュ少尉が消えた事やそこで食わされたものといった嫌な記憶が蘇り、深井中尉の表情は曇る。
『我々が助けてやろうという意味だ。ＦＡＦに勝ち目はないからな。これで意味は分かっただろう。さあ、ついてこい。安全な場所に連れて行ってやろう。従わなければ、どうなるか分かるだろう』
『お前とは交渉する気はない、拒否する。お前の言葉は一切信用でき

ないからだ』
『君に分かりやすく伝えているのだが、何故拒否するんだ』
『先に言った通りだ。お前と交渉する気は無い。桂城少尉、ＥＷ（電子戦）準備。交戦する。目標に注意、反撃に備えろ』
『了解、ＥＷ準備』
　ターゲットをロックオン、武装選択の表示がすぐさまディスプレイに出る。攻撃態勢に入ったのだ。そして、右旋回。相手の後方に入り込もうとする。だが、偽スーパーシルフも反応するように左旋回開始。互いに左右の旋回を繰り返し、鋏の形のような機動を行うシザースと呼ばれる空戦機動の態勢に入った。だが、相手よりも雪風の運動性能が勝っているらしく、すぐに相手の後ろに喰いついた。そして、ミサイルを発射…命中確実。だが、そこで変化が起こる。相手が突然消えたのだ。
　そして、ミサイルはそのまま直進、しばらく飛んだ先で自爆した。
『無駄だよ、深井中尉』
　あざ笑う声が響く。
『くそ、ダメか。大尉、あいつは幻のような物かもしれない。実体が存在しないのかも』
　桂城少尉がそう言うと、スクリーン上のディスプレイ表示に文章が現れる。雪風が表示したものらしい。スクリーン下方に和訳された文章も併せて表示される。
〈今の攻撃はほんの威嚇だ。次は本気であり、確実に命中させる…覚悟はいいか、ジャム〉
　深井大尉はそれと同じ内容を無線に向けて呟く。
『なんて馬鹿者なんだ。こちらが助けてやろうと言っているのに…まあ、いい。そちらがその気なら、こちらも加減しない。今の立場を思い知らせてやる。ここがお前達にとって、最後の…おい、やめろ！やめ…』
　無線から絶叫する声が響く。すると、偽スーパーシルフに異変が起こった。その機のキャノピーが飛んだのだ。そして、二つの物体が勢いよく飛び出す。

『射出された、前席と後席の両方だ。どうなっている、逃げだした?』
『逃げたようには思えないな』
　雪風の光学センサは射出された座席を追う。その二つの座席は螺旋を描くように飛ぶ。だが、パラシュートは開かない。そのまま遠ざかると雲間に落ちていく。そして、それらが赤く輝くとそのまま消えてしまった。座席は乗員と共に燃え尽きたように見えた。映像を見る面々はその様子に言葉が出ない。そして、その場に一つの共通した疑問が浮かぶ。パイロット無しであの機体は何故飛んでいられるのだ、と。
『ジャムへ、応答せよ。俺はジャムと直接話がしたい…人間のコピーではなく。応答せよ』
『我には理解できない。お前は何故戦闘を行うのか』
　無線の声は再び合成音のような声に戻っていた。偽スーパーシルフはコクピットが空のまま安定して飛んでいる。
『我には理解できない。その機体の知性体、ユキカゼという存在。そして、特殊戦という知性体の集団が。深井中尉へ、何故戦うのか』
『それは生きる為だ。お前にやられない為。そんな単純な話が何故理解できないんだ。他の人間や知性体、他の部隊は違うと言いたいのか?』
『深井中尉やその機の知性体を含む特殊戦の知性体群は他の知性体群とは異なる。ヒト的意識を持たない知性体である。よって、我と似た存在であると考えられる。それがＦＡＦと共に存在し、我を妨害し、戦闘を行うのか理解ができない。ユキカゼは非戦協定を拒絶している。その為、深井中尉にその拒絶を撤回するように交渉してほしい。それが可能なのは貴官だけである。覚醒せよ、深井中尉』
『何を言っている。俺がヒト的意識を持たない知性体?非戦協定?お前の言っている事はさっぱり分からない』
『現在のヒトとその配下にある人工的な知性体は、我が予定していた性質とは外れた性質を持つ特異な存在である。だが、貴官らは違う。我の本来予定していた性質である。よって、我は貴官らの敵ではない。貴官らを損耗させる事は我の本意ではない。我の下に来る事を

求む』
　スクリーン前では小さく唸るような声があちこちで上がる。ジャムの発言をどう解釈すればいいものか、そんな考えが場を包んでいた。
『それはつまり…そっちの味方になれ、という事か。ＦＡＦから寝返って、ジャムと共にＦＡＦや人類と戦えと』
『貴官は何者か。回答を求む』
『僕はフェアリイ空軍戦術戦闘航空団、特殊戦第五飛行戦隊所属、桂城彰少尉。雪風のフライトオフィサ…人間だよ。僕達が何故お前達と戦うのか、理由を教えてやろう。それは仕事だからだ、分かるか？仕事であり任務だよ、任務。これしか選択肢が無いからやっているんだ』
『我と戦う選択は不要である。生きていけると判断できる』
『お前は僕達特殊戦が仲間になればいいと考えているな。そう解釈しても問題ないな？では、お前は俺達に仕事を出してくれるのか？』
『少尉、その返しはいいな。仕事か、確かにそうだ』
　深井大尉が笑いながら言う。そして、ジャムから返答が飛ぶ。
『我と貴官らは似てはいる。しかし、仲間ではない。だが、人類…ＦＡＦとの共闘はできると解釈してほしい。それこそが貴官…桂城少尉の生きる道となりうる筈である。深井中尉、回答を求む。ＦＡＦから離脱し、我が方に付く意はあるか。回答を求む』
　しばし、無言の間が続く。深井大尉は相手の出方をうかがっているらしい。
『回答されたし』
『俺はお前の事を知りたい。お前という存在がどういうものなのか、それを知りたい。こちら側がそっちの正体を理解できないのに、そちらがこちらをある程度理解している…この状況は不公平だと俺は思う。それでは非戦協定なんてとても呑めない。そもそもだが、そちらは人語を完全に理解しているのか？その協定内容についての解釈が異なるというのなら、とても交渉も約束もできない。そして…お前は何者だ？機械か、生物か、それとも情報としてだけの存在なのか？』

『貴官の理解している概念では、我を説明することは不可能。我は、我である』
『それ以上の説明ができないというのであれば、これ以上の交渉は続ける意味がない。そちらの要求は拒否する』
『了解』
深井大尉の拒否に対し、ジャムは無機質な返答を返してきた。そして、用を終えたと言わんばかりに深井大尉が宣言する。
『戦略偵察完了。帰投する…ＲＴＢ』
そして、映像はそこで終了した。格納庫内の照明が点灯、室内は明るくなる。
深井大尉は改めて周囲を見る。かなりの人数が疲弊したような表情を見せている。字幕を見る必要のない語学力が高そうな面々は特にダメージが大きいらしい。未知の生命体との会話シーンという衝撃だけでなく、ジャムの言葉が音声としてダイレクトに伝わったのだ。そして、自分の頭でその言葉の意味に対する解釈を考えた結果、思考が追いつかず混乱に襲われたのであろう。
深井大尉はこの場の面々からどんな質問や意見が出るのかと一応身構えているが、誰も何も言ってこない。まず、どの内容から手を付けていいのか…そこから悩んでいるような感じなのだろうか。ブッカーや深井中尉ですら、先の情報を整理している真っ只中らしい。二人で何やら話し合っている。まあ、無理もない。なにしろ自分達の世界の特殊戦ですら混乱した内容なのだ。この記録を見て、それでも元気だったのはフォス大尉ぐらいしかいなかった程だ。桂城少尉が「とりあえず休憩にして一度時間を空けよう」と深井大尉に伝えようとしたところで、誰かが手を挙げた。一柳梨璃である。
「深井大尉、とりあえずあれがヒュージと同じ存在と思えるか…そんな意見が欲しいのですよね？」
「ああ、そうだ。直接あの化け物と戦っている者からの意見が欲しい」
「では、みんな悩んでいるようなので…私にはあれがヒュージと同じとは思えません」
「何故だ？理由を言ってみろ」

「えーと…ヒュージは戦闘機なんて飛ばしません！」
　梨璃の発言に何人かが頭を抱える。何を当たり前の事を言っているのだ、と。
「梨璃、もう少し考えてから言いなさい。これはそんな簡単な話じゃないわ」
　夢結がため息をつきながら言う。それに対し、深井大尉は言った。
「いや、そういうシンプルな意見でいい。こういうのは直感が大事だ。では、お前はどう思った？」
　深井大尉は夢結に聞く。
「ええ、正直…私も違うとは思う。でも、あのジャムの言っている事がよく分からなくて話が纏まらないわ」
「私もそう思いますわ。我は我である…ヒュージが人語を使ってそんな事を言い出したら、あまりのショックで三日は寝込みますわね」
　楓も続けて意見を出した。彼女は語学力が高いものの、割と元気そうだ。フォス大尉並みにメンタルが強いのかもしれない。
「我は我である…か。意識とかそういう話も出ていたし、深く考えるとどうも哲学的な話になりそうですね」
　神琳が言う。
「俺もいいか？」
　この流れに乗って深井中尉が口を開いた。それに対し、深井大尉は頷く。
「では…俺はあんなジャムを見たことが無い。未知のタイプだ。大尉は俺達の記録を見た時に同じことを考えたか？」
「考えた。俺の知るタイプ2とは色も形も違うものだったからな」
「やはりか。スーパーシルフの形も違う。こちらとそちらはかなり違う世界のように思える」
「俺も同感だよ、中尉。明らかに色々と違う」
　そして、ブッカーも口を開く。
「多分だが…そちらとこちらは名前のような概念だけが共通しているのだと思う。名前は同じだが、デザインが違うと例えればいいのか…表現が難しいな」

「フムン」
　そして、桂城少尉も会話に加わる。
「なるほど。つまり、そちらのジャムとこちらのジャムは概念としては同じである可能性が高いのかもしれないな。ただ、全く同一の存在ではないだろう…そこに並ぶ2つの雪風のように」
「少尉の考えからすると、こちらとそちらのジャムは同一の存在ではないと考えていいかもしれないな」
「だが、大尉。そう考えると厄介だ。違う世界とはいえ、ジャムという存在が二ついると言えてしまう」
「ジャック、普通ならその二つは同時に存在しないからそんな考えは無視していいはずだ。だが、こんな特殊な状況下ではジャムという脅威が2ついると考えていいかもしれない」
「厄介だな」
　ブッカーがため息をつく。そして、桂城少尉が考えを言う。
「でも、少佐。この地球にジャムは確認されていない、それは確かだ。だから、今のところはその心配をしなくていいと思う。だから、一刻も早く帰る方法を探す事に専念すべきだと僕は考えるよ。ジャムが嗅ぎつける前に、ね」
「それがいいな、そうしよう。というより、それしか選択肢が無いな…」
　そして、思考がやっと落ち着いたのか、百由が意見を述べる。
「さて、色々気になる事が多すぎて何を言おうか迷ったけれど…とりあえず、私もジャムとヒュージは無関係な存在だと思うわ。で、それとは別に聞きたい事があるわ。深井大尉、ジャムはあなたや特殊戦が似た存在だと言っていた。その根拠に目星はついているの？」
「仮説しかない」
「聞いてもいいかしら？」
「フム、他の人類と我々特殊戦の違う点…それは集団行動を重視するか否か、だ。普通の人間なら集団で社会を形成し、その中で生活すると考えるだろう。だが、特殊戦の人材は違う。集団行動なんて不要で自分ひとりで何もかもやっていけると考えている人間が集まった特

殊な隊なんだ。ジャムはそこに注目したのかもしれない。という仮説をあの映像の後に俺達は考えた」
「なるほど、ヒト的意識とはそれか…つまり、ジャムは一個体だと？」
「数や単位で表せる存在かどうかも怪しい。だが、複数の意思があるような存在ではないようだ」
「うーん…とんでもない存在ね。まさに人類の知る概念で説明できるか分からない存在だと」
　そして、ブッカーが百由に言う。
「で、百由君。とりあえず、結論としては3つの存在はそれぞれ異なるというものでいいだろうか」
「そう考えた方が自然でしょう。それぞれ繋がっているのなら、もっと面倒な事になっていたと思いますし…ジャムが現れない事がその証拠かも」
「そうだな、現れていたら雪風がこんなに大人しいわけが無い。という事で、帰る為のヒントを探したい」
　百由はふむ、と考える。
「では…やはり、雪風が現れたヒュージネストの周りを調べるのが一番かと」
「どのように調べるか…」
　そして、深井中尉が意見を述べる。
「雪風で飛んで調べに行こう。それが一番だ」
「零、一人で飛ぶのか？」
「そうするしかないだろう。今のジャックの体ではとても耐えられそうにない。それに、向こうの連中も外まで調べに出たんだ。俺だって何かした方がいいだろう…それにもう飛べるはずだ」
　深井中尉はB―3…雪風を見ながら言う。
「じゃあ、私が後ろに乗ってもいいかしら？」
　すると、百由がにっこり笑いながらそう提案してきた。
〈B―3：I have a similar experience. But the situation is differ

〈B—l：seeking details……〉
ent……〉

舞台裏では

「あー…疲れたー…」
　梨璃は自室のベッドに倒れ込む。異世界人との接触に続き、異世界の戦闘記録映像を観るという、実に衝撃的な出来事だらけであった一日がやっと終わったのだ。
「梨璃さん。今日はずいぶん遅かったわね」
　二段ベッドの上段からルームメイトである伊東閑が話しかけてきた。
「うん、閑さん。色々あってね…ちょっと疲れちゃった」
「お疲れ様。ああ、そういえば…最近この学院で人の出入りがやたらと増えたって聞いたけれど、何かご存じ？」
「人の出入り…？」
「ええ。どうも飛行機の整備員みたいな一団が次々やってきたとか聞いたわ」
「あー…」
　それは心当たりのある内容であった。間違いなく雪風に関係する人員だろう。しかし、口が裂けてもその真相を彼女に教える事はできない。言ってしまえば謹慎等の処罰が待っているのだから。
「その反応、何か知っていそうね」
「えっ!?い、いや、何も知らないよ？」
「梨璃さんは分かりやすいわね。まあ、言えないか」
「うん…ごめんね」
「いいのよ。自分で調べてみるから」
　そして、会話を終えると梨璃は眠気に耐えきれず、そのまま目を閉じた。夕食まで少しだけ仮眠しよう、そう思いながら。

　ここ百合ヶ丘女学院には日本中から航空関係の技術者が集まっていた。整備の人間だけでなく、研究や開発…官民併せて幅広い分野の人材が集結している。リリィとはまず無縁な分野の人々がこれだけ

この学院に集まるのは通常ではありえない事態だ。そんな彼らが集まった理由は学院敷地内の格納庫にあった。それは異世界からやってきた未知の航空機である。彼らは表向きではその機体を修復、整備する目的でやってきたのだ。もちろん裏の事情もある。それは異世界の技術がどのようなものなのか調べる為だ。

しかし、そんな彼らを熱心に突き動かす原動力はそれとは別にあった。それは『この怪物達が空を飛ぶところを見てみたい』…飛行機に情熱を注ぐ人々のそんな素朴な好奇心である。

この世界とはまったく別の進化を辿った航空機…マギを応用した技術等は一切使用していない。その代わり、この機体達はただ純粋に航空力学の進化と空戦能力を追求したような代物だ。この機体はどんな飛び方で空を駆け抜けるのだろう…そんな期待から、作業担当の人員達は喜び勇んで百合ヶ丘で作業に当たる。そして、彼らはこの怪物が業界に猛烈なブレイクスルーを起こしかねないとんでもないものを秘めた機体だという確信を得ていた。

ただ、修復作業を開始した当初は大変であった。まず、どこから手を付けるのか。パイロット達に話を聞いたが、彼らは機体を飛ばす事や簡単な整備の知識は有っても、専門的な整備に関する知識は乏しい。更に提供された整備マニュアルを見ても、聞いた事の無い組織の独自規格が並んでいる。これで異世界の機体を整備できるのか。また、部品は用意できるのか…そういった壁にぶち当たり、作業はスローペースであった。しかし、作業の見学にやってきた学院の理事長代行のある発言から作業は大いに前進した。

「パイロットからの聞き取りの結果、異世界とこの世界はある時点まではかなり似た歴史の流れを辿ったらしい。そのある時点とはこちらで言えばヒュージの出現である。また、向こうの世界でも何かしらの怪物が出たとの事だが…その時点で歴史の流れが大きく変わったと言える。つまり、その前から存在した工業規格なんかは共通である可能性が高い。それをヒントに調べていけば、互換性のある規格が見つかるかもしれないと儂は思う」

なお、言った本人は正体が別人だとバレたりしないかと内心ヒヤヒ

ヤであったが、その場の誰もその点には気が付かなかった。本来の理事長代行と会った事のある人物がいないからそれも当然であるのだが。

さて、独自規格であろうとベースになった規格はある筈だ。また、異世界と言っても使用されている単位や言語はこの世界のものと同じである。そして、エンジニア達は過去・現在の各種民間や軍用の工業規格を片っ端から洗い出し、この未知の機体で使用されている規格に近い物を探し出していった。その結果、互換性のあるオイル等の各種消耗品やコネクタ、配線類の目途はたった。しかし、破損部品についてはどうしても一から作るしか選択肢がなかった。本来であれば航空機メーカーに運び込み、そこで徹底的に重整備を行いながら破損パーツの製造と交換を実施するところだ。だが、政府から機体の移動許可が出なかった事により、この場で修復を実施するしかない。

幸い、ＣＨＡＲＭの整備・補修…果ては製作まで行う工廠科の設備は充実したものであった。よって、破損部品は学院内で製作する事となった。作らねばならないもので特に大きい部品はカナード翼である…無傷な側の翼を参考にする事で作業時間を大幅に短縮。そして、工廠科の生徒達と協力しながら部品類を作り出した。彼女達も技術分野の人間だ…異世界の技術に興味津々であり、士気は高い。どうやら、新しい技術やＣＨＡＲＭの開発のヒントを得る事ができないかと目論んでいる節があるようだ。よって、修復作業は順調に進んでいった。もっとも、機体全てを整備したかというとそうではなく、エンジンやレーダー等はとても手に負えそうもない為、目視や非破壊検査のみで様子を見ていたが。

そういった流れで機体を飛ばす事が出来る状態まであと少しといったところまでやってきた。

しかし、ある日突然作業は慌ただしくなった。その日はヒュージ出現に関係した作業で、格納庫を使用するという事で整備作業中断の要請が学院から出たのであった。そして、その予定時刻が過ぎた後に技術者達が作業を再開しようとした矢先、修復中の機体…Ｂ―３を試験

飛行に飛ばすという知らせが作業現場に飛び込んだのだ。慌てて動作試験のスケジュールを立てる事となった。そして、その日の内に交換したカナード翼の動作試験を実施、試験に立ち会ったパイロットである深井中尉は問題無しだと判断した。だが、ここで深井中尉が注文を出す。これで更にエンジニア達は頭を抱えた。

「この周囲は敵が現れる可能性があるのだろう。念の為に試験飛行でも武装を積みたい」

この学院はヒュージネストの目と鼻の先にある。周囲は危険な空域である事は事実であり、それに備えるという意味では深井中尉の注文も間違いではない。同席する防衛軍関係者からも特に止められなかった為、そのまま武装を積む方向で話が進む。しかし、そこで新たな問題にぶち当たる。

それは搭載可能な兵器をどう調達するかである。まず、B—3のセンターパイロンに積んであったレーザー機関砲は一度降ろして整備中、これはまだ使えそうにない。現状、補充の目星がついている兵器は20mmガトリング機関砲のみだ。機体に残った弾薬からほぼ同一の機関砲弾を既に特定してあった。よって、それを積めば問題ない。しかし、戦闘機にミサイルを積むというのはそう単純な話ではない。ミサイルを機体のパイロンに括り付けても、機体の火器管制システムがそれに対応していなければミサイルを発射する事ができないのである。そして、この世界で現状配備されている空対空、空対地の各種ミサイルは全て不適合であった。流石に機関砲だけでは火力からして心許ない。そこで先のアイデアを使おうと一人の技術者が提案した。

「ヒュージが出る前に開発された兵器なら適合する物があるかもしれない」

FAFは国連下の組織だ。よって、地球で補給を受ける事になる可能性はゼロではない。事実、南極に飛んだ時には地球の空母で燃料補給等を実施した。その為、もしかすると地球で運用されている主だった兵器類の搭載も考慮しているかもしれない。普段気にしたことはなかったが、深井中尉は火器管制に登録された運用可能な兵器のリス

トに目を通す。確かに普段搭載しないような兵器類も記載されている。そのまま目を通すと、最新の物だけではなく旧式な物も一部記載があった。それらはＦＡＦで運用している最新式のＡＡＭと比べると原始的と言ってもいいぐらい古いものだ。もしかすると、当てはまる物がこの世界にあるかもしれないと深井中尉は考えた。そして、その一覧を紙に出力し、技術者達に渡す。

しかし、受け取った側は頭を抱えた。その一覧を見ると、最新の物とされるミサイルは勿論この世界に存在しない物ばかりである。そして、旧式とされる物に目を通す、狙い通りそこに記載されたミサイルはこの世界でも過去に生産されていた物がいくつかあった。しかし、それでも問題があった。既に生産は終了し、退役してしまった物しかなかったのだ。これでは適合していても搭載する事ができない。

そうして話が行き詰ってしまった為、技術者達は発想を変える事にした。ミサイル以外ならまだ可能性があるのではないか、という発想である。世の中には開発されてからずっと形が変わっていない製品がある。それはシンプル故に登場した時点で完成しきっている等の理由だ。航空機用の兵器で例えると、無誘導の爆弾やロケット弾…その形はヒュージ出現の遥か前から一切変わらない。その線でリストを洗い直す…するとあった。各種無誘導爆弾にロケット弾、世界的にもメジャーな物ばかりだ。無論、今でも生産され続けている。それらは弾薬側に電子機器が存在しないシンプルな物だ。機体側のコンピュータが照準を合わせて投下するだけ、後は物理法則に従って飛んでいく…よって、機体側の火器管制が対地攻撃に対応していれば搭載できるのだ。そういった無誘導爆弾やロケット弾は現代では誘導弾の母体としての需要が主であったが、誘導キットを載せていないノーマルな無誘導弾を入手する事は今でも容易である。

そして、深井中尉にこの結果を知らせる。彼は少し考えると、それらを搭載する事に決めた。こう呟きながら。

「雪風ならたとえ無誘導でも当てるだろう」

そして、整備に当たる人々はそれらの弾薬を入手するべく動き出した。この怪物が空へ帰るのを見届ける為に。

空への帰還

特殊戦三番機雪風は試験と周辺空域調査の為に飛ぶ事となった。
その為、この国の防衛軍担当者とフライトに関する打ち合わせを行う。そして、その場にはパイロットである深井中尉だけでなく、別世界の深井零…深井大尉も同席してフライトプランを練る。出席した担当者はこのフライトの理由が『帰る為の手がかり探し』だと聞くと、急ににこやかな笑顔で対応してきた。こちらに帰る気がしっかりあると分かって笑顔を見せたのだ。どうやら、すぐにでも厄介払いしたくてしょうがないらしい。深井中尉はその露骨な態度に内心呆れながらも説明を受ける。
当日の飛行予定時間、飛行予定空域の情報、進入禁止空域や民間機の使用する航路の位置、当日の気象予報、使用無線周波数、非常時の対応について…等々。そして、同席していた深井大尉が口を開く。無人機も飛ばしていいか、と。深井中尉はそれを聞いて驚く。レイフという機体を別世界の自分は飛ばすつもりらしい。別世界の自分は何をするつもりなのか、深井中尉にはその真意が分からなかった。
そして、フライト当日になった。雪風とレイフは今回、自衛火器として主翼下各パイロンに７０ｍｍロケット弾１９発入りのポッドを計４つ搭載する。離陸準備を行う整備員達は慣れた手つきでポッドにロケット弾を装填し、配線と信管をセットしていく。深井中尉はその搭載作業を黙って見ていた。こういう作業の様子はどこも変わらないな、と思いながら。
すると、百由が機体に近づいていくのが見えた。何故か分からないが今回のフライトにアイツを乗せる事に決まってしまったのだ。そんな彼女は乗る前に機体の下見に来たのだろうか？余計な事をしなければいいが、と深井中尉は内心考える。そうこうしていると、出撃予定時刻が近づいてきた。装備品である酸素マスクに詰まりや穴はないか、Ｇスーツの気密や動作に異常はないか、一つ一つ確認していく。そして、久しぶりにヘルメットを被り、支度を整える。それを終えると愛機雪風の周囲を手順通りに確認していく。が、そこで異変に

気が付いた。胴体下のセンターパイロンに見慣れぬ謎のポッドが付いているではないか。
　すぐに近くの整備員を捕まえて事情を聴く。どうやら、これは百由が取り付けたらしい。それを聞いた深井中尉はため息をついた。これだから部外者を関わらせたくなかった、と呟きながら。

「やあやあ、深井中尉。今日はよろしくお願いしますね」
　百由が笑いながら話しかけてきた。
「あのセンターパイロンに付けた物はなんだ？俺は何も聞いていないぞ」
「ああ、マギを計測する為の機材よ。ご安心を。ラムエアタービン式なので機体の電源は使用しないし、データも伝送するから機体には一切配線を接続しないわ」
「そういう問題ではない。事前に話を通せと言っている」
「あー、許可なら取ったわ。理事長代行に」
「ジャックか…しかし、先に言っておくが、飛行中に何が起きても責任は取らないからな」
「私だってこう見えても一端のリリィなので、身体面では平気よ。ＣＨＡＲＭとマギさえあれば、ね。それに理事長代行から講習も受けたから問題は無いはず」
　リリィだから問題ないと百由は言う。しかし、そんな根拠不明な回答に深井中尉は納得できるはずもない。だが、オカルト染みた面があるこの世界では自分の常識は通用しないと諦め気味に結論を出す。ため息交じりにコクピット前へと移動する。後ろを歩く百由は濃い緑色の飛行服を着ている。おそらく、防衛軍から借りたのだろう。一般的なヘルメットを片手に持ち、もう片方の手には袋に入った短めの棒状の物体を抱えている。深井中尉はその袋が何なのか気になった。よく分からないものを機内に入れたくはない…そんな気持ちもあったし、安全の面からも確認が必要だと感じたからだ。
「それはなんだ」
「ＣＨＡＲＭよ。ああ、大丈夫。これに刃は付けてないから。マギの

コントロールだけできるようにマギクリスタルコアと必要な部分だけしか付いてないわ」
「何故そんなものを持ち込むのか理解に苦しむ」
「ＣＨＡＲＭが無いと、マギを制御できないの。つまり、リリィはＣＨＡＲＭが無いと力を発揮できない」
「機体に乗るのにその話は関係あるのか」
「身体的な面で強化しようかと、機体の機動に耐えられるように」
　やっと話が見えてきた。つまり、戦闘機搭乗に必要な身体検査をすっ飛ばして機体に載る為にリリィとしての能力を使うのだ。その驚異的な力なら過酷な空の上でも耐えられると彼女は考えたらしい。それに気が付いた深井中尉は呆れながら言う。
「素の状態で身体検査をパスしたのか？」
「んー、受けていないから分からないわねえ」
「冗談じゃない。低酸素環境下で判断能力を喪失して異常行動を起こしたり、気を失ったりしたら迷惑するのはこっちだ。それに、高Ｇ環境下で酸素マスクを詰まらせて窒息なんてしてみろ、後悔するのはお前だ」
「そうならないように対策しているじゃない」
「では、９Ｇぐらいかかったら、その棒はいったいどのくらいの重さになるか…物理が分かるなら想像できるだろう」
「９倍ね。でも、問題ないわ。ＣＨＡＲＭはマギが入っていれば鋼鉄よりも硬く、鳥の羽より軽くなるもの」
　深井中尉は内心で頭を抱える。思っていた以上に自分の常識外な反論が次々飛んでくるからだ。だが、これ以上何を言っても無駄だろう、屁理屈の数が増えるだけに違いない。そして、深井中尉は諦めてコクピットに乗り込む。後部座席の百由に無線や酸素システムのチェックと身支度以外は何もするなと伝え、離陸準備を一通り進める。そして、インターホンを使用して外部の整備員と連絡を取る。周囲の安全を確認し、補助動力であるＡＰＵを始動。メインディスプレイから電子的に各所の状態をチェック、異常が無いことを確認する。それを整備員に伝えると、機体の牽引作業が始まった。そして、格納

庫から機体が出る。久々に日の光を浴びた黒い機体が鈍く輝く。すると、無線が飛んできた。ジャックからだ。
「零、問題は無いか？」
「ああ、ジャック。順調だ。後席の荷物が何もやらかさなければ、だが」
「大丈夫だ。その点は信用していい」
「で、ジャック。このまま飛び上がっても問題ないのか？白昼堂々だぞ」
「その点でも問題ない。仮設滑走路の試験で航空機が離発着する、と学院内に知らせてある。飛び上がっても不審には思われまい」
「なるほど、その手があったか。では、行ってくる」
「必ず帰ってこい、いつも通りの命令だ。見送れないですまんな」
「分かっているよ。了解だ」
　エンジン始動。２基の強力なターボファンエンジンが轟音を響かせる。計器上は異常無し、雪風も特に何も言ってこない。このまま飛べるだろう。続いて動翼の動きもチェック、外にいる整備員から目視で異常無しだと報告が飛ぶ。仮設滑走路へと移動、その滑走路は鉄のパネルで出来ている。それがずらりと一直線に敷き詰められているのだ。周囲が無人地帯だからできる荒業だろう。すると、背後も騒がしくなった。無人機レイフのエンジンも始動したのだ。雪風とはどこか違うエンジン音が鳴り響く。そして、格納庫からは整備や修復に携わった技術者や作業員がぞろぞろと外に出てきていた。離陸を見守る為である。いよいよ離陸だ。整備員が機体各部の安全ピンを抜いた事を知らせてくる。これで離陸準備完了。整備員が滑走路から離れたのを確認。その向こうにいるギャラリー達はこちらに向けて手を振っている。深井中尉はラフな敬礼を返す。そして、後席に向けて宣言する。
「離陸する」
「了解」
　すると、後席が青く輝いた。百由がＣＨＡＲＭを起動したらしい。では、これで無茶をしても問題ないという事だろう。ブレーキを放

し、スロットルを一気に押し込む。アフターバーナーを点火、機体は爆発的に加速。主翼と尾翼の角度を調整、短い滑走路からあっという間に飛び上がる。後席から悲鳴混じりの驚いたような声が聞こえるが、気にしない。

雪風はただ青空を目指して突き進む、轟音とベイパーを後に残しながら。

花の影

「で、ノインヴェルトというのは…九つの世界という意味よ。九人のリリィが持つマギをそれぞれのＣＨＡＲＭを介してマギスフィアに注ぎ込み、育てる。そして、それをヒュージに撃ち込む…」
「何を言っているのかさっぱり分からん」
　深井中尉とＢ―３、Ｂ―１３が飛び上がったその頃、百合ヶ丘女学院のグラウンドでは一柳隊が訓練を行っていた。そこに自分達も何かしておこうと深井大尉と桂城少尉が見物にやってきて、夢結から対ヒュージ戦の切り札であるノインヴェルト戦術がどのようなものか説明を受けている。
「夢結様、その御仁にそういう説明は通用せんと思うぞ」
「困ったわね。では、どう説明したものかしら」
「あー、マギとかそういうのを抜きに説明した方が早そうじゃ」
　そして、ミリアムが深井大尉に説明する。
「まあ、マギスフィアを多段式ロケットみたいなものだと考えてもらえば分かりやすいかのう。リリィがマギを注いだ回数をロケットの段数と例えるような」
「フムン」
「要するにエネルギーをどんどん継ぎ足していくような感じじゃの。そして、最終的に必要なエネルギー量に達すればいい。ロケットだって必要な速度が出なければ、ミッションに支障を与えたり、最悪の場合だと失敗したりするじゃろ？で、この学園では九人分のエネルギーを注ぎ込むのがベストとされておる。だからこそ、レギオンの構成人数は最小で九人となっておる。まあ、これはローカルルールだからよその学園では五人程度でも撃つがのう」
　ミリアムの説明でなんとなくイメージが付いたらしく、深井大尉は頷いた。続いて夢結が説明を重ねる。
「で、この戦術は難易度が極めて高いわ。レギオンの連携はとにかく重要、最高の威力を出すには九人全員にパスを回さないといけない。しかし、この戦術はマギもＣＨＡＲＭも激しく消耗するの…当たれば

どんなヒュージも一撃必殺で撃破可能、外れれば一転して窮地に陥りかねない諸刃の剣。威力は先程見てもらった資料映像の通りよ」
「接敵と同時に叩き込めばいいのでは」
「そうはいかないわ。周囲のヒュージから妨害を受ける可能性もあるし、大型のヒュージはマギの障壁…マギリフレクターを使って攻撃を防ぐ事もあるわ。だからこそ、攻撃を浴びせつつ、機を見て使用するの」
　その説明を聞いた桂城少尉が驚いたように言う。
「あの化け物はバリアも使うのか」
「ええ。だからこそ、通常兵器では効果が出ない」
「面倒な相手だ」
「だからこそ、この世界はこんな有様だと言えるわ。まあ、それは別として…そろそろ訓練を始めましょう」
　一柳隊の面々が動く。標的はヒュージを模した機械…百由特製のロボットが複数。まずは通常攻撃の練習だ。初めに梅と鶴紗が駆け出す。すると、梅が瞬間移動するように標的に向けて動く。
「なんだあれは」
「レアスキルの縮地。高速移動を可能とする梅の能力」
　深井大尉の疑問に夢結が答える。
「どういう理屈であんな動きができるのか」
「体にかかるベクトルを操作し、それを推進力に変える…と言えば通じるかしら」
「つまり、空気抵抗や反力を反転させると？無茶苦茶だ、物理法則を無視している」
「それがリリィというものよ」
　最早、考えるだけ無駄なのかもしれない。深井大尉はそんな事を考えると視線を戻す。鶴紗が撃って牽制。その隙に梅が縮地で接近、至近距離から射撃を浴びせる。そして、そのまま二人がかりで目標を制圧した。
「まあ、ざっとこんなもんだ」
　梅が深井大尉の隣で自慢げに言う。あの縮地とやらでいつの間に

か移動してきたらしい。
「で、他の面子にもそんな能力があるのか？」
夢結は頷く。
「ええ、もちろん。例えば…そこで射撃練習中の雨嘉さん。彼女のレアスキルは天の秤目。標的との距離等を正確に把握する事ができるわ」
それを聞いた深井大尉は雨嘉を見る。彼女はＣＨＡＲＭ…アステリオンを構えている。そして、その銃身の先から遥か彼方、廃墟の屋上…そこに的が複数並んでいる。距離は目測でおおよそ８００ｍといったところか。まさに狙撃である。雨嘉の隣に立つ神琳は双眼鏡で標的を見ている。どうやら、射撃結果の評価をするらしい。
普段のどこか内気な態度と違い、今の雨嘉は照準に神経を集中している様子だ。その銃身はぴたりと目標を見据えていてぶれない。そして、発砲。その弾丸は的に見事直撃。それを見た桂城少尉は感心したような表情を見せる。続いて二発目、またも命中。更に三発目、四発目…十発目まで全て命中。
「お見事ですわ、雨嘉さん。的のど真ん中を見事全弾直撃です」
「よかった…みんなが見ているからちょっと緊張しちゃったよ」
狙撃を終えた雨嘉を見て、深井大尉は夢結に聞く。
「あの狙撃の腕もレアスキルとやらの能力が影響しているのか？」
「いえ、あの射撃の腕は彼女の才能よ」
「フムン」
レアスキルとやらは補助的な能力が多いのだろうか、深井大尉は内心でそう考える。すると、桂城少尉が一つの質問を夢結に投げた。
「そういえば、君のレアスキルはどういうものなんだ？」
「それは…えーと、色々あってな」
夢結は黙り込んで答えない。そして、慌てて梅が話を誤魔化そうとする。
「もしかして、何もないのか？」
その態度を訝しんだ深井大尉がそう言うと、夢結は小さな声で答える。

「いえ…あるわ。ルナティックトランサー…使い道のないレアスキルよ」
「使い道がない？それはどういった能力なのか」
「力と引き換えに理性を消し、ただひたすら攻撃を続ける…暴れるだけの能力と言えるかも怪しい代物。私にはそれはただの呪いとしか思えない」
「呪いとは大げさだ。ひたすら攻撃を続ける…集中力を高める能力と解釈していいのか？それなら有益だろう」
「それだけならどれだけいいか。マギを使い尽くすまで暴れ続け、敵どころか味方すら襲いかねない…ただの暴走よ」
　夢結の話を聞いた深井大尉は返答に困った。どうやら彼女にとってこの話は何かトラウマがあるらしい。他人のそういう事をあまり気にしない深井大尉にもはっきり分かる程、彼女の表情も声色もすっかり沈んでしまったのだ。梅の方を見るが、彼女の表情もどこか暗い。これ以上、この件には触れない方がよさそうだ。
「あら、皆さんどうなさいました？」
　そうしていると、楓が話しかけてきた。
「いや、なんでもない。この後は何をするんだ？」
「そうですわね…一通り訓練は終えましたので、残るはノインヴェルト戦術だけですわ」
「フムン、さっきの話のやつだな」
「ええ。これがノインヴェルト用の特殊弾…と言いたいところですが、今回は演習用の模擬弾を使用しますわ。なにしろ実弾は高価かつ使用時の負担が大きいもので」
　楓が懐からケースに入った一発の弾丸を取り出す。ノインヴェルト戦術とやらにはこれが必要らしい。
「では、始めましょうか。楓さん、皆を集めて」
「了解ですわ」
　夢結は何事もなかったように元の涼しげな表情で楓に指示を出した。そして、それを見ていた桂城少尉が言う。
「あの様子だと、彼女はいつもトラウマか何かに耐えているのだろう。

でもないと、あんなすぐに表情を変えられないと思う。要するにあれは痩せ我慢だ、良くはないだろう」
「フムン。しかし、他人のトラウマなんてどうしようもない。そうだな…フォス大尉でもいれば話は別だが」
「確かに」
　こういう場合、軍医でありメンタル専門のフォス大尉ならうまく対処するのだろうな、と深井大尉は内心でそう考える。しかし、いないものはどうしようもない。それに、あくまでそれは夢結やその周囲の問題であり、そういう問題は彼女達が解決すべきだろう。そう思いつつ、深井大尉は集まってくる一柳隊の面々に視線を向けた。そろそろ、ノインヴェルト戦術の訓練が始まる頃合いだろう。

「さて、皆さん。では始めましょうか」
　集まった面々を前に梨璃が言う。
「じゃあ、今回は誰から撃ちましょうか？」
「私が撃つわ。最後は梨璃…あなたが決めなさい」
　夢結が最初に撃つと宣言する。そして、それを聞いた梨璃は驚いたような表情で聞き返す。
「ええ!?私が一人で最後に…ですか？」
「そうよ。実戦では何が起こるか分からない…よって、予定が崩れて誰が最後に撃つか分からない場合も十二分に考えられるのよ。だから、誰にパスが回ってもいいように練習していく必要があるわ」
「なるほど…分かりました。私、やります！」
　夢結の説明を聞き、梨璃は納得したように頷いた。すると、楓がにこやかに言う。
「ご安心ください、梨璃さん。万が一の場合でも、私が一から十まできっちりしっかりサポート致しますわ。大船に乗った気分でいてくださいまし!!」
「あはは…楓さん。そこまでしなくても大丈夫だから、ね？」
　梨璃は苦笑いしながら配置に向かう。まもなく訓練開始だ。
　このノインヴェルト戦術というものはレギオン各員がマギスフィ

アという弾のようなものをボールのようにパスして回すというものである。よって、その訓練とはパスをいかに高精度かつ手早く回す点を鍛える事が重視される。今回は実戦を想定し、パスを繋ぐ間に模擬標的による妨害が入る。それを回避しながらパスを回していくのだ。そして、大型の模擬標的にマギスフィアを撃ち込めば訓練成功となる。

「では…始めるわ！」

深井大尉は訓練を見渡せる位置に陣取って見物を始める。最初に夢結が引き金を引いた。だが、それを見て深井大尉は驚く、夢結が梅に目掛けて弾を撃ったからだ。しかし、梅は動じずにＣＨＡＲＭの刃で光り輝く光球を受け止める。この光る球体がマギスフィアというものらしい。そして、梅はＣＨＡＲＭを振ると光球を飛ばす。まるでバットでボールを打ったように光の玉は飛ぶ。そして、次の相手が受け止めて、また同じように球を飛ばす。そして、深井大尉はそれを見ていてある事に気が付いた。パスを繋ぐたびに光球の色が変わっているような気がする。これは込められたマギの量によって色が変わるのか、それとも撃つ人によって色が変わるのか。その辺りはよく分からない。

そして、マギスフィアは五人目の二水へと飛ぶ。だが、空中を飛び回る小型の模擬標的はそれを阻止すべく動く。射線上に飛び込もうと飛んできたのである。すると、マギを回し終えた面々がそれを迎撃、妨害を排除して道を開く。そして、無事に受け取った二水は慌てながらもミリアムへとパスを回す。その次は雨嘉へ…妨害とパスが繰り返されていく。ついに最後、楓から梨璃にマギスフィアがパスされる。梨璃は標的に向けて駆け、そのままの勢いで跳ね上がる。そして、光球を保持したＣＨＡＲＭを振り下ろして標的に光球を叩きつけた。一瞬の閃光、深井大尉はその眩しさで反射的に目を瞑った。そして、目を開くとマギスフィアが着弾した辺りに視線を向ける。すると、標的のロボットはスクラップと化しており、原型を留めていない。おそらく命中したらしい。

「終わったか」

流れとしてはシンプルなものだ、深井大尉はそう感想を呟く。しかし、実戦ではヒュージの攻撃を掻い潜り、主目標へ肉薄せねばならない。生身で化け物の大群相手にそれをやるのは明らかに過酷である。それに今回は模擬弾であったが、実弾の威力はこの比ではない。その辺りにも注意しながら撃たねばならないだろう。戦術の内容はシンプルだが、それを実行する事は決して簡単ではなさそうだ。

そして、訓練の見学を終えた深井大尉と桂城少尉は格納庫へと歩き出す。上空を飛ぶレイフの様子を確認する為だ。なお、その後ろを一柳隊の面々も付いてくるが、二人は最早気にもしない。

歩きながら深井大尉は頭上を見上げる。空は雲も少なく晴れている、少なくとも天気の心配はなさそうだ。

彼らは本当に信頼できるのかい？

そう耳元で囁くような声が聞こえた気がした夢結は咄嗟に振り返る…その声は確かにここにいる筈の無い人物のものだった。だがしかし、そこには誰もいない。

「また、か…」

「どうした、夢結？」

「何でもないわ」

そうして、夢結は一柳隊の皆の背を追って歩き出す。さっきの声はきっと気のせいか何かだろう…そう自分に言い聞かせながら。

情報収集開始

「こちらＢ―３、予定空域に到達。これよりテスト飛行を実施する」
「了解、Ｂ―３。打合せ通りに定時連絡を求む」
「Ｂ―３、了解」
　Ｂ―３…雪風は高度４０００ｍ付近まで上昇、これでも普段の任務で飛ぶ高度よりずっと低い。そして、機の後方にはＢ―１３…無人機であるレイフが１ｋｍ程の間隔を保ったままぴったりついてくる。これで用意は整った。偵察ミッションの目標であるヒュージネストは目と鼻の先、巨大な雲の柱がそびえ立っている。各種センサ類を起動、レーダー、各種カメラ等光学系…雪風に積み込まれたそれらを全て使用して、帰還への手がかりを探すのだ。
「センサ類は全て雪風自身が操作する。お前は絶対にメインディスプレイや操作パネルには触れるな」
「了解。と言っても、それだと暇だなあ」
　深井中尉からの忠告に百由はどこか不満げな返事を返す。そして、百由はメインディスプレイに目を向ける。すると、レーダーの表示が目についた。その画面上には数多くのシンボルが表示されている。その多数のシンボルには民間機と表示が付いている。航路を飛ぶ旅客機や貨物機だろうか。しかし、その列から離れた空域にただ一機だけ別のシンボルが表示されている。
「この一機だけ離れたところを飛んでいるわね…なんだろう」
　百由がそう呟くと、深井中尉が答える。
「こちらを監視しているらしい。おそらく早期警戒機の類だろう」
「そんな離れたところから…しかし、監視の意味はあるの？」
「データ収集、後はこちらの動きを見張っているに違いない。何かあれば四方八方からＳＡＭ…対空ミサイルを撃ち込んでくるつもりなのだろう。そこらに艦艇や地対空レーダーがいくつか点在しているからな」
　それに、と深井中尉は呟く。すると、メインモニタに画像が出てきた。

「監視しているのはあの機だけじゃない。陸地にはいくつかの集団が点在、光学系の機器でこちらを観測しているようだ」
　メインディスプレイには草木に隠れるような姿勢を取る一団が複数映し出されていた。草木を模した偽装網を被り、光学系のセンサを上空に突き出している。
「どうやってこんなのを見つけたの？」
「雪風が見つけた。見た目だけではなく、赤外線対策までして隠れてはいたが…それでも雪風の目を誤魔化す事は出来ない」
　深井中尉は続けて画面の表示を切り替える。
「他にも妙なものを捉えている、この流れ続けているスポットジャミング…いや、妨害電波。これが話に出ていたエリアディフェンスとやらなんだろうな」
「この発信源は都内？」
「その他多数の場所からも出ている。しかし、ＥＳＭ…まあ、電波を探知する機器と考えればいい。それが捉えたデータを見る限り、新宿辺りに特に強い電波発信源があると考えられる」
「これは主要なもの以外も全て捉えているの？」
「ああ」
　妨害電波の発信源がマップ上にシンボルとして表示される。都内だけでなく、その周囲にも多数のシンボルが並ぶ。当然、百合ヶ丘の周囲にもそれがあった。この広域にまき散らされた妨害電波でヒュージの奇襲を防いでいるのである。
「なるほど、これが全てエリアディフェンスか…」
「だが、こんな余計なものはどうでもいい。これから本命を調べる」
「了解」
　雪風のセンサは目の前にそびえるヒュージネストへと向けられた。電子、可視光、赤外線等の光学系…搭載しているあらゆるセンサがヒュージネストを徹底的に調べ上げる。すると、警告音が鳴った。センサが何か見つけたらしい。
「これは…雲の中に穴があるのか？更に海面より下に空間がある」
「ええ、その通り。そして、その奥には…」

「なんだ？何か巨大な物体がある」
「アルトラ級ヒュージ…それがこの７号由比ヶ浜ネストの主よ」
「距離があるから正確には分からないが…サイズはとにかく巨大だ。こんな化け物がいるのか」
「その全長は５００ｍとも１０００ｍとも言われているわ。そして、こいつがネストを維持しているのよ」
　すると、深井中尉は機の高度を上げる。
「側面からではうまく探知できない。これなら上空から垂直にスキャンした方がいい」
「やめた方がいいわ。中から狙撃されかねない」
「相手は対空火器を持っているのか？」
「マギを使用した光線を撃ってくる可能性を捨てきれない。あと、中にどんなものが潜んでいるか分からないし」
「今リスクを背負う必要はないか…」
　そして、百由は持ち込んだ端末を開く。そこにはネスト周辺の立体的な図が映し出されていた。
「それに、こっちもいいデータが取れたから無理する必要はないわね」
「なんだ？」
「この機の腹に積んだポッドが捉えたデータね。いい具合にマギの流れを捉えたの。ふむ？これは…」
「何かあったのか」
「いえ、なんかネストから渦巻くように出たマギが…ここからちょっと離れたポイントに向かって噴き出しているような」
「マギとやらを俺はよく知らないが、それはよくある事なのか？」
「こんな変な動き初めて見たわ。何かしら」
「座標を教えろ。こっちでも探査する」
　そして、百由はその座標を言う。再び雪風のセンサはそのポイントを重点的に探査する。
「赤外線カメラに何か影が…これは、空中の一か所に温度が違う点が浮いているのか」
「そのようね。こっちの計測結果ではこの点にマギが集まっている

わ。でも、そこから先にマギは無い…これは消えている？いや、まるで吸い出されているような感じにも見える」
「つまり空中に浮いた穴か。これが帰還への鍵か？」
百由はうーん、と唸る。そして、答える。
「そうかもしれないし、違うかもしれない。でも、こんな明確な事象は十二分に怪しいわね」
「あとは調べるしかないか」
「そうね、継続して観察するしかないわねえ。データが足りないわ」
深井中尉は深井大尉以上に無口な印象であったが、必要な会話であればしっかりと返事を返してくるようだ、百由は無線で会話をしながらそんな事を思い浮かべていた。
そして、雪風はネストから離れるように左旋回、陸地へのルートを目指す。すると、警報音が再び鳴った。
〈ＥＮＥＭＹ〉
雪風が敵を捉えたと言ってきたのだ。メインディスプレイに光学センサの画像が表示される。そこには浜辺を歩くミドル級ヒュージが映っていた。周囲にはリリィの姿も防衛軍の姿もない。地上からはまだ捕捉されていないらしい。すると、深井中尉は言った。
「ちょうどいい、対地攻撃の試験をしよう」
「積んできたロケット弾をあれに撃つって事？」
「その通り」
「うーん、流石に無許可はまずいような…」
百由がそう言うと、深井中尉は地上の管制を呼び出す。余計な揉め事は勘弁願いたいからである。
「こちらＢ―３、ミドル級と思しきヒュージを発見した。対地攻撃試験を実施したいので射撃許可を求む」
「何、ヒュージに攻撃すると？許可できない。現在位置を報告せよ、Ｂ―３。地上部隊を向かわせ…いや、ちょっと待て」
「Ｂ―３、スタンバイ」
ほんの少し間を置いて、管制から返事が返ってくる。
「Ｂ―３へ、攻撃を許可する。しかし、先に現在位置と目標の座標を知

らせ」
「こちらB―3、了解」
深井中尉は目標の座標と自機の位置を報告する。そして、交戦を宣言。こちらの詳しい位置を聞いてきた理由はおおよそ察しが付く。彼らは対地攻撃の様子を観察するつもりなのだろう。
〈ＥＮＧＡＧＥ〉
〈ＭＯＤＥ　ＡＧＧ…　ＲＤＹ―　ＲＯＣＫＥＴ〉
火器管制システムを対地攻撃モードに切り替え。ＨＵＤ…ヘッドアップディスプレイには目標を囲う四角いＴＤボックスが表示される。これが対地ミサイルならば手順を踏んでロックオンすれば話は済むのだが、今回は無誘導のロケット弾である。機体のコンピュータが計算した着弾予想位置がＨＵＤに表示されるので、パイロットがそれを見ながら機を操縦、そのまま目標にロケット弾を叩き込む流れとなる。同じく無誘導な攻撃手段である機銃掃射とほぼ同じ要領だ。
目標のヒュージは上空を気にもしていない。浜辺に上陸後、周囲を見回している様子だ。動きは無い、攻撃するなら今しかない。そう考えていたところ、メインディスプレイに新たな表示が出る。
〈Ｂ―１３：ＥＮＧＡＧＥ〉
〈Ｂ―１３：ＲＤＹ　ＧＵＮ…　ＲＤＹ　ＲＯＣＫＥＴ〉
後方にいるレイフも攻撃すると宣言してきたのである。後方にも注意する必要が出てきた、下手をすれば空中接触や攻撃に巻き込まれる危険性があるからだ。深井中尉は雪風に対して呟く。
「Ｂ―１３をサポートしてやれ」
〈ＲＯＧＥＲ，　Ｌｔ．　ＦＵＫＡＩ〉
すると、雪風はデータリンクにて通信を開始。レイフに攻撃タイミングを指示するのである。これで後ろを気にせずに済むだろう。深井中尉は一度旋回、最適な攻撃角度を狙う。そして、目標に対してアプローチ開始。ＨＵＤの表示を見ながら距離を詰める。操縦桿やラダーを細かく微調整。そして、タイミングを見て引き金を引いた。機内にロケット弾の発射音が響く。直後、操縦桿を引いて離脱機動に入る。発射された多数のロケット弾は着弾すると着発信管が作動、そし

て炸裂。直撃弾と至近弾を浴びたヒュージは爆発の炎と煙に覆われる。チラッと後ろを見るとレイフも攻撃を実施していた。視界から目標が消えるが、雪風のセンサは目標を捉え続けているだろう。だが、自分の目で結果を見ておきたいと深井中尉は考えた。過去のデータを見る限り、ミドル級やスモール級のヒュージは通常兵器で対抗可能と記載があった。その記載通りに攻撃が通用していればいいが。

そして、左旋回を続けて煙が晴れるのを待つ。煙が晴れると目標の姿はまだそこにあった。しかし、倒れ込んでいる様子だ。効果はあった。とどめを刺すべく、再度アプローチ。再びロケット弾と機関砲弾の雨を浴びせる。これでロケット弾は弾切れだ。レイフも二度目の攻撃を実施。直撃を浴びせた事を誇るようにアフターバーナーを点火、急上昇。高度を上げて旋回開始、再び煙が晴れるのを待つ。そして、煙が晴れると、ミドル級ヒュージは原型を留めずに瓦解していた。そして、深井中尉は後席に尋ねる。

「倒したか？」

「ええ、あれなら確実」

専門家が戦果を認めた。よって、攻撃成功。

〈ＭＩＳＳＩＯＮ　ＣＭＰＬ〉

「こちらＢ―３、攻撃完了。目標はおそらく瓦解、撃破したと思われる」

「了解、地上部隊を向かわせて確認を実施する」

「コンプリートミッション、ＲＴＢ」

そして、雪風はレイフを従えて帰還する。

仮設滑走路に着陸後、雪風とレイフは格納庫に入る。整備員と技術者が次々と集まり、作業と点検を開始する。そして、深井中尉と百由は機体から降りる。だが、深井中尉は整備員に作業を任せると、どこかへと行ってしまった。おそらく、ブッカーの所へ報告しに行ったのだろう。一方、この場に取り残された百由はずしりとした疲労感に襲われつつ、作業の様子をぼんやり見ていた。そうしていると視界の隅に一柳隊の面々が映った。何故ここにいるのだろうと視線を動かす

と、その先に桂城少尉と深井大尉がいる。大型のディスプレイに何かを表示して見ているらしい。何を見ているのだろうと、百由は気になってそちらへと移動する。梨璃が深井大尉に何か質問している。
「これは何でしょう？」
「この物体が何なのかは今のところ分からない。だが、こいつは怪しいと俺は思う」
　すると、ディスプレイには先程観測したと思しきマギの流れを模したデータが表示されているではないか。
「深井大尉、いつの間に私がさっき観測したデータを抜き取ったのかしら？」
　百由がそう言うと、深井大尉が返事を返してきた。
「何を言っている、これはレイフが先程記録したデータを見ているんだ」
　よく見ると、自分が計測したものとは表示が異なる。
「レイフが…いや、どうやってマギを？」
「マギ？なるほど、この大気に干渉している物体がマギというものか」
「大気に干渉した物体…これはどうやって観測したデータなの？」
　すると、深井大尉は言った。
「フローズンアイ…空間受動レーダー。大気に干渉する物体や事象を全て捉える事ができるレーダーだ」
「大気に干渉する物全てを捉える？そうきたか…確かにそれなら納得だわ」
「さっきの反応だと、そちらも同じようなものを観測したという事か」
「ええ」
　すると、桂城少尉が口を開く。
「じゃあ、あの穴も捉えたという訳だ」
「捉えたわ、赤外線でも異常があった」
「君はあれが異世界に繋がっていると思うかい？」
「調べてみないと分からないわね。今はとにかくデータが無い」
　百由がそう答えると、深井大尉が質問を飛ばしてきた。
「では、今後はこの現象を注視すればいい訳か」

「おそらく…あくまで勘だけど」
「フムン。解決への糸口は見つかったわけだ」
こうして、雪風とレイフの調査飛行は終わった。ヒュージネスト周辺に未知の事象を確認し、ミドル級ヒュージを撃破する戦果を出して。
だが、一つ深刻な問題が発生した。それはこの先しばらく何の進展もなかったという点である。

儚い花

回収したシルフィードの残骸、その解析がやっと終了する。その残骸に残されたいくつかの電子機器のログを復元する事に成功したのだ。

「まあ、このガラクタからこれだけ出せれば上等か」

深井大尉はそう呟くと端末を操作する。確認する事が出来たデータはこの機体がどこを飛んでいたのか、そして機体の飛行姿勢等の状態程度だった。記録されていた日付は自分達がここに迷い込んできたその日。つまり、ロンバート大佐が反乱を起こした日である。その内容を読み解くと…この機はあの日、通路の近くを飛行していた。そして、そのまましばらく哨戒飛行を続けた後、突如針路と速度を変更。この時点で戦闘状態に入ったのだろう。そして、被弾したのか右エンジンの出力が急低下。相手はジャムか、それとも同士討ちか。そこまでは分からない。その後、パイロットは射出座席を作動させて離脱。この機は無人のまま通路に飛び込んだのだろう。その間のフライトデータは無茶苦茶な数値を叩き出している。そして、データが安定したその後に突然急降下を始め、墜落。データが安定したのは、この世界に飛び出したからだろう、と深井大尉は考える。記録されていた時間は当てにならない。あの混沌とした状況で時間という概念は意味をなさないだろうから。

「しかし、こいつはこの世界に飛び出して、偶然にもヒュージの頭上に落ちた…そう考えるしかないか？」

「そうだろう、と僕も思う。わざわざ墜落した機体を拾って載せたとは考えにくい」

「フムン、そう考えるとあのヒュージはとてつもなく運が悪い。異世界から迷い込んだ戦闘機が墜落して、それが直撃するなんて隕石が降ってくるよりレアな事象を受けたんだ」

「まあ、これで通路がおかしな事になっていたという証明にはなるでしょうかね」

「しかし、だ。こいつと俺達はこの世界にやってきたが…ロンバート

大佐やジャムがこちらに入り込む可能性も勿論あったわけだ。何故あいつらはこちらに来なかった」
「分かりません。何か法則性があるのか…はたまた偶然か…」
そう言って桂城少尉は考え込む。しかし、結論はそう簡単に出ないだろうと深井大尉は思う。なにしろ判断する為の材料がとにかく足りないのだ。
そして、この現象とは直接関係ないが、気になる点は他にもある。それはこのシルフィードの主翼にＦＡＦのマークが描かれている理由だ。ＦＡＦでは新造機にＦＡＦのマークを塗装する事を止めていた。理由は電子的に敵味方の識別が可能である上に、フェアリイ星を飛ぶのはＦＡＦかジャムの二択だ。よって、友軍であれば必然的にＦＡＦ機であり、わざわざそのような識別方法に頼る必要が無いと省略されたのだ。描かれた理由は想像するしかないだろう。所属部隊独自の対ジャム戦略によるものか、それとも単に士気を上げる為か。それとも、地球から飛んでくる機体へのアピールの為か。ぼんやりとそんな事を考えたが、馬鹿馬鹿しいと深井大尉は考える事をやめた。
謎の穴についての考察と検証は完全に行き詰ってしまった。あの偵察飛行以降、毎日のように地上からデータを収集していた。だが、変化は無い。どのようにその穴が出来ているのか、穴の先はどうなっているのか…さっぱり掴めない。深井大尉がシルフィードの主翼を眺めながら考え込んでいると、背後から声が飛んできた。
「深井大尉、何しているのですか？」
「ただの検証作業だ」
声の主は一柳梨璃、どうも久々に顔を見た気がする。しかし、その隣には知らない顔がいる。色素の薄い長い髪、どこか儚げな印象の少女である。
「そいつは誰だ」
「えーっと、前に説明した浜辺で倒れていた子です。それがどうも記憶喪失みたいで、私が面倒を見ているのです」
それは二週間程前の事である、一柳隊はその日に浜辺で発見されたヒュージの残骸の調査に出動していた。そして、数多くの腐敗した残

骸の中から一人の少女を発見し、保護したのであった。それが今ここにいる少女らしい。
「記憶喪失だって？だが、何故ここで面倒を見る必要があるのか」
「それが、この子は調べた結果リリィとしての素質を持っていまして…こうして学院で保護する事になったのです」
「しかし、記憶喪失なのだろう。では、専門の病院なり施設なりに送った方がいいとは思うが…そもそも身元は分かっているのか？」
「学院は様々な事情を抱えたようなリリィの保護もやっているので、そういう名目で保護するようです。そして、この子は所持品も無く、自分の名前も一切覚えていないのでどこの誰なのかはまださっぱり…」
「フムン。では、何と呼んでいるんだ。流石に名無しの誰かさんとはいかんだろう」
「な、名前ですか!?えーと、それはですね…色々あって、そのー…」
どうやら梨璃は話をはぐらかそうとしているようだ。何か余程の事情があるのか？すると、記憶喪失の少女が口を開く。
「私の名前？結梨！一柳結梨だよ」
「結梨？」
「うん、梨璃と夢結を合わせたってこの前聞いた」
「フムン」
どうやら、単に名前の由来が恥ずかしくて隠したかっただけのようだ。
「で、梨璃。この人は？」
「結梨ちゃん、この方は深井零大尉。で、そちらに立っているのが桂城彰少尉だよ」
「ふーん…」
結梨は何かを嗅ぐような動作をすると、そのまま首を傾げる。
「なんだか不思議な匂いがする人。悲しい？寂しい？怒ってる？んー、どれも何か違う。何考えているのかよく分からないや」
「何をしているんだ、コイツは」
「結梨ちゃん、どうも匂いで他人の感情が分かるみたいでして」

「リリィにはそんな能力があるのか？」
「うーん、この子特有の特殊な力のようで…なんとも」
　一方、結梨は不機嫌そうな表情をしながら呟く。
「この人はぜんぜん分からない。学院にこんな匂いのする人は他にいないもん」
「人間の感情を読み取れる事が出来るとしても…だ。人の心の内なんて一言で言い表せるものではない」
「むー…でも、向こうの人は分かるよ。何か楽しそうって思ってる」
　不満げに頬を膨らませた結梨は桂城少尉を指さして言う。
「僕の事？まあ、間違ってはいないかな」
「あれは見れば分かるだろう。好奇心の塊みたいなヤツだぞ」
「あはは…まあまあ」
　梨璃が苦笑いしつつ場を収めようとすると、結梨は別の方を向きながら聞く。
「ねえ、梨璃。あそこにそこと同じ人がいる…立体映像？」
「いや、違うよ。あれは深井零中尉」
「双子？」
「うーん、なんて説明すればいいかな。同じ人だけど同じ人じゃない…別の世界の同じ人がやってきてしまったと言えばいいかな？」
「鏡の中にでも吸い込まれたの？」
「鏡？」
「うん、この前本で読んだの。鏡の中に吸い込まれる怖い話。その鏡の中には自分がもう一人いて、そのまま入れ替わろうとしてくるんだ」
「あー、ホラーとかそういう話ね…でも、ちょっと違うかなーって」
　そんなドッペルゲンガーみたいな話を二人の深井零に言ったら間違いなく双方不機嫌になるだろう、梨璃は頭を抱えながらもどう説明するか考える。すると、そんな梨璃を尻目に結梨は歩き出す。その行先は少し離れたところでモニタを見ているもう一人の深井零。
「さっきと違う匂い、同じ見た目なのに不思議。面倒くさい？誰かに会いたいと思ってる？…やっぱり、よく分からない」

「誰だ、お前は」
「結梨。一柳結梨」
「アイツの妹か何かという事か。だが、俺とは関係ないだろう。何故ここに来た」
「妹じゃない。私は記憶が無いの。だから、梨璃に世話してもらっているだけ。あと、この名前も付けてもらったの」
「そうか」
「あ、今は分かる。関わりたくない、って思ってる」
「その通り。お前がどんな身の上だろうと、俺にはまったく関係のない話だ」
「ふーん。でも、せっかくだから一つ聞きたいな」
　深井中尉はため息をつく。何故、こいつは自分に関わろうとしてくるのか、と考えながら。
「この質問をしても、みんな心配したり、気の毒に思ったりして本当の事を言ってくれないの。でも、あなたなら一切遠慮しないで答えてくれそう」
「それは何だ？面倒だ、手短に済ませろ」
「深井中尉、私は人間かな？」
　その少女の問いを聞いた深井中尉はある人物を不意に思い出す。それはただ悲しく、辛い記憶。
　それはトマホーク・ジョン、ただ一度だけ雪風後席に乗った男。そして、自分がジャム人間である事に最後に気づき、自らを犠牲にして深井中尉と雪風をバンシーⅣから逃がした男。
「何故…そんな事を聞く」
「だって、私には記憶が無い。自分の名前も、それまでどんな暮らしをしていたかも覚えていないの。家族すら分からない。だから、他の人達とは違うのかなって」
　他と違う自分は異質だ、彼女はそう言いたいのだろう。
「記憶なんて…あればいいってものじゃない。覚えているだけで不幸な気分になるような記憶だってある」
「それは質問の答えになってない。でも、なんか寂しそう」

「どんな手品か知らんが、何故いちいち人の感情を読み取ろうとする…失礼だとは思わないのか？」
「だって、分かるもん」
「分かっても言わない事がマナーだ。人の考えを読もうとする人間がこれ以上増えたらたまったものじゃない」
「他にもこういう事が出来る人がいるの？」
「医者だ、とにかく面倒な」
　そんな問答をしていると、梨璃がすっ飛んできた。
「ああっ!!申し訳ありません、深井中尉！結梨ちゃん。駄目だよ、邪魔しちゃ」
「えー」
「えー、じゃないよ。明日は戦技競技会なんだから、そろそろ支度しないと」
　そう言いながら、梨璃は結梨を引っ張って歩いていく。それを見た深井中尉は歩き出す。向かう先は理事長代行…ブッカーのいる部屋だ。深井中尉はドアをノックし、部屋へと入る。すると、中にいたブッカーは驚いたような表情で深井中尉を見る。
「どうした、零。この時間はいつも格納庫に籠りっきりだろうに」
「聞きたい事がある」
「なんだ。何かあったのか？」
「結梨とかいうヤツについて、だ。アイツは何者だ？」
　すると、それを聞いたブッカーはため息をつく。
「お前も彼女について何か嗅ぎつけたのか、零」
　そんなブッカーの反応に零は怪訝な顔を浮かべる。これは何かあるに違いないと考えながら。
「どういう事だ？」

積もる火種

部屋に押しかけて来た零に対し、ブッカーは報告書の束を机に放りながら事情を話し始める。
「彼女を保護してから、やたらと周囲がきな臭くなっていてな…どうも嫌な感じがする」
「子供一人に大袈裟な話だ。まるでスパイでも来たような言い回しじゃないか」
「その通り。怪しいのがこの近辺を毎日のようにうろついていると報告が入っている」
「何？」
「それだけじゃない。一部のお役所からも彼女の身柄の引き渡しを要求するような話が出てきている」
「それは確かにきな臭い。だが、記憶喪失の子供一人で何故そんな騒ぎになる。アイツは要人の関係者か何かだと？」
ブッカーは首を横に振る。
「いや、今のところはまだどこの誰なのかもさっぱり分からん。だが、リリィとしての適性がある事は判明している。で、何か手がかりは無いかと遺伝子検査をやってみた」
「結果は？」
「軽く調べたが、行方不明者等のデータベースには該当無し。まあ、これはこちらが入手できた範囲だが。よって、更に詳細な解析作業を実施中…なのだが、解析している連中がどうも妙な感じがすると言っていた」
「妙？」
「ああ、どうも遺伝子に目立った特徴がないとかそんな事を言っているんだ」
「特徴が無いような遺伝子？なんだそれは…まさか、ジャムが作った人間じゃないだろうな、トマホークの件のように」
零はブッカーを睨むように言う。しかし、それはどこか悲しげな表情だった。そして、トマホークという名前が零の口から出た事でブッ

カーはかつての出来事を思い出す。バンシーⅣでのあの悲しき出来事だ。
「そんな目で俺を見るな。安心しろ、検査の結果はヒトそのものだった。お前が数度見た訳が分からん人をコピーしたような何かでは無かったよ」
「それならいいが…で、目星は本当についてないのか？」
「実は心当たりが一つある。人体実験で作られた人造人間…かもしれない」
「人体実験だって？なんだその無茶苦茶な話は」
「その人造人間についてはあくまでも噂だ、あちこち探りを入れた時に聞いた」
　ブッカーは頷きながら言うと、モニタの電源を入れる。そこには『G．E．H．E．N．A．』と書かれた資料が表示されていた。
「この世界にはこういう多国籍な巨大研究機関があってな…その研究内容はマギからリリィ、ヒュージと様々だ。多種多様な企業も絡んでいるし、様々な国家や団体とも繋がりがある。そして、研究の程度はピンからキリまで。その中でも特に過激なグループは平気で人間を使った人体実験まで行う。倫理的に大問題なレベルと言っていい」
「人体実験…事実なのか？」
「ああ。この世界はいろんな意味で余裕が無い、俺達がいた世界よりもずっとだ。そうして、ひたすら結果を求めて無茶苦茶な事をやる連中が出てきた訳だ」
「俺達の世界の地球より必死で熱心な事だ」
　零の皮肉を聞きながらブッカーは画面の表示を更に変える。そこには数人のリリィに関する情報が表示されている。そして、何故かただ事ではない物騒な惨状が写った画像もある。
「そして、この学院ではそういった実験に巻き込まれたリリィを保護しているんだ。場合によっては保護時にこんな荒っぽい手を使う事もある。そうだな…お前が見た事ある中だと一柳隊にも一人その被害者がいる」
　確かにどこかで見たような顔がいる。そして、それを聞いた零はわ

ずかに考えると口を開く。
「…つまり、こことこいつらは敵対関係という事か」
「ああ。嗅ぎまわっている連中の中にはこの研究機関が関わっているとされる人間もいる」
「ほぼこいつらが怪しいという事だな。何か無ければこんな露骨な探りなんて入れてこないだろう」
「そうだ。しかし、これという確証はないが」
　零は窓の外へと視線を向ける、その視線の先にはいつもの格納庫がある。そして、何かを思いついたような仕草をすると一つの案を出した。
「それなら雪風に探らせればいい」
「駄目だ。飛ばすと勘づかれるかもしれない、妙なリスクは抱えたくないぞ。ただでさえ、雪風は注目されているんだ。問題の連中とは別方面からだけどな」
「飛ぶわけではない。駐機させたままの状態で電子的に偵察させるんだ」
　ブッカーはハッとしたような表情をする。雪風を使うという手を考えてもいなかったようだ。
「その手があったか。ふむ、それなら丁度いい」
「丁度いいだって？何を考えているんだ、ジャック」
「ああ、明日はこの学院でちょっとした行事があるんだ。当然、さっき話したような不審な連中がぞろぞろやってくる事は間違いない。よって、雪風に電子攻撃させてそいつらを無力化する」
「偵察ではなく、電子的な攻撃任務をやるという事か？」
「まあな。攻撃のどさくさに紛れて情報を抜き取れれば御の字、といったところだろう」
「しかし、何故そこまで熱心にその組織に対抗しようとするんだ？」
「この体にある記憶を紐解くと…この組織に絡んだ嫌な記憶がいくつも出てくるんだ。そのせいかもしれない」
「その憎悪はジャックがその記憶を直接見て抱いた感情か？それとも、その体の持ち主が元々抱いていた感情なのか」

「分からん。どちらも入り混じっているような感じがする。不思議な気分だ」
「それはよくないな。自分がどちらの存在なのか分からなくなるなんてしょうもないオチはやめてくれよ、ジャック。そうなると嫌でもフォス大尉を呼ぶ羽目になるからな」
「さてな。少なくとも俺は俺だよ、零」
「どうだか」
　そのような会話をしていると、部屋のドアがノックされた。すると、生徒会長の一人である出江史房がドアを開いて入ってきた。だが、彼女は零の姿を見て驚く。深井中尉はいつも格納庫で機体の傍にいるという印象が強いからである。
「ブッカーさん、お取込み中でしたか」
「いや、大丈夫だ。何かあったか？」
「いえ、定時報告に来ただけです。結論から言うと…まあ、特に進展はありませんが」
「やはりそう簡単にはいかんか。では、先程のプランで行こう」
「プラン…とは？」
　史房は首を傾げる。すると、ブッカーがその疑問について答える。
「明日の件についてだよ。どうせ、ろくでもない連中が大挙してやってくる。そこでだ、雪風に電子的な攻撃を実施させて、その手の連中を片っ端から無力化するという策さ」
「電子的…？そんな事、できるのですか？」
　すると、零が静かな口調で答える。
「相手が電子的な通信手段や索敵手段を使うのであれば、不可能ではない」
　その零の冷たく鋭い視線に史房は思わず息を呑む。まるで部外者の反論や疑問なんて無意味だと言っているような圧を感じる程だった。どうやら相当の自信があるらしい。
「ＥＷで攻撃するなら機体を表に出す必要があるかもしれない。あと、雪風が全力でレーダーを動かすとそれだけで危険極まりない。よって、人払いが必要だ」

「ふむ…格納庫の周囲を封鎖して、機体は見えないように暗幕か何かで覆うか」
「あの機体をまとめて隠せるほどの布ですか…あったかしら」
そんな会話をしていると、ブッカーは何かを思い出したように口を開く。
「あっ、しまった。深井大尉と桂城少尉は明日から出張だった」
「出張…どこに？」
「防衛軍から呼び出しがあったんだ。よって、状況報告の為に泊まりで新宿だ。そういえば…桂城少尉は特殊戦の前は情報軍所属だったと言っていたな。こんな時にはうってつけの人材だと思ったのだが」
「それなら確かに専門家だ。惜しかったな」
ブッカーは残念そうにため息をつく。
「まあ、仕方がない。俺から今日の間に概要は伝えておく。場合によってはB―1の力を借りる事になるかもしれん」
「B―1は近頃この世界の武器について情報をひたすら漁っているらしい。協力してくれるだろうか？」
「この世界の武器…まさか、CHARMか？確かにあれは機械であり、プログラムの塊だから構造なんかを把握する事は出来るだろうが…しかし、あれにマギという存在を理解できるのか？」
「さあ、俺にはそこまで分からない。さて…俺も雪風にこの内容を伝えるよ、ジャック」
「後で詳細を詰めるとしよう」
そう言うと、零は部屋を立ち去った。一方、ブッカーは席を立ちあがると電話の受話器を手に取る。電話を掛ける先は格納庫内にいる深井大尉である。出張の件で連絡事項を伝えるついでに先の件を確認しようというつもりなのだ。
「で…発生した経費に関しては先日説明があったように対処してくれ」
「了解だ、少佐」
「不備があると経理がうるさい、しっかり頼む。それと…深井大尉、別件で話がある」

「なんだ?東京でビールでも買ってこいって?」
「いや、違う。これは真面目な話だ」
「フムン」
　そして、ブッカーは先程あった会話の内容を深井大尉に伝えると、場合によってはB―1…雪風の力を借りてもいいかと聞く。
「こちらとしては構わないが…それは雪風次第だろう」
「そうか、B―3経由でB―1には伝えてみる」
「まあ、今はあなたが指揮官だ。少佐の命なら雪風…いや、B―1も断りはしないだろう」
　通話が終わる。そして、ブッカーは早速深井中尉を呼び出して雪風…B―3への命令書を作成すると、その文章を送信。B―3からは了解の返答が届き、B―1へ協力要請を出したと報告を飛ばしてくる。無事にもう一機の雪風を戦力に加える事が出来たのだ。これで準備は万端、明日が来るのをただ待つだけだ。
　そして、翌日。朝早くに深井大尉と桂城少尉は荷物を抱えて学院を出る。彼らはこの後の行事を気にする素振りも見せずに迎えの車に乗った。
　それから少し後にB―3は牽引車に引かれて格納庫から外へ出る。そして、整備員や技術者と共に待ち構えていた生徒会の面々がB―3の機体を覆い隠すように鉄骨と布を使って簡単なテントのようなものを設営。そのまま周囲は関係者以外立ち入り禁止とする。
　一方、航空系技術者や防衛軍関係者も好意的に協力して作業に当たる。彼らは雪風の電子戦能力に興味があった。その為、それが使われる事になる今回の事態はまさにうってつけであったのだ。それに攻撃対象とその関係先は自分達とは無関係な連中なので助ける義理もないのである。
　そして、学院のイベントである戦技競技会が始まる。リリィ達が次々と競技に挑む中、周囲を警戒する人員から不審人物や所属不明の無人機を確認したとの報が次々届く。
「深井中尉からB―3へ、作戦開始。この周囲を飛行する所属不明機と地上に存在する不審な電波発信源を全て探知。それらの脅威度を

判定し、各個に電子攻撃を実施。敵性と判断した対象を無力化せよ」
〈ＲＯＧＥＲ，　Ｌｔ．　ＦＵＫＡＩ〉
〈ＲＤＹ〉
　攻撃開始、そこからは最早一方的である。
〈ＳＵＣＣＥＳＳ〉
　雪風のセンサは上空を飛行する小型ＵＡＶを全て探知、フライトプランやトランスポンダの情報が無い機体を全て敵と判断。その敵に対して猛烈な妨害電波を浴びせて機能不全に追い込み墜落させる。元々機体規模が小さくこの手の妨害に弱い小型ＵＡＶはひとたまりもない。そして、その中で操作を奪い取る事に成功した機体を学院内に強制着陸させた。また、同様に周辺に潜んでいた敵性集団も片っ端から通信能力を喪失、突然の事態に狼狽しているところへ学院の警備チームがやってくる。そして、そのまま不審であると判断された者を次々連行していく。妨害する一方で、雪風は相手が使用する周波数とその情報を全て記録していく。
　こうして、この日の行事は全て無事に終わった。
　電子的な情報については雪風と学院の人員が調べるし、確保した人員についても警察や警備の人員が取り調べを行う。よって、雪風や他の人員が結果を出すまで零は暇であった。リリィ達の競技やその結果には興味もない。そして、零は暇つぶしも兼ねてブッカーの部屋へと行く。だが、その室内の様子はどこかおかしい。生徒会の面々が勢揃いしており、重苦しいような異様な緊迫感が漂っている。
「深井中尉…」
「なんだ、何があった」
　零の問いにブッカーが重々しく口を開く。
「やられたよ。さっき国連からろくでもない報告が来た」
「国連だって？何の報告だ？」
「例のＧ．Ｅ．Ｈ．Ｅ．Ｎ．Ａ．が今回の件について全部ぶちまけたんだ。ＣＨＡＲＭメーカーであるグランギョニルと共同研究中の実験体が事故で流出し、行方不明になったと。で、その実験体というのが…ヒュージの細胞を使用して作った人間だ。噂通りの、な」

ブッカーは半ば投げやり気味に報告書の束を机に投げた。
「それはつまり…」
「ああ、結梨の事だ。連中、世界的な制裁を受ける覚悟でこの件を公にしてきた、こいつは勿論倫理的に大問題な研究だ。そこまでの覚悟で報告してきたんだ、なんとしても彼女を取り戻す気なのだろう。よって、明日にでもこの話を聞いた政府の連中が回収しに来る筈だ」
「で、引き渡すのか？」
「まさか。しかし、結梨は人間型ヒュージではないかと疑いをかけられている。この状態ではこちらに引き渡しを拒否する術はない」
「どうするんだ、ジャック。だが、何か策は練っているんだろう」
ブッカーは盛大にため息を吐き出すと、言った。
「こちらで先に確保して、引き渡しをあの手この手で引き延ばす」
その回答に零は呆れたように言う。
「そんなものは解決にならない。問題はそのままだ、ただの遅滞でしかない」
「いや、問題解決の可能性はゼロではない」
「何？」
「ヒュージの細胞を利用して作られたとさっき言ったな。で、ヒュージには過去現在あらゆる生物の遺伝子情報が格納されていると言われている…当然、それには人間も含む。つまりはこのヒュージの中にあった人の遺伝子を使って結梨が生まれたと考えられる」
「要点を言ってくれ。回りくどい」
すると、ドアが勢いよく開く。
「それは私が説明しましょう！」
そこにいたのは真島百由であった。しかし、零は気にせずに聞く。
「で、どうするんだ？」
「言ってしまえば簡単な話よ、ヒュージか人か。遺伝子的には純粋に人の遺伝子であればいいのよ。ヒュージとしての遺伝子を全く持っていないという証明さえできればそれでいい」
「ほう。では、すぐにやればいい」
「いえ、そう簡単にはいかないわ。現状ではデータが足りない」

「で、時間稼ぎか」
「ええ、そうするしかないわね。何かいいデータが見つかれば話は変わるけど…」
　すると、ブッカーが口を開く。
「そのいいデータを入手できるかもしれない。研究に関わっているのはＣＨＡＲＭメーカーであるグランギョニル…そこは一柳隊の一員である楓・Ｊ・ヌーベルの実家だ。うまくいけば情報を得る事ができるかもしれない」
「それが唯一の希望か」
　零のその一言に場の皆が深く頷いた。

新宿にて

「だいたい五分前かな。じゃあ、そろそろ護衛対象の方々が来る筈なので準備を」
「はーい」
「藍ちゃん、勝手に動き回っちゃ駄目よ」
「えー。あのカフェのデザート美味しそうなのに」
「まだ朝だよ。ほら、後でおやつあげるから。我慢、我慢」
「むー」

ここは新宿のとあるホテル。そのフロント前にはエレンスゲ女学園のレギオンであるヘルヴォルの五人が立っていた。彼女達がここにいる理由、それはある人物の護衛任務を命じられたからである。

すると、その護衛対象がエレベーターから現れた…二人組の男性。事前に得た情報によると彼らは国連に長期間派遣されていたパイロットらしい。ふと、その内の一人に目が行った。すらりとした風貌。だが、どこか儚げで浮世離れした感もあるように思える。ヘルヴォルのリーダーである相澤一葉はそんな印象を抱いていた。

「おはようございます！深井零大尉と桂城彰少尉でしょうか？」
「ああ、そうだ。お前達は何者だ」
「本日お二人の護衛を務めるエレンスゲ女学園のレギオン、ヘルヴォルです。私はその隊長である相澤一葉と申します」
「フムン」

目の前にいる学生のその態度は世間一般から見れば品行方正、まさに優等生そのものといった感じであろう。しかし、深井大尉から見れば朝っぱらから騒がしいだけの存在である。そもそも、ここは首都東京のど真ん中だ。そこで自分達に護衛を付ける意味が分からない。それに昨日はそんなものがいなかっただけに余計怪しく見える。

しかし、その学生は懐から命令書を取り出してきた。サッと見た感じでは国から出された正式な書類らしい。よって、こいつらは正真正銘の護衛だという事だ。そう考えると、この連中を雑に扱ったり、追い返したりしては後でどんなケチを付けられるか分からない。深井

大尉は内心嫌々ながらも護衛の後に続いて歩き出す。
「このマイクロバスで目的地に向かいます…おっと、すみません。ちょっと電話が」
「ああ、構わない」
「失礼します」
　一葉は端末を取り出すと、電話に出る。その電話はエレンスゲ女学園からであった。
「もしもし。相澤です」
「ああ、早速だが用件を伝える。国からの出動要請だ。行き先は鎌倉、行けるな？」
「え？いやしかし、今既に別の任務中なのですが…」
「何？任務だと…どの任務だ？」
「要人の護衛任務です。新宿で」
「護衛…？」
　電話の向こうから慌ててキーボードを叩く音が聞こえてくる。どうやら、自分達の任務について相手が一切知らなかったようだ。
「ああ、分かった。現在の任務をそのまま遂行しろ。件の出動要請については他のレギオンを派遣する」
「了解」
「あと、護衛対象が行う会話を可能な限り聞き取り、帰還後にその内容を報告せよ。いいな？」
「会話を…ですか？了解。しかし、どのように記録して報告すればよいでしょうか？」
「証拠を残したくはない。口頭で報告するように」
　そうして電話が切れた。一葉はマイクロバスにそのまま乗り込むと、前方寄りの席へと座る。すると、隣に座るレギオンメンバーである飯島恋花が話しかけてきた。彼女は一葉よりも一級上である。
「どうかしたの？一葉」
「ええ、学園からで…出動要請があったのですが、今の状況を説明したらそれが無しになりまして」
「んー？それって、ウチらの状況を把握してなかったって事？」

「ええ、多分。あと…」
一葉は声量を抑えながら言う。
「護衛対象の会話を全て聞き逃すなと言われました」
「なにそれ？スパイみたいな事をしろって話？」
恋花がそう言うと、他のレギオンメンバーもこちらへと顔を向けてきた。
「どうしたの？一葉、恋花」
「もしかして、何かトラブル？」
初鹿野瑤と芹沢千香瑠の二人が小首を傾げながら何かあったのかと聞いてきた。この二人も一葉より一級上の上級生だ。
「いえ、ちょっと妙な話になりまして…」
一葉は小声で再び何があったのかを説明する。
「つまり、盗み聞き？」
「それは言い方があんまりよくないかな」
一葉の同期である佐々木藍がそう呟くと一葉は苦笑いを浮かべる。そして、とりあえず命令なのだからやるしかないと結論付ける。皆もそれに頷くと、行動に移る。バスの後方に瑤と藍を配置、護衛対象を前後から監視するのだ。
「しかし、なんでパイロットの様子なんて…あの二人はもしかして何か凄いスパイだったりして」
「ドラマの見過ぎです…恋花様」
マイクロバスは走りだす、目的地はホテルからほど近い。１０分程走ると、ある建物の前でバスは停車する。一葉と恋花が先に降り、周囲を警戒。その後に護衛対象の二人が降りる。そして、五人で護衛対象を囲みながら目的地である施設へと入っていく。
「エレンスゲ女学園のレギオン、ヘルヴォルです。このお二人の護衛任務中」
「この先でお待ちください」
受付のような所にいた人物に護衛任務の命令書を見せると、中へと案内された。暫し待つと護衛対象達と共に会議室のような広い部屋へと通された。部屋の中には防衛軍の高官や国の官僚達がずらりと

席についている。
「これは…結構大事かもしれませんね」
　その重苦しく異様な雰囲気に一葉は圧倒される。だが、すぐ近くに立っていた隊員に話しかける。
「すみません。あのお二人の護衛として同行しているエレンスゲ女学園のヘルヴォルなのですが…どこで待機すればいいでしょうか？」
「護衛のリリィ？いや、そういう話は聞いてないな…ちょっとお待ちを」
　そして、戻ってきた隊員から出入り口付近の椅子に座って待機するように指示された。そして、深井零と桂城彰の二人に場の注目が集まる。
「では、特別報告会を始めようか。未知の脅威についての」
　一人の高官がそう言うと会場のスクリーンに映像が映し出される。それと共に資料を捲る音が場に響く。そして、一葉の視線もその映像へと向けられる。そこに映し出された映像は航空機から撮影された映像らしい。
「なにこれ？」
「コクピットからの映像かと」
「なんだ、やっぱり二人はただのパイロットかー」
　しかし、その映像はどこか奇妙であった。まず空の色がどこか変だ。そして、大規模な空中戦が繰り広げられている様子だが、対ヒュージ戦で世界中が手一杯。そうして国家間の戦争が消えたこの時局にどこでこんな映像を記録したのだろうか。
　鳴り響く警報音と無線の音声。
『ＭＫ―１、退避だ。そっちに敵が行った』
『君の命令を受ける気は無いね、中尉』
　眩い閃光が走り、無線にノイズが飛び込む。
『推定５０ｋｔ級の爆発を確認。これは…核爆発だ』
『ＭＫ―１ロスト』
『こちらＡＣ―３、確認した。Ｂ―３、残ったナイトを誘導しろ』
『Ｂ―３了解。ナイトは後どのくらい戦える？』

『三十分程度は飛び回れる筈だ。こちらで目標を指示する、距離には注意しろ』
『了解』
『機長、2時方向に敵』
　真っ黒な戦闘機らしきものが映像に映る。しかし、それはあまりにも異質だ。一切の反射の無い黒一色、まるで影だけが空を飛んでいるようである。とても戦闘機には見えない。それに先程、核爆発と言っていたがそんな事があれば世界中大騒ぎになっているだろう。それにヒュージはそんな攻撃をしてこない。これは何だ？
　映像を見て困惑しているのは一葉だけではない。ヘルヴォルの面々もそうだ。そして、この場にいる防衛軍や官僚等の者達すら食い入る様に映像を見ていた。そして、なし崩し的に討論が始まる。
「核攻撃を行っただと？」
「それだけでも脅威だ。しかも、正体が分からないのだろう」
「この世界にあれが現れたら…」
「我々はヒュージで手一杯だ。とても手に負えない」
「それに現代的な航空戦をやるような相手だ、ヒュージと同じようには戦えん」
「では、どう対処を？」
「現れるかも分からない相手に何を準備しろと？」
「そうだ、異世界の…しかも別の星の話だろう」
「しかし、その世界から来た人物はここにいるではないか」
「そうだ、ありえない話じゃないだろう」
　討論の中から異世界という突拍子もない単語が飛び出し、一葉は目を丸くする。そして、左右を見回すと皆も同じような反応だった。どうやら聞き違いではないらしい。
「今、異世界って…」
「何かの暗号とか？」
「話の流れからすると、暗号ではなくそのままの意味かと」
「そんなまさか。もしや、あの二人が異世界から来たパイロットって事？」

「それなら学園がこの奇妙な任務を出した理由が見えてくるね」
「いせかい…って、何？」
「あー…藍、後で教えてあげるから」
　そんなヘルヴォルの会話はここでは明らかに浮いていた。そして、参加者達の視線が一葉達へと向けられる。深井零に至っては呆れたようにため息をついている。
「何故ここにリリィがいる!?誰が入れた？」
「え？いや、護衛任務の命令書を持っていたのでてっきり…」
「何、誰がそんな任務を出したんだ？」
「これがその命令書の写しです」
「どこの誰がそんなものを…あっ、こいつはゲヘナ絡みか」
「こっちに探りを入れてきたか、面倒な話になってきたな」
「ヒュージと無関係な内容だがら管轄外だろうに」
「とりあえず、そのレギオンは監視付きで退席させるんだ。後で対処する」
　そうして、ヘルヴォルの五人は退場となった。そのまま別室へと通されると、尋問開始。
「事情は何も知らないのです。突然、護衛任務を命じられて…」
「何かするように命令はされなかったのか？」
「ええ、帰還後に護衛対象の様子を知らせてほしいとかその程度で」
「ふーむ…」
　なんとかスパイとかそういった類ではないと納得してもらう事には成功。実績のあるエレンスゲのトップレギオンだけあって下手に扱うと後々面倒だと相手は判断したらしい。しかし、防衛軍の高官から先程見聞きした話は他言無用であると厳命される。そして、その機密保持を約束する為に誓約書にまで書かされた。その徹底的な対応に恋花は舌を巻く。書類を書き終えると五人はそのまま報告会が終わるまで待機となった。
　そして、暫くして報告会は終了する。だが、ヘルヴォルの任務はこれで終わりではない。二人を出発地点であるホテルまで護衛するという点がまだ残っていた。途中のトラブルはともかく任務はきっち

り果たさねばなるまい。その点は防衛軍にも確認を取った。
「ホテルまでお送り致します」
「あんな目に遭ったのにまだ続けるのか」
「ええ。仕事ですので」
「そうか」
　そんな短いやり取りを終えると、一行は行きと同じようにマイクロバスへと乗る。今度は聞き耳を立てる必要も無い為、配置は特に決めずに乗っている。恋花は疲れ切ったらしく盛大にため息をつき、藍は眠そうに窓の外を見ていた。そして、一葉は好奇心を抑えきれずについ口を開く。
「深井大尉と桂城少尉は…その、何者なのでしょうか？」
「フムン、気になるか」
「いえ、答えたくないというのなら大丈夫です」
「まあ、気になるのはしょうがないか…ただの漂流者。そう答えておこう」
「漂流者…」
　そうしてマイクロバスはホテルに到着する。ヘルヴォルの五人はバスから降りると深井零と桂城彰の二人を見送った。そして、一葉は気が抜けたように大きなため息をつく。かつてない事態が起こって知らぬ間に緊張していたのだ。そこに恋花が話しかけてきた。
「で、報告しろと言われた件はどうするの？」
「ああ、そうでしたね。しかし、誓約書にサインしてしまいましたし…よし」
　一葉は一度大きく頷くと、言った。
「会話らしい会話は車内では無く、会議室には入れなかったので何も聞けなかった。こう報告しましょう」
　それを聞いた千香瑠は驚いた様子で口を開く。
「でも、それって命令違反になるんじゃ…」
「いえ、学園にトラブルを持ち込まない為の行動です。何しろ、防衛軍からの命令も出ています。そちらを破った場合は学園も巻き込むことになりますし」

「なるほど…」
「じゃあ、それで決まり。この後どうする？」
恋花の問いに藍が答える。
「さっきのカフェでおやつ！」
「そうしましょう。流石に疲れてしまいましたし」
「ええ。ゆっくり休憩してから帰りましょうか」
「で、いせかいって何？」
「それはお茶でも飲みながら、ね」
一方、出張を終えた深井零と桂城彰の二人は身支度を整えるとホテルを出る。後は鎌倉へと帰るだけだ。しかし、その道中に酒屋を見かけた零は口を開く。
「フムン、ビールでも買って帰るか。向こうの俺やジャックも喜ぶだろう」
「いいですね。せっかくだ、いいやつを買って帰りましょう」
「ああ、仕事終わりの一杯だ。それがいい」
二人はのんびりとその酒屋へと入っていった。
鎌倉である事件が起こっている事も知らずに。

散る花弁

理事長代行の執務室では生徒会の面々が任務失敗を報告していた。
「一柳梨璃が一柳結梨を連れて逃走しました。申し訳ありません…」
「いや、気にするな。いきなりそんな話になればそのような反応にもなるだろう」
生徒会は一柳結梨を確保すべく動いたものの、あまりの事態に恐怖を抱いた一柳梨璃が結梨を連れて逃亡する結果となったのだ。
「二人は付近にある廃墟のどこかに身を潜めていると思われます」
「うむ。だが、うかうかしてはいられない。政府が周辺校のレギオンに対して出動要請を出した」
「他校のリリィがここに?うちには出ていませんよね」
「どういう訳か知らんが、うちには出ていない」
生徒会会長の一人である秦祀が驚いたように言う。それに対して、ブッカーはため息交じりに返す。
「最悪の場合はリリィとリリィが交戦…という恐れまで出てきた。笑えない話だよ」
「では、その前に確保します。警戒用のドローンを各所に放ち、警備の人員を要点に配置。更に待機中のレギオンも出動させましょう」
「ああ」
すると、報告を聞いていた史房が首を傾げながら質問を飛ばす。
「政府が派遣してきたのは他校のリリィのみでしょうか?防衛軍の人員は全く動きがありませんが…」
「そうだ、どの部隊も動き無し。来るだろうと予想したお偉い様方まで来ない」
「それは…気味が悪い話ですね」
「これは仮説だが…この前やった雪風の電子攻撃が思った以上に効いているのかもしれない。政府の上層部はそれを恐れているのかもしれん」
しかし、このブッカーの仮説に違和感を持つ人物がいた。真島百由である。

「確かに雪風の電子攻撃が怖いのならなるべく刺激しないようにするのもおかしくはない…いや、それなら何故リリィだけを送ってくるんだろう？それは刺激になるだろうし…結局、報復に繋がってもおかしくない。うーん？」
「通常兵力では手に負えないものを恐れているに違いない。雪風以外の、な」
　深井中尉が百由のその独り言を聞いて意見を口にする。
「そうなると…ヒュージ関連？ゲヘナや国は何かを掴んでいて、その脅威を恐れている？じゃあ、この百合ヶ丘周辺に私達が知らない何か未知の脅威が潜んでいる可能性が…」
「それはお前の方が詳しいだろう」
　そういうと、深井中尉は椅子から立ち上がる。
「だが、そんな小難しい事よりも今は優先すべき事があるだろう。証拠を示す為の材料は確保したと言っていたな」
「ええ、楓・J・ヌーベルの実家であるグランギョニル、そこから入手した人造リリィの研究データ。これさえあれば遅くても今日中には結果が出るはずよ。結梨がヒュージではなく、人間であるという証拠が」
「では、そいつを優先すべきだ。前提条件が崩れれば、相手は大義名分を失って撤退するしかないからな。その理屈が何かは知らんが」
　深井中尉がそう言うと、百由はどうやって証明するかの方針を語る。
「それは当然。で、その理屈は…ヒュージの持つ細胞には過去から現在までに存在した全ての生き物の遺伝子情報が格納されていると言われていてね。無論、そこには人間の遺伝子もある筈だと連中は考えたのでしょう。それを使ってヒュージの細胞から人間を作り出した。その結果、出来上がった実験体が結梨って事」
「それは分かった。でも、どうやってヒュージでは無いと証明するんだ」
「人以外の遺伝子が含まれていない事を証明すればいいのよ。そうすれば人であるとしか言いようが無くなるわ。まあ、細かい個人差とか

の話は除いてね」
「なるほど。しかし、それがうまくいったらヒュージの細胞から古代の生物まで復元できそうだ。きっと儲かるに違いない」
　深井中尉が皮肉気味にそう言うと、百由は軽く考えながら呟く。
「…その考え方は無かったわ。今度の論文のネタにしようかしら、アノマロカリス復元とか」
「まあ、今やる事ではないな」
「ええ。でも、今の状況は異常よ。私にはとても気味が悪い状況としか思えない。このまま調査を優先すべきかどうか…」
「気味が悪くてもやるしかないだろう」
　そんな会話をしていると、生徒会の面々が慌ただしく動き出す。どうやら、偵察に放ったＵＡＶが廃墟に隠れていた二人を見つけたらしいとの事だ。
「おい、零。どこに行くんだ？」
「ただの散歩だ、ジャック。どうも最近歩いてない気がしてな」
「零。お前、まさか探しに行くのか…もしやと思うが、あのトマホークと結梨の事を重ねて見ていないか？」
「人の心配している場合か、ジャック。俺からすると、アンタは憑依先の記憶に引っ張られていてかなり危うく見えるよ」
「いや、だが…お前がわざわざ行く必要なんて無いだろう」
「実はこの前、アイツから質問を受けた…まだ、その質問に答えていないんだ。だから、答えてやろうと思っている」
「…そうか、気を付けてな」
「ああ。無事に帰ってくるさ」
　深井中尉は生徒会の面々の後に続いて部屋を出ていった。

　鎌倉市街跡地のとある廃墟。そこに一柳梨璃と結梨は身を潜めていた。孤立無援、装備はＣＨＡＲＭと制服に忍ばせているいくつかの小道具のみ。
「私が必ず守るからね」
「梨璃…」

「大丈夫。あんな話、きっと何かの間違いでみんなが助けてくれるから…」
一柳結梨はヒュージ由来の細胞から作られた人造人間であり、すなわちヒュージであると認定された。その為、彼女をこちらに引き渡せ。
生徒会会長達が放った衝撃的な一言。梨璃はそれを脅威に感じ取り、結梨を連れて学院から逃走したのである。そして、梨璃は既に最悪の場合に備えて鎌倉から脱出する覚悟も決めていた。学院や政府、その他の信用の置けない相手に結梨を奪われたらどんな事になるか分からない。信頼できる仲間達が何とかするまでとにかく逃げ続けるしかないのである。もしかすると、深井大尉達が雪風を使って何とかしてくれるかも…梨璃がそう考えたところで結梨がポツリと呟く。
「私とヒュージって似ているのかな？」
「えっ…？いや、全然違うよ！」
「でも、私はヒュージだって言われたよ」
「あんなの気にしなくていいよ。あれはきっと、何かの間違いだから…結梨ちゃんは私達と同じリリィだよ」
「じゃあ、私がもしヒュージの所に逃げ込んでも追い返されちゃうんだね」
結梨は窓の外をぼんやり眺めながら言う。
「私、こんな風になりたいなんて思ってもいなかったのに…梨璃も自分の事が嫌になる事ってあるの？」
「そんなに大げさに考える事は無いよ。私だって自分の駄目な所を思い浮かべる事もあるし、自分がお姉様みたいに綺麗で格好良かったらって思う事もあるもの」
「じゃあ、そんな夢結はきっと自分の事で悩んだりする事なんて無いんだね」
「それは…」
梨璃の脳裏に過去のトラウマに悩む夢結の姿が思い浮かぶ。いくら他者から見て優秀な人間でも、悩みが無いなんて事はきっと無いに違いない。他の一柳隊の仲間達だってそうだ。皆、何かしらの悩みや

暗い過去を抱えている。梨璃はそんな考えに至ると結梨に言う。
「誰だって悩み事はあるんだよ。だから、結梨ちゃんが何かに悩んでいても別に何もおかしくない。だからね、結梨ちゃん。無理に自分を変えようなんて考えなくていいんだよ」
「うん。でも、きっと梨璃が私の事を結梨と名付けてくれたから今の私があると思うの。だから、それはとても感謝しているんだ。それにね、記憶や過去の有無なんて関係ないって深井中尉も言ってたし」
「深井中尉が？」
「うん」
　梨璃はその一言を聞いて驚く。深井大尉以上に無口なあの人物がそんな事を結梨に語る姿なんてとても想像できないからである。
「深井中尉なら外にいるわよ」
「お姉様⁉」
　室内に第三者の声が突如響き、梨璃は仰天しながら振り返る。その声の主は夢結であった。いつの間にか、廃墟の室内には一柳隊の面々が勢ぞろいしていた。
「事態は理事長代行…いえ、ブッカー少佐と百由が対処したわ。結梨が人間だって証明して政府を説得したの。もう大丈夫よ、二人とも」
「え？それじゃあ…」
「ええ、百合ヶ丘に帰りましょう」
　すると、梅が笑いながら言う。
「よかったな。一歩間違えたら梨璃と結梨は全国指名手配まっしぐらだったぞ」
「ええ！そんな大事になりかけていたんですか⁉」
「そりゃそうだ。命令無視して飛び出したんだからな。まあ、細かい話は歩きながらしよう」
　一行は百合ヶ丘へ帰る為に海沿いの道を歩く。梨璃と一柳隊の面々が会話をしながら歩いているその遥か前方を深井中尉は歩いていた。生徒会の面々は深井中尉よりも先を歩いている。すると、結梨は中尉の方へと駆け寄っていった。
「深井中尉」

「なんだ？」
「探しに来てくれたの？」
「ただの散歩だ」
「ふーん」
　結梨は視線を海へと向けると、一つの問いを投げかける。
「ねえ、中尉。私は人間かな」
「お前がどんな事情を抱えていても…あれだけ色々考えてものを言えるんだ、化け物にそんな真似は出来ない。だから、お前は立派な人間だ」
「そう。よかった、やっと質問の答えを聞けた」
　すると、異変が起こる。突如、海上から鎌倉の廃墟街へと熱線が撃ち込まれたのだ。深井中尉は咄嗟に視線を海へと向けて敵を探す。
「島？いや、あれは…」
　小島のように大きなサイズの物体がゆっくりと洋上を移動している。とてつもなく巨大な個体だ。その周囲には小型の飛行物体がいくつか飛び回っている。そこから放たれた熱線の威力は着弾点を見る限り、ただただ強烈と言える。こちらに撃たれたらひとたまりもない。現に周囲のリリィ達すら焦っているらしい。
「…マギを直接攻撃に使った？」
「あんな攻撃、何度も撃てないはず」
「うん、ヒュージのマギが枯渇しちゃう」
「おかしいわ。あのヒュージ、まるでマギを使いこなしているように見える」
「とにかく、一度百合ヶ丘に戻ろう」
　すると、梨璃の叫び声が響く。
「待って！結梨ちゃん!!いきなり戦闘なんて無茶だよ!!」
　深井中尉が声のした方へ振り向くと、結梨が海へと駆け出していく姿が見えた。すると、深井中尉の脳裏にトマホークの最後の姿が不意に思い浮かぶ。彼と同じようにこれが彼女の最後の姿になるかもしれないという悪い予感と共に。
「待て！」

深井中尉がそう叫んだ途端に端末が鳴った。
〈ＥＮＧＡＧＥ〉
遠くから轟音が鳴り響き、深井中尉は咄嗟に空を見上げた。

その少し前、無人の格納庫では出撃準備が進んでいた。
無人であるのにＢ―３…雪風の出撃準備は淡々と進む。そして、機体の周りでその作業を行っているのは百由が作った機械達であった。一方、既に作戦中の機械もあった。Ｂ―１…もう一機の雪風である。Ｂ―１は電子的に周囲の情報をかき集めながら百由が作った機械達に命令を出している。標的用の無人機を異変が探知された洋上へと飛ばし、ヒュージを模した標的ロボットはアームを使って２０００ポンドの大型爆弾やロケットポッドをＢ―３の翼下へと搭載し、更に機体各所の安全ピンを外していく。そして、格納庫の扉は自動で開き、無人の牽引車がＢ―３を外へと移動させていく。
そのまま仮設滑走路へ移動したＢ―３はアフターバーナーを焚いて急加速、たちまち大空へと飛び上がった。
〈Ｂ―１：ｇｏｏｄ　ｌｕｃｋ…〉
〈Ｂ―３：ＴＨＡＮＫＳ〉
そして、その後にＢ―１３…レイフも格納庫から機体を外に出す。しかし、レイフは飛び上がらない。エンジンを始動して地上を移動し、機首を洋上へと向けると空間受動レーダーと全システムを起動する。全ての情報を記録する為にこちらも静かな戦いを開始した。

「どうしましょう！結梨ちゃん、海の上を走って移動していますよ！」
「あれはまさか縮地か!?でも、梅だって海の上なんか走った事ないぞ!!」
レアスキルである鷹の目で結梨の姿を追う二水が叫び、梅が唖然としながら言う。
「いや、それだけじゃない。それを補う為にフェイズトランセンデンスも組み合わせているようじゃぞ」
「まさか、レアスキルを複数同時に使っている？いや、しかし…」

「あれじゃあ、マギがすぐ無くなっちゃう！」
「梨璃！待て、もう間に合わない！戻れ!!」
止めようとする仲間達の叫ぶ声を振り切り、梨璃は結梨を追う為に駆け出した。マギを足場にしてなんとか海面上を移動する。だが、梨璃の視線の先にいる結梨との距離は開くばかり。そして、その先にいるヒュージは小さな光弾を乱射する。結梨の接近を阻止する為だ。
「結梨ちゃん、待って！」
梨璃は結梨に向けて手を伸ばす。だが、結梨は振り返りもしない。挙句、光弾が流れ弾となって梨璃の至近に着弾。その衝撃で梨璃は吹き飛ばされる。そして、薄れゆく意識の中、視界の隅に赤く輝く何かが見えた。
一方、結梨はヒュージに肉薄する事に成功。
「マギをかき集めている…？」
結梨はこのヒュージがヒュージネストからマギを吸い上げている事を悟る。なるほど、これで不足分を補っているのだ。そして、周囲を飛ぶ砲台のような小型ヒュージへと攻撃を始める。一点に留まっていては蜂の巣にされるだろう、本能的にそう感じ取って縮地で海面を駆け回る。そして、タイミングを見計らって射撃開始。砲台を一つ破壊。そのままの勢いで跳ね上がると、更に銃撃して二つ目を破壊。勢いのままに斬り込んで三つ目を叩き切る。そして、海面に着地。
ヒュージの攻撃は砲台の半数近くが失われた事により、接敵時よりも密度が低下していた。千載一遇の好機と言える。これでけりを付けて百合ヶ丘と梨璃達を守り抜く、例え自分がどうなろうと…心の内で結梨はそう決心する。
「私も百合ヶ丘のリリィだから!!」
そして、ＣＨＡＲＭに全力を注ぎ込む。ＣＨＡＲＭの心臓部であるマギクリスタルコアは今までに見た事が無い程の異常な状態だ。これは壊れるかもしれない…しかし、結梨は無視する。海面を蹴り飛ばし、再び跳ね上がる。そのまま全力全開の一撃を叩き込もうと更にマギを注ぎ込もうとするが、そこで異変が起きた。
〈Ｄｉｓａｐｐｒｏｖａｌ．　Ｅｍｅｒｇｅｎｃｙ　ｓｔｏｐ．．．〉

「えっ!!なんで!?」
　ＣＨＡＲＭの出力が急低下、通常時の出力にまで低下してしまった。結梨は困惑しながらも勢いのままＣＨＡＲＭでヒュージを斬り付ける。効果無し、そのままヒュージのマギに弾き飛ばされる。結梨は何が起きたのか把握する事も出来ずに海面へと真っ逆さまに落ちる。だが、その前に一瞬だけ雷のような轟音を聞き取った。
〈ＭＯＤＥ　ＡＧＧ…〉
　ヒュージは落下する結梨を追撃しようとするが、上空の異変を感じ取って攻撃停止。その上空には赤く点滅する航空機が一機。そして、ヒュージはそれに向けて全力で射撃を開始、数多の光弾がその機影を追う。最早、周囲のリリィや百合ヶ丘等は眼中にないといった様子であり、最優先攻撃目標はその機体となっていた。まるでその赤く点滅する物体がこの世にあってはならないと言いたいように。
「雪風…」
　深井中尉はその様子を見てポツリと呟く。視線の先のＢ―３はもう一機の雪風やレイフには無い装備を使って飛び回っていた。ジャムセンスジャマー、ジャムの発光パターンを模倣する事で視覚的に妨害する事を試みた装備である。その見た目はジャムを知るものであれば、ジャムと誤認するかもしれない。
　そして、Ｂ―３は軽やかに飛び回る。各動翼と可変エンジンノズル、更に強力なエンジンの組み合わせから生み出されるランダムで予測不能なその機動にヒュージの攻撃は掠りもしない様子だ。当然だ、あの程度の攻撃が雪風に当たる筈はない、深井中尉はそう心の内で考える。だが、それでも勝ち目は見えない。それは相手が通常兵器の効かないラージ級以上のヒュージだからだ。
「どうするつもりだ、雪風…有効打は与えられないぞ」
　端末が再び鳴った。
〈こちらＢ―１、深井中尉へ。今のうちにリリィと呼ばれる地上戦力を展開されたし。脅威を排除するにはあの地上戦力が必要である〉
　なるほど、そういう事か。深井中尉は走り出すと、あまりの出来事が続いて呆然と事態を眺める一柳隊に叫ぶ。

「何をしている！今の内に態勢を整えて攻撃しろ！雪風が稼いでいるこの貴重な時間を無駄にするな!!」
その声にハッとなった夢結は咄嗟に指示を出す。
「今すぐ攻撃…いえ、あの二人を収容した後にノインヴェルト戦術にて攻撃します。みんな、準備を」
「夢結様、駄目です。梨璃さんが欠けています！」
「仕方ないわ、威力は落ちるけれど八人で仕掛けましょう」
二水の悲鳴のような指摘に夢結は大きなため息を吐き出しながら言う。すると、背後から声が飛んできた。
「私達で補います」
そこにいたのは生徒会会長の三人だった。そして、夢結は振り返って一礼する。
「よろしくお願い致します」
「夢結さん、梨璃さんの分は私がカバーするわ」
「ありがとう、祀さん」
生徒会長の一人であり、夢結のルームメイトでもある秦祀が梨璃の代わりとして一柳隊の戦列に加わった。戦力の問題はこれで解決である。視線をヒュージに戻した刹那、ヒュージの頭上で凄まじい大爆発が起こる。その上空には急上昇するB—3の姿、どうやら大型爆弾を撃ち込んだらしい。すると、二水が叫ぶ。
「爆風で周囲に漂う子機が弾き飛ばされたみたいです！」
「チャンスね。行くわよ!!」
それが好機と判断したリリィ達は海へと飛び出していった。

ヒュージは百合ヶ丘のリリィ達によって撃破された。だが、明るい知らせだけではなく、悲しい知らせも同様に飛び交っていた。重傷者が出たという一報である。
「結梨ちゃん！結梨ちゃん!!」
ストレッチャーが慌ただしく動く。その上には一人のリリィが乗せられていた。ぐったりとした様子でピクリとも動かない。そこに梨璃がしがみ付く様に駆け寄ろうとするが、楓がそれを止める。

「梨璃さん！落ち着きなさい!!彼女はこれから私の実家が管理するフランスの病院に送りますわ。現状ではそこが一番安全でしょうからね。それに…お父様も自分のやった事を深く知る事になるでしょう」
「うん…でも、結梨ちゃんは大丈夫かな…」
「まだなんとも…医師の診断待ちですわ」
　そして、ストレッチャーはそのままティルトローター機のカーゴランプから機内へと収容された。機内には楓の実家が手配した護衛の人員や医療スタッフが乗り込んでいるらしい。後は彼らに任せるしかない。機体後部のカーゴランプが閉じると、機体はそのまま垂直離陸。ローターの角度が変わり、スピードを付けると水平飛行に移行してそのまま飛び去って行った。リリィ達は暗い表情でそれをただ見送っていく。

　夜遅くなり深井大尉と桂城少尉は百合ヶ丘へと帰還する。しかし、どうも様子がおかしい。普段この時間なら真っ暗な筈の校舎にはいくつも明りが灯っている。
「何かありましたかね」
「さあな。だが、校舎が破壊されている様子はない」
「ええ。では、帰っても問題なさそうだ」
　そして、二人は雪風が置いてある格納庫へと入る。だが、機体以外に人影があった。
「誰だ？」
「私ですよ、深井大尉」
「なんだ、お前か」
　そこには百由が立っていた。だが、それ以外にも数人座っている。よく見ると一柳隊の面々だ。その表情はどこか暗い。
「こんな時間にどうした？悪いが、俺は疲れている。さっさと部屋に戻りたい」
「いえ、大尉。少しお話が」
「それは俺に関係のある話か？」
「ええ。とっても」

関係があると言われれば仕方ない。荷物を降ろす。
「で、何の用だ？」
「Ｂ―１なんですけどね…今日、ＣＨＡＲＭの動作に介入した痕跡が見つかりまして」
「フムン」
どうやら、雪風が何かやったという話らしい。
「悪いが、俺は出張に行っていてここで何があったのかを知らん。よって、何も指示を出していない」
「ええ、それは分かってるわ。雪風は…結梨ちゃんのＣＨＡＲＭを強引に遠隔操作したの。戦闘中にね」
「アイツの？で、その遠隔操作の結果どうなった」
「結果、最悪の事態を回避したとは言える。あの介入が無ければＣＨＡＲＭは壊れて機能を失っていたと言えるわ。よって、最低限の保護機能が働いた結果、一命を取り留めたとも」
「フムン。その結梨はどうした」
すると、百由は口をつぐむ。代わりに格納庫の床に座り込んでいた楓が言う。
「意識不明…ですわ。いつ目を覚ますか分からない程の」
「何があった」
「色々ありましたけれど…直接的な原因はヒュージですわ。単独で交戦して…」
「フムン。そこに雪風が介入したと」
「ええ」
「色々あったと言ったな、何があった」
すると、楓がこれまでに何があったのかと淡々と説明を始めた。深井大尉と桂城少尉はそれを聞く。
「で、疑いは晴れた訳だ」
「ええ、でも…」
「それは仕方がない。だが、何故援護しなかった」
「一人で飛び出してしまって、それも追いつけないような勢いで…」
「フムン」

どうも、事態は混沌としていたらしい。そして、意識不明になる程の負傷者が出た事でこの騒ぎのようだ。すると、低い声が格納庫に響く。
「深井大尉に当たってどうする。この件は運が悪かった、そうとしか言えん」
そこにいたのはブッカーと深井中尉だった。
「少佐。任務完了だ、帰還した」
「ああ、了解だ。何もなかったか」
「特には。変な輩がいた程度だ」
「そっちにも何か仕掛けてきたか」
「ああ、特に問題はない。政府の連中が片付けた。しかし、二人とも表情が暗い」
「まあ、話があったように色々な」
「フムン。ああ、少尉。ちょうどいい薬があったな」
「ええ、大尉。こいつですね」
すると、桂城少尉は荷物の中から缶を四つ取り出す。
「薬？どう見ても缶のビールだ」
「ビールを薬って言ったのはお前だよ、ジャック。厳密には俺達の世界の少佐だが」
それを聞いたブッカーは頭を抱える。
「そっちの俺はそこまで不真面目なのか？」
「いや、クソ真面目だよ。仕事最優先の」
「それはよかった」
そして、缶を持った深井大尉は学生の面々に言う。
「お前達はもう遅いから帰れ。俺から慰めの言葉が出ると思うか？」
それを聞いたリリィ達は諦めたように寮へと帰っていく。そして、四人はビールを静かに飲み始めた。

花園の異変

結梨が負傷し、フランスへ搬送されてから二週間が経った。
執務室である人物との電話を終えたブッカーは深くため息を出しながら首を垂れる。そして、その様子を見た史房は驚き、深井中尉は何があったのかと問う。
「どうした、ジャック」
「楓・ヌーベルの父親と結梨の件で話をしたのだが…」
「何かあったのか」
「その父親の声がそっくりだったんだ」
「誰に？」
「お前もよく知っている…バーガディシュ少尉だよ」
その名を聞いた深井中尉の脳裏に、ジャムによって作られた偽物の基地やそこで唯一食べる事が出来た食物の記憶が鮮明に蘇る。そして、背に嫌な汗が流れた。
「少尉は戦死したんだ…偶然だろう、単に似ていただけだよ。ジャック」
「まあ、そう考えよう…それに俺の声を聞いても変な反応は無かったからな」
「つまり、ジャックみたいに中身がバーガディシュ少尉って事はないな」
「ああ」
特に何事も無いようだ。二人の様子を見ていた史房はホッとしながら視線を動かす。そして、その視線の先には傷だらけのＣＨＡＲＭがあった。
ダインスレイフ…かつて夢結が使用し、学院近くに現れたヒュージから回収されたものである。だが、そのＣＨＡＲＭは曰く付きでもあった。夢結のシュッツエンゲルである川添美鈴が亡くなった際に使っていたＣＨＡＲＭでもあるのだ。よって、最後に使用していた時のデータ復元、その作業が今も行われている。彼女の最後がいったいどんな状況だったのか、それを調べる為でもある。しかし、雪風出現

によってその作業は遅れがちで、やっとログの解析結果が断片的に届いたぐらいである。
史房がその結果が書かれた資料に目を通す。
「戦闘中に設定変更された形跡がある…ですって!?」
史房のその驚いた声に深井中尉とブッカーが振り向いた。何があったのだろうと。

一方、深井大尉と桂城少尉は学院の庭でぼんやりと景色を見ていた。
「さっぱり手がかりが見つかりませんね」
「ああ。ネストからのマギは未だにあの空中の穴に吸い出され続けている」
「だけど、それが何を意味しているのかは未だに分からない」
打つ手なしの深井大尉はため息をつく。
「このまま帰れなかったら雪風を抱えてヌーベルの実家で雇ってもらうか…」
「でも、雇われたら彼女をお嬢様って呼ばないといけない日々がやってきますよ」
「それは嫌だな…で、少尉。その猫は?」
桂城少尉は猫を撫でていた。
「安藤鶴紗が面倒を見ている野良猫ですよ」
「何故少尉が面倒を?」
「どうやら懐かれてしまったようで…」
「フムン」
そして、何も進まずにただ時間が過ぎていく。どうしたものかという二人の愚痴を残して。

講義を終えた一柳隊所属のリリィ達が続々と自分達の控え室へと集まってくる。
「うわあ、凄い量ですね」

「それだけ結梨ちゃんがみんなから好かれていたって事だよ、二水ちゃん」
　その室内の一角にはたくさんの手紙や品々が置かれていた。それは校内中から集まった結梨への見舞いの品々である。後程まとめてフランスへと送る予定であった。
「梨璃さん、例のレポートは出しました？」
「うん…実はなかなか纏まらなくて」
「深井大尉が少佐は面倒くさいからなかなか首を縦に振らないだろう、って言っていましたね」
「だから身構えちゃって」
　結梨の負傷後、梨璃は今回の責任を取るとブッカーに言い出した。あの逃亡劇を起こした上に、一人でヒュージに飛び込んでいった結梨を止める事が出来なかったという自責の念からであった。しかし、ブッカーの与えた罰は謹慎といった重いものではなく、計１２時間の補習と反省文及び反省点と今回の課題をまとめたレポートを提出する事であった。
　与えられた罰がこの程度で済んだ理由は単にうまく事が運んだからである。今回の脱走騒動の詳細は外部には知られていない。よって、学院では外部に配慮した懲罰的な手段を選ぶ必要が無かった。その為、ブッカーは彼女の為になるだろうという方法を選択したのである。
　椅子に座って紅茶を飲んでいる雨嘉が話しかけてきた。
「ごきげんよう。梨璃、二水」
「ごきげんよう、雨嘉さん」
「あ、そうだ。実は百由様から呼び出しがさっきあって」
「一柳隊に？何だろう？」
「さあ、詳しい事までは…」
「うーん、みんな揃ったら行ってみようか」
　そして、一柳隊全員が揃うまで待つと、一行は装備を整えて百由の所へと向かう。
「突然呼び出して悪かったわね」

「いえ、何かあったのでしょうか」
「ええ…ちょっと奇妙な事がね。そこに電波暗室があるでしょ」
「えーと、電波暗室って何の部屋なんでしょう？」
「あー…まとめて説明するわ」
そして、百由は説明を始める。
電波暗室とは、外部からの電波を全て遮断した部屋だ。その性能は高く、普段周囲に飛び交うテレビやラジオ、官民の無線にエリアディフェンスからの妨害電波すら遮断する。その室内は電子的なノイズが一切無い環境である事からセンサ類の精密測定や電波機器の検査といった用途に使用するのだ。しかし、普段はこの部屋をほとんど使う事が無いのでほぼ荷物置き場と化していた。そして、ここ最近その部屋の中で不可思議な事態が起こっているというのだ。
曰く、電波暗室の中に放り込んでいた備品の位置がいつの間にか動いていたり、置いた物の数が減ったりしているとの事であった。
「ただの置き忘れではなく？」
「そうだと思いたかったのだけどね、ついに勘違いでは済まない事象が起きたのよ」
呆れ気味の夢結の指摘に百由は右手で頭を押さえつつ、机に置かれた二つのモニタへと指をさす。
「ただのモニタじゃない」
「よく見て、ここにある備品の管理番号」
「…これは」
管理番号を記したシールに書かれていたその数字、二つのモニタの両方にそっくりそのまま同じ番号が刻まれていた。それどころかモニタの製造番号すら一致している。それを見た一柳隊の面々は唖然とした表情を浮かべていた。
「で、本題は…一柳隊に中で何が起こっているか調べてほしいの。万が一、ヒュージの仕業だったら大事だからね」
「分かったわ。でも、監視カメラは置かなかったの？まずは何が起こったのか知る必要があるでしょうに」
「もちろん置いたわよ、あの机の上に。で、さっき備品の数が減ったと

言ったわね」
「ええ」
「消えた備品と同様にそのカメラも消えてしまったわ」
　ため息一つ出した後に百由は説明を加える。
「で、仕方ないからドアを開けてその前にカメラを置いて再トライ。でも、駄目」
「何があったというの？」
「ドアを開けると何故か何も起こらないのよ」
「じゃあ、常に開けっ放しにすればいいのではないの？」
「夢結、そんな簡単に話は済まないわ。いざ使う時に困るでしょう」
　どうやら開けっ放しにしておく事は出来ないらしい。しかし、百由には何か策があるようだ。
「部屋の中に固定されている物に変化は無い、壁にかかったカレンダーも含めてね。だから、今度は壁に固定できるカメラを用意したわ。これで何かあっても最後まで記録できるはず。それに有線だから確実よ」
「先にそっちを試してからにしてほしいわね」
「そう簡単に用意できないのよ。これもさっき届いたばかりなんだから…ちょうどタイミングが重なっちゃったの」
　それに、と百由は言う。
「リリィがいればとりあえずヒュージが出ても対処できるし。カメラで様子も記録できるし、一石二鳥でしょ」
「はあ…分かったわ。じゃあ、試しに梨璃と私で中に入ってみる」
「お願いね。あ、外でみんな待機しているから、何かあれば外に出てね」
　そして、一柳隊一行は準備を終えると電波暗室の前に立つ。
「じゃあ、入りましょうか。お姉様」
「まあ、何もなければいいのだけど…」
　ＣＨＡＲＭを抱えた梨璃と夢結の二人が部屋へと入ると、そのまま扉が閉じられた。そして、新たに設置した監視カメラの映像を端末に表示、今のところは何もない。だが、暫くするとカメラは室内の異変

を捉えた。
「何よ、これ…」
「百由様、何かありまして？」
「なんと言えばいいか…みんな、これを見て頂戴」
端末で内部を監視していた百由の表情がこわばり、他の面々は何事だと端末の周りに集まる。そして、そこに映っていた光景は唯々異様であった。
室内にはうっすらと靄がかかり、乱雑に置かれていた物が多重にブレて見える。しかし、室内にヒュージが映っている様子はない。カメラの故障かとミリアムは映像を見ながら心の内で考える。だが、百由はゾワリとした様な嫌な予感が脳裏に過るとそのまま立ち上がった。そして、電波暗室の扉へかじりつく様に飛び掛かると、勢いよくその扉を開く。その室内では梨璃と夢結の二人が倒れている。思わず百由は叫ぶように呼び掛ける。
「二人とも、大丈夫!?」
しかし、ピクリとも動かない。明らかに様子がおかしい。百由が困惑していると楓や他の一柳隊の一同も室内になだれ込んでくる。その表情は一様にいったい何があったのかといった困惑したものであった。
「梨璃さん！梨璃さん!!」
楓は梨璃に駆け寄る。脈も呼吸もあるし、安定している。今すぐ命に関わるような状況ではないようだ。楓はとりあえず胸をなでおろす。しかし、応答が無い以上、意識は完全に失われている事は間違いない。いったい何が？楓は周囲を見回すが、特におかしい点は室内にはない。自身の呼吸に異常が無い事から毒ガスの部類が発生したとも考えにくい。戦闘の痕跡なんて当然無い。しかし、かすかに梨璃のマギの流れに違和がある事を感じ取る。何かがあった事はこれで確実と言えるだろう。しかし、何が…
「なんだ、何の騒ぎだ」
ドアの向こうから声が響く。楓が振り返ると、深井大尉と桂城少尉がそこにいた。

「それが…梨璃さんと夢結様が…」
「そいつらは大丈夫なのか？」
「脈も呼吸も安定していますわ」
「フムン。では、どうしてそうなったのかを説明してほしい」
　すると、百由は何が起きたのかを説明しつつ、端末の映像を見せる。
「物が増えたり減ったり、勝手に動いたりするという異変の調査の結果がこれか」
「しかし、深井大尉。どうも悪い予感がする。こんな気分には覚えがありますよ」
「同感だ、少尉。で、その覚えとやらを説明できるか」
「ええ、フェアリイ基地でロンバート大佐と手紙を出しに行った時と同じような気分だ」
「少尉、それはつまり…」
「確証は有りませんが、そんな予感がします」
「物が重なって見えたという点が意味する事を考えると、その解釈は可能だろう」
　深井大尉と桂城少尉が何やら話を続けているが、百由にはその会話の意味する内容がさっぱり掴めない。そして、困惑しながら聞く。
「ちょ、ちょっと…あなた達にはこの部屋の中で何が起こったのか分かるというの？」
「ああ、確証の無い仮定の話だが…この電波暗室の中は可能性が偏在する不安定な状態になったと思われる」
「別の可能性…並行世界といえば通じやすいかな？物が増えたり減ったりしたのはそのせいだ、別の可能性と重なりあった結果だろう。この二人も意識が他の可能性に迷いこんだのかもしれない。肉体だけがこうして残っている理由はよく分からないけど」
　それを聞いた楓の脳内にある考えが浮かぶ。
「そうですわ！…マギなら意識とここにある肉体を繋いでいるかも」
「楓さん、駄目ですよ！無暗に手を出したらどうなるか」
「止めないでください、二水さん!!このまま何もしないなんて…」
　楓は倒れ込んでいる梨璃にマギを注ぎ込む。

「何をしている。応急手当か何かか？」
「私のマギで梨璃さんのマギに刺激を与えれば、何か変化が起こるかもしれないと考えましたの！マギが流れている以上、可能性はゼロではありませんわ!!」
「フムン。その摩訶不思議な手段以外に精神を外部と繋ぐ術は何かないのか？できれば電子的な手段で、だ」
　深井大尉のその一言に百由が答える。
「ＣＨＡＲＭを経由するのなら…二人のマギに繋げる事が出来る、と思うわ。やった事は無いけれど。でも、どうするつもり？」
「雪風に任せる」
「雪風を…？いくら凄いコンピュータでも、流石に可能性の偏在なんて事態はどうしようも無いでしょう」
　すると、深井大尉は端末を取り出して操作しながら口を開く。
「ああ…フェアリイ星で何があったのかを詳しく言っていなかったな。こういう事態は一度経験済みだ」

「梨璃、梨璃。どうしたんだ、こんな所で寝ているなんて」
「閑…さん…？」
　頭がぼーっとする。ここはどこだろう？目の前にはルームメイトの姿があるが、どこか違和感がある。だけど…瞼が重い、何も考えられない。
「眠いのかい？」
「はい…とても…」
「これは起こしても駄目そうだな…では、人を呼ぼう。だから安心して眠るといい」
　その一言を聞いた梨璃の意識はそのまま暗転する。
　どのぐらい時間がたったのだろう、何やら話し声が聞こえてくる。一柳隊の仲間達の声だ。そして、その事に気が付くとそっと目を開く。体の怠さはまだ残っている為、視線だけを動かして周囲を確認する。どうやら一柳隊の控え室らしい。しかし、どうも違和感がある。

そう、何かが違う。先程確かに置いてあった品々が存在しないのだ。
「あれ!?」
「あら、目が覚めまして?梨璃さん。先程からずっとうなされていましてよ」
「そこにあったお見舞いの贈り物は!?」
「お見舞い…?はて、どなたか入院でもしましたかしら?」
「え…」
結梨への見舞いの品々なんて知らないという素振りの楓を見た梨璃は絶句する。
いったい何がどうなっている?

別の花園

梨璃は困惑しつつも周囲を見回す。しかし、やはりおかしい。
控え室内に置かれている備品も微妙に異なるし、壁にかかった日捲りカレンダーに書かれている日付も今日のものではない。そして、部屋の外からは工事の音があちこちで鳴り響いていた。
「いつになったら工事は終わるのかしら」
「さあ…この前の戦闘で校舎もあちこちひどくやられましたからねえ」
楓と二水の二人に至っては身に覚えのない会話をしている。何がいったいどうなっているのか、梨璃は意を決して口を開く。
「あの、私…どのぐらい寝てたのかな？」
「分かりませんわ、ここに運び込まれた時にはもう気を失ったような勢いで寝ていましたからね。何故かＣＨＡＲＭをしっかり抱えながら」
「えーと、頼まれた依頼ってどうなったの？」
「依頼…何かありましたっけ？」
「え…ほら、百由様に頼まれた件だよ」
しかし、二水は首を傾げる。
「工廠科二年の真島百由様ですか…？いえ、今日は特に何もありませんが」
不思議そうな顔で二人は梨璃を見る。
「梨璃さん、ちょっとお医者様に診てもらった方がいいのでは…そういえば、夢結様は？二人で勉強するとか昨日おっしゃっていたでしょうに」
そう言いながら楓は持っていたＣＨＡＲＭのケースを開ける。そして、その中に入っていた物を見て梨璃は唖然とする。
「え？ダインスレイフ…!?」
「梨璃さん、どうかなさいまして？」
「あっ…いや、何でもないよ」
梨璃は咄嗟に作り笑いを浮かべて誤魔化す。梨璃が呆然とした理

由、それは楓が普段使っているＣＨＡＲＭ…ジョアユーズとは別のＣＨＡＲＭであるダインスレイフがそこにあったからだ。それどころか、このダインスレイフは一柳隊では今現在誰も使っていない。それがこの場にある事自体が異常なのだ。しかし、梨璃はこの後再び驚く事となる。

「あら、何かありましたか？」

　控え室に神琳と雨嘉が入ってきた。しかし、彼女達の様子も違う。二人の持つＣＨＡＲＭが違うのだ。雨嘉はアステリオンでは無く、梨璃や二水と同じグングニルを持っている。そして、神琳に至っては盾のような形状のマソレリックでは無く、大剣のような形状であるダインスレイフを抱えていた。

「なんか梨璃が倒れたって聞いたけど」

「大丈夫か？熱中症か？」

　続いて鶴紗と梅もやってきた。梅のＣＨＡＲＭ…タンキエムは変わらない。しかし、鶴紗は違う。ティルフィングではなく、こちらもダインスレイフであった。梨璃がなんとか動揺を隠そうとしていると、いつの間にか室内に入ってきていたミリアムが梨璃のＣＨＡＲＭ…グングニルを見て驚いたように声を上げる。

「んー？このグングニル…何か変じゃぞ？」

「き、気のせいじゃないかな…特に何もしてないよ」

　梨璃の背に冷や汗が流れる。何かがおかしいという嫌な予感が、はっきり異常だという確信へと変わったのだ。もし、この場で自分が異質なものだと判断されたらどうなるか分からない。何とかしてこの状況を誤魔化しつつ、夢結を探し出して合流するしかないと梨璃は内心で考える。

「いーや、おかしい。こんなパーツ見た事ないぞ！わらわだって工廠科の端くれじゃ。それぐらい一目で分かるわい!!」

「え？…わらわ？」

　ミリアムの一人称が違うという事態に梨璃はつい首を傾げてしまった。それを見た楓が心配気に口を開く。

「梨璃さん、やっぱりどこかおかしいですわ。何がありましたの？」

「楓さん。いや、本当に何もないって…」
「…さん？あらあら、どうなさいましたの？でも、いつもと違う呼び方も新鮮で素敵ですわね」
「えっ!?あはは…その、気分転換も大事かなって…ね？」
　梨璃の冷や汗は止まらない。この様子では口を開けば開くほどにボロが出るだろう、梨璃はそうして頭を抱えた。おかしいのは周りか、それとも自分だけか？しかし、どちらにしてもこの場で異質であるのは自分だろう。そして、それに勘づかれた場合どうなるか…これだけ違いがあるのなら、今周りにいる一柳隊の面々が自分の知る心優しい彼女達と同じ性格であるとは限らないのだから。

「起きて、夢結。ほら、起きなさいって」
「ここは…」
　夢結は百由の呼びかけで目が覚める。そして、周囲を見回す。その風景からここはどうやら工廠科のフロアであるようだ。しかし、先程入った電波暗室からは離れた位置である。
「…百由、何が起こったのか説明が欲しいのだけれど。何故、私はこんな所に？」
「何があったのか聞きたいのはこっちの方よ。なにしろ廊下の真ん中で倒れていたんだから」
「どういう事…？」
「で、夢結。あなた、何者？」
「何を言っているのか分からないのだけど」
　そして、百由はため息を一つ出す。
「あなたが抱えているＣＨＡＲＭ…どこか妙でね。整備した覚えが無いのにその跡があるの…でも、癖からしてやったのは私に間違いない」
「この前整備に出したばかりじゃない」
「知らないわよ。やっぱり、話が合わないわね」
　困惑した夢結が百由に今の状況を聞く。
「こちらから質問しても？」

「ええ」
「依頼の件はどうなったの？そもそも、私は梨璃と一緒に電波暗室の中にいたはずよ」
「電波暗室で依頼？何言っているの。そんなの知らないわ」
「そんな訳ないでしょう。あなたはうちのレギオンと一緒に電波暗室の外で待機していたじゃない」
「んー…詳しく話を聞いてもいいかしら？」
　そして、夢結は依頼の詳細と経緯を語る。しかし、百由は何一つ覚えが無いと首を傾げる。
「いっそ、その現場見に行ってみる？」
「ええ、梨璃がいるかもしれないし」
　そう話し合うと、二人は電波暗室に向けて移動する。しかし、その中は取っ散らかった倉庫のような有様であり、梨璃の姿はない。
「ちょっと待って、見たことが無いヒュージのサンプルがあるじゃないの。なにこれ！面白い!!あれ？でも、このラベルに書いてある字は私の字…？」
「いない、か…」
　百由は電波暗室の中の変化に驚いている様子である。一方、夢結の心の内にある違和感はさらに大きなものとなっていく。ここは自分の知る百合ヶ丘ではない、そんな気がするのである。しかし、その確証が無い。自分か百由が何か幻覚のようなものを見せられている可能性だって有り得る。何か確かめる術はないかと夢結は考える。すると、何故かあの機の姿が不意に夢結の脳裏を過る。
「そういえば、雪風は…？」
　そして、自分でも驚く程咄嗟にその機の名が口から飛び出した。
「ゆきかぜ…何それ？新しいＣＨＡＲＭの名前か何か？」
　百由は首を傾げながらそう答える。
　百由の反応からその違和は確信へと変わった。ああ、間違いない。ここは自分の知る百合ヶ丘ではない、と。そして、今の自分の状態はまさに…
「理屈はともかく、深井零と同じ状況に陥った、か…」

「で、深井大尉。並行世界だとかなんて何をどうするつもりでして？」
「さあ、俺にも詳しい事は分からない」
「何ですの、その訳の分からない返事は…」
「実際、そうなのだから仕方ない。全てを知っているのは雪風だけ、俺達には知りようが無い」
電波暗室では救出作戦に向けて準備が進む。梨璃と夢結のＣＨＡＲＭにケーブルを接続、反対側を壁にある部屋の外へ繋がるコネクタへと繋ぐ。そして、深井大尉は先程記録した映像と命令文を雪風へと送信する。
深井大尉よりＢ―１。我が保有戦力である一柳梨璃と白井夢結が異常事態に巻き込まれ、行動不能の状態である。その為、直ちに索敵任務を実施し、この二名を見つけ出して救出せよ。
〈了解、実行可能である。しかし、この任務を遂行するには支援が必要である〉
なんだ？と返す。
〈屋内捜索の場合、どうしても人員が必要となる〉
雪風は現地に送る人員を欲しているようだ。深井大尉はため息をつく。
「少尉、どうやら直接探す必要があるらしい」
「うーん…仕方ないか。そうなると、僕らで探す事になるのだろうか？」
しかし、楓がそこに口を挟む。
「お二人で探す…並行世界の百合ヶ丘を？もしも、その並行世界にお二人が存在しなかったらさぞ目立つでしょうね」
「フムン、その考えは無かった。確かに前と違う状況は有り得るな」
この前の事態では人の姿を確認する事が出来なかった。しかし、今度はどうなるか分からない。人の目があれば飛行服を着た自分達は怪しまれてしまうだろう。
「では、深井大尉。私が行きますわ。万が一の場合でも制服を着てい

れば目立ちはしないでしょう」
「危険かもしれないが、それでも行くのか？」
「覚悟の上ですわ。梨璃さんを助ける為なら例え火の中でも矢の雨の中でも！」
「動機はともかく、覚悟は分かった。しかし、一人だけだといざという時に…」
　すると、神琳が手を挙げる。
「では、私も行きましょう。ツーマンセルの方が安全でしょうし」
「神琳さんが来てくれるのなら頼もしいですわね」
　そして、意を決したように雨嘉も手を挙げた。
「神琳が行くのなら…私も行く」
「ふふ、雨嘉さんが一緒なら私も安心だわ」
　続いて二水が口を開く。
「このままだと奇数になってしまうので私も行きます！楓さんはやらかしそうですし…」
「ちょっと、どういう意味ですの!?」
　四人の志願者を見て、深井大尉は決まりだと頷いた。
「よし、今の内に覚悟を決めろ。雪風は二人が迷い込んでいる空間を探し出し、お前達を導くだろう。ただ、そこでどうなるかは分からない」
　そして、百由は電波暗室の中にマットと枕、追加のケーブルや端末を運び込むと、４人にそれを渡す。途中で倒れるよりは初めから寝ていた方がまだ安心だろうという考えからである。そして、ＣＨＡＲＭのセッティングを終えた百由が扉を閉めると、深井大尉に質問を出す。
「で、雪風がどういう理屈で可能性の偏在に対処したのか説明してほしいのだけど」
「あくまで仮説だ」
　そう言うと、深井大尉は振り返る。
「雪風は膨大に存在する可能性の数々…つまり不確定性とかいうやつを潰して、本来の世界だけを残したと考えられる」

「なにそれ…最早、ＳＦの類じゃないの。とても手に負えないわ」
「安心しろ、俺や桂城少尉でも手に負えない」
「ますます駄目じゃないの」
　百由がため息を出す。すると、モニタの中で靄が発生した。あの異変がまた始まったのだ。しかし、今度はまた違う変化である。それに驚き、あんぐりと口を開けながら百由は呟いた。
「なにこれ、急に色が無くなった…？」
〈Ｂ―１：ｓｔａｒｔ　ｃｏｌｌｅｃｔｉｎｇ　ｉｎｔｅｌｌｉｇｅｎｃｅ…〉
〈Ｂ―３：ＧＯＯＤ　ＬＵＣＫ〉

Ｓｅａｒｃｈ　ａｎｄ　ｒｅｓｃｕｅ

監視カメラの映像が表示されているモニタの中では志願した四人がピクリと動かずに横たわっている。しかし、彼女達に持たせた端末からは当人達の音声が飛び込んでくる。
「うーん…ここは…？皆さん無事でして？」
「ええ。楓さん、なんとか。しかし、電波暗室では…ありませんね。ここは工廠科の格納庫でしょうか」
「私も大丈夫です…雨嘉さん、大丈夫ですか？」
「うん…あれ？でも、何か変だよ」
「どうかしまして？雨嘉さん」
「よく見て、楓。ほら、雪風もレイフも無い…」
雨嘉がその一言を言い終えたのと同時に端末のカメラ映像もモニタに表示された。それを深井大尉、桂城少尉、百由の三人がじっと凝視する。確かに二機の雪風とレイフが置かれている筈のスペースにそれらがいない。コンテナがいくつも置かれているだけだ。百由は唖然と口を開きながら画面を見る。そして、深井大尉はフムンと呟くと無線を飛ばす。
「こちら深井大尉。救出チーム、聞こえるか？」
「ええ、こちら救出チーム。通信に問題なしですわ」
「了解、そちらの様子は端末のカメラ映像にて確認中。現時点で何か問題は？」
「まだ状況を確認中。しかし…そちらでは私達はどうなっていますの？まさか、消えたとか？」
すると、深井大尉は電波暗室のカメラ映像に視線を移す。室内の四人に変化は無い。
「いや、あの部屋の中に全員いる。意識はない様子だが」
「それを聞くと妙な気分ですわ。私達が同時に二人存在する事になりますもの。しかし、ここにあの二人がいる事は確実でして？」
「とりあえず、調べてみない事にはどうにもならんだろう。他に手が無い以上、雪風を信じるしかない」

「まあ、今は億に一つの可能性でもそれに賭けるしかありませんものね…大尉、これからの方針を決めるので、一度通信を切りますわ」
「了解」
　楓がそう言うと、音声通信が切れる。そして、百由がポツリと呟く。
「で、この状況をどう考えるのかしら？まさか、これがジャムの仕業…ついに雪風の位置を嗅ぎつけたという事？」
「いや、違うと思う」
　百由の疑問に対して、桂城少尉がそう返す。
「それは何故かしら、桂城少尉」
「見える景色の様子が違うからさ」
「景色の様子？」
　百由は首を傾げる。すると、桂城少尉はその理由を話し始める。
「そうさ、今この映像に映し出される光景は人の目線から見たそれだ。ジャムや機械知性体が絡んでいるのならこうはならないだろう」
「じゃあ、前はどう見えたのよ」
「もっと殺風景…人の痕跡がまるで無い感じ。今回とは大違いだ」
　それに続いて深井大尉も意見を述べる。
「色も無かったな、さっきみたいに。つまり、雪風は空間の異常を利用して道を作っただけなのだろう。行き先が明確に定まっていたのもあるだろうが」
　しかし、併せて疑問点も述べる。
「これがジャムの仕業だとしても、あの二人をピンポイントで狙った意味が分からない。俺達を狙ったならともかく、だ…それに範囲が狭すぎる。事象が生じたのがあの部屋の中だけなんてそれこそ妙な話だと思う」
「それは僕も同感。ここら一帯まとめて妙な空間にしてもおかしくないな。下手すればこの星丸ごとだって有り得る」
「では、何が…まさか、あれがヒュージの仕業だと？」
「分からない。だからこそ、今ある情報から考えるしかない」
「結局、何もかも未知か」
　三人は画面に視線を戻す。

「で、みんな…これからどうするの？」
　雨嘉は周囲を警戒しつつ言う。
「そうですね、電波暗室でも見に行ってみますか？」
「ええ、神琳さん。その手でいきましょうか。もしかしたら、あの二人が中にいるかもしれませんし」
「では、長居は無用ですね。移動しましょう」
「無線報告は？」
「移動しながらでいいのでは。立ち止まると何があるか…」
　二水が出口を指さしてそう言うと、一行は格納庫を出る。そして、廊下を歩きだした時である。その先に見知った人物の影を見かけた。
「あれは…閑さんですね」
「あら、こっちに気づいたようですわ。ちょうどいいですわね、梨璃さんをどこかで見たか聞いてみましょう」
「ええと、迂闊に接触して大丈夫でしょうか…？」
　そして、楓は閑に声をかける。
「ごきげんよう、閑さん」
「お前達こんな所でどうした、梨璃はもう目を覚ましたのか？」
「え…？」
　四人は目を丸くすると互いに顔を見合わせる。その理由は自分達の知る閑とは口調がまるで違うからである。そして、なんとか表情を誤魔化しながら話を聞く。
「えーと…梨璃さんの居場所を知っていますの？」
「何を言っているんだ、そっちの控え室に送り届けた筈だが…」
「え？あ…ああ、そうでしたのね」
　困惑しつつも梨璃の居場所を知る事が出来た。しかし、それが自分達の知る梨璃であればという大きな問題付きではあるが。
　一行はそのまま立ち去ろうと軽く会釈しながら歩き出す。
「ちょっと待て」
「はいっ!?」
　だが、閑に呼び止められて四人はびくりと止まる。そして、閑は四

人の様子をじっと見ながら言う。
「なんだそのＣＨＡＲＭは、見た事ないが…」
　この反応…どうやら、この世界には無いＣＨＡＲＭがこの四人の持つ内にあるらしい。そして、その問いに対して楓は咄嗟に話を誤魔化す。
「あー、その…これは実家が作った試作品でして…」
「なるほど。そうか、試作品なら見られてはいけないやつか。道理で慌てた様子だったのだな」
「ええ。出来れば黙っていてくださるとありがたいのですが」
「分かった、秘密にしておくよ。じゃあ、梨璃によろしく伝えておいてくれ」
　そう言うと、閑は歩き出していった。四人は呆然とその背を見送る。
「あれ、本当に閑さん…ですよね？」
「え、ええ…見た目は間違いなく…」
「私達の知っている閑さんとは間違いなく違いますね。これは厄介ですよ」
「ねえ、とりあえず大尉や百由様に相談してみようよ」
　雨嘉の提案に皆は頷く。
「こちら救出チーム。深井大尉へ」
「こちら深井大尉だ。方針は決まったか？」
「ええ…でも、一つ問題が」
「なんだ？」
「先程クラスメートと遭遇したのですが、私達の知る人物とはその…口調が全く異なっていまして…」
「フムン」
　すると、百由がマイクに向かって言う。
「まるで深井大尉と同じ気分ね。知っている人なのにどこか違う…」
　桂城少尉もそれに続けて言う。
「こちら桂城少尉だ。そうなると、面倒な点が出てくるだろうと僕は思う」

「それは？」
「状況は違うが、深井大尉はもう一人の自分と遭遇した。つまり、君達にも同じ事が起こり得るって事さ」
　少尉の一言を聞いた四人の背に冷や汗が流れる。万が一、この世界の自分と出会ってしまったらどうなってしまうのだろう…少なくとも、さっきの様に誤魔化しは出来ない。そうなればこの学院全体から不審人物として追い回され、最悪の場合には捕縛される可能性すらあるだろう。
「で、今後の方針は？」
「大尉。とりあえず、まずはこちらの電波暗室を探ってみますわ」
「フムン」
「もしかしたらその中にいるかもしれませんし。また、先程目撃情報を一つ得ましたが、そちらを探るのはリスクが高いと判断しますわ」
「目撃情報…先程会ったという件の人物から聞いたのか。しかし、何故リスキーだと判断した？」
「その場所が場所ですからね…一柳隊の控え室に梨璃さんが寝ているという話ですわ」
　一柳隊の控え室となれば、当然こちらの世界の面々が勢ぞろいしている可能性が極めて高い。そして、その中にこの世界の自分もいる恐れがある。よって、鉢合わせしてしまえば先に想像した通りの大騒ぎは間違いなしだ。
「まるで虎穴だ。飛び込むなら覚悟が必要となるな」
「ええ、できれば回避したいですわね。行くとしても最後にしようかと」
「まあ、それが得策だ。騒動になったらいよいよ動けなくなる」
　そう語りながらも一向は工廠科の区画を慎重に歩く。誰かと遭遇しないかとヒヤヒヤしつつ、なんとか電波暗室までたどり着いた。すると、扉の向こうに気配がある。
「待って、誰かいる」
「あのお二人かしら？」
「とりあえず、調べてみましょう。少しだけ扉を開けて中の様子を…」

と、二水が言った途端に扉が開いた。そして、四人の視線の先には捜索対象の姿があった。
「夢結様…」
しかし、その夢結はどちらの夢結なのか…見た目だけでは判断できない。すると、怪しむような四人のその視線に気づいた夢結がため息をつきながら口を開く。
「本当に私なのかと疑っている、そんな所かしら？さて…あなた達、雪風という名前に心当たりは？」
「夢結様！ええ、分かります。分かりますとも！」
「よかった…しかし、どうやってここに？」
「深井大尉から知恵をお借りしましたの。そして、どんな手段なのかは分かりませんが…雪風のサポートでこちらに」
「雪風が…」
その一言にホッとした表情を浮かべた四人は夢結へと駆け寄る。雪風の力でここに来たという話に夢結は信じられないといった表情をしている。そして、楓は無線で報告を飛ばす。
「こちら救出チーム、深井大尉へ。夢結様を発見しましたわ」
「そちらからの映像で確認した。こちら側の人物で間違いないか？」
「確認済、間違いありません」
「了解。もう一人…一柳は？」
「いえ、まだ…これから調査しますわ」
そうこうしていると夢結の背後から人影が現れる。そして、モニタでその映像を見ていた百由は絶叫。
「わ、わ、わ…私!?」
「いても不思議ではない…救出チーム、その後ろにいるやつとは接触しても問題ないのか？」
「こちら救出チーム、目の前の百由様については夢結様とトラブルに至っていない事から友好的な接触が可能かと」
「了解、可能な限り情報を収集せよ。なお、こっちの同一人物は映像を見て呆然自失になっている」
「了解ですわ。まあ、無理も無いでしょうけど…」

楓は意を決してこの世界の百由に話しかける。
「ごきげんよう、百由様。さて、早速ですが…今の事態についてはどの程度把握しているのでしょうか？」
「いえ、実際のところは全くよ。さっき様子のおかしい夢結を見つけて後は流れでこの部屋を見に来ただけ。で…説明してもらってもいいかしら？その見た事の無いＣＨＡＲＭの数々も含めて、ね」
「ええ、分かりましたわ。一からこの事態について説明致しましょう。でも、その前に…夢結様、梨璃さんは？」
楓の問いに対し、夢結は沈んだ表情で答える。
「いえ、目が覚めた時には周りにいなかったわ…ここに来た理由も梨璃を探すという目的もあった」
「しかし、いなかった…と」
「ええ」
そして、楓は百由に対して説明を始める。まず、自分達がここと違う世界の住民である事。夢結と梨璃が何らかのトラブルに巻き込まれてこの世界に飛ばされた事。それを追って自分達が助けに来た事…
「とても信じられないけれど…実際にこの部屋の中の異変を見る限り、信じるしかないわね」
「という事は、何かが起こった形跡があったと」
「ええ、見た事の無い品々がいくつか転がっていたわ。それには私が書いたと思しき字があった」
「なるほど。向こうで無くなったという品々はこっちに流れてきたと考えてよさそうですわね」
すると、夢結が質問を飛ばしてきた。
「さっき誰かと端末で話をしていたわね。もしかして、深井大尉もこっちに来ているの？」
「いいえ、大尉も少尉も来ていませんわ」
「では、どうやって通信を…？」
「何らかの手段…としか言いようがありませんわね。全ては雪風任せ…」

「最早何でも有りね。都合がよすぎると思えるぐらい」
「何もできないよりはずっとマシでしょう。例え気味が悪くとも」
　楓は大きなため息をつきながら夢結に答える。そして、通信という単語にピンとアイデアが浮かぶ。
「そうですわ、端末を使えばもしかしたら梨璃さんと繋がるかも…」
「理屈がどうであれ向こうの世界と繋がるなら、自分達が普段持つ端末で通話できてもおかしくない、という事かしら」
「ええ、試してみる価値はあるかと」
「そうね、試してみようかしら。表示は…やはり圏外か」
　そんな事を話していると、百由が一つの頼み事をしてきた。
「えーと、一つお願いがあるのだけど」
「なんでしょう、百由様？」
「その、そっちの世界の私と話をしてみたいなって…」
「えっ!?」
　一行はその発言に驚く。
「どうしてですの？」
「いや、純粋な興味かな。怖くもあるけど」
「えーと、少々おまちくださいませ」
　楓は端末を使って件の人物へとお伺いを立てる。

「え!?話をしたいって…いや、そうは言われても…」
「いいじゃないか、そのぐらい。何かいい情報を得られるかもしれない」
「深井大尉!?あなた、他人事だと思って面白がってない？」
「さあな。でも、俺と同じ気分を味わわせてやりたいとは思っている。俺だけ奇妙な気分を味わうっていうのは気分が良くないからな」
「あー、もー」
「救助チームへ、本人の許可を得た。通話可能」
　百由は頭を一度掻くと、恐る恐るヘッドセットを頭につける。
「この端末で向こうの映像も出るはずです」

「ありがとう」
二水が百由にタブレット状の端末を手渡す。一方、夢結はその後ろで覚悟を決めながら端末の通話ボタンを押していた。すると、圏外表示であるが端末からはコール音が鳴る。そして、誰かが出た。
「もしもし…えっ！もしかして、お姉様ですか？」
「梨璃!?梨璃なのね！」
「はい…そうです。なにがどうなっているのかさっぱりで…」
「あなたは今どこにいるの？」
「その、控え室なんですが…なんか様子がおかしくて」
「控え室？分かった、これから向かうわ。ねえ、梨璃。一つ質問」
「なんでしょう？」
「雪風という単語に心当たりは？」
「え、雪風ですか？深井大尉や中尉の？」
「ええ、その通り。よかった、あなたは私の知っている梨璃ね」
楓と神琳はその通話から控え室という単語を聞き取ると頭を抱えた。
「閑さんの話の通りですわね…」
「ええ、虎穴に飛び込む覚悟が必要になりますね…そして、百由様と同じ気分を味わう覚悟も…」
そして、楓は天を仰ぐ。
「ああ、どうなってしまうのでしょう…」

いざ虎穴へ

百由はため息交じりに大きな深呼吸を一つしてからヘッドセットを取り付ける。そして、緊張した様子でヘッドセットに向かって言葉を発した。

「えーと、なんて言えばいいのか…ごきげんよう」

「ごきげんよう、そっちの私…いや、どうも緊張するわね」

「無理もないわ、同じ自分に話しかけているのだから」

「そうね。で、そっちの世界はどういう状況なの？その隣の男の人は誰よ？こっちじゃ見た事無いわ」

「えーっと…正直言ってお手上げなぐらいの混沌っぷりね。で、この男の人達…深井零大尉と桂城彰少尉がこの大異変にどっぷり関わっている当事者よ。中心人物と言ってもいいぐらい」

「どういう事かしら…敵がヒュージなのは同じよね？」

「ええ、そこは同じよ。でも、とてつもなくイレギュラーな事態が先日発生したの」

「と言うと？」

「何もかも違う全くの異世界から偵察機がやって来たと言ったら理解できる？」

「は？」

並行世界の百由はその一言を聞いて口をあんぐり開く。その一言に理解が追いつかなかったからだ。あまりにも荒唐無稽過ぎる。そして、画面の向こうの自分はこれまでに何があったのかを淡々と説明し始めた。

一方、楓達四人に夢結を加えた救出チームはこの世界の一柳隊控え室へと移動する前に策を練る。下手に突っ込めばこの世界の自分達と鉢合わせになるからだ。

「さて、問題はどうやって誰にも遭遇する事なく、あの部屋から梨璃さんを連れ出すか…ですが」

「難題ですわ、虎穴に飛び込むのはなるべく避けたいのですけれど」
　楓と神琳が困り果てたようにそう会話していると、夢結が案を出す。
「さっきみたいに端末を使いましょう。私達が近くまで行ったら控え室から抜け出すように、と梨璃に伝えて」
「名案ですわね。それでいきましょう」
　こうして策は決まった。移動を開始しようかと考えたところで夢結が百由に声をかける。
「百由、あなたはどうするの？」
「ちょっと待って、後で追いかける」
「分かったわ」
　そして、救出チームは歩き出す。念の為にとＣＨＡＲＭを準備、五人は周囲を念入りに警戒しながら歩く。細々した所以外、校内は元の世界とあまり変わらない。だが、普段見慣れた景色と細々違うという差異から無意識のうちに違和を感じ取る。結果、五人の内心では焦る気持ちが強くなっていく…そうして自然と歩く速度も上がっていった。早く事を済ませて脱出したい、そんな念が彼女達の背を押している。
　そして、控え室に近づいてきた為、手筈通りに夢結が端末を使って梨璃に指示を飛ばす。
「いい？今から控え室前に移動するから、あなたはうまく部屋を抜け出して」
「分かりました、なんとかやってみます…」
　通話を終えると、五人は控え室前へと前進。すると、控え室の扉が開いている。そこに背を向けて立っている姿が見える。あれは…
「梨璃さぁーん！」
「あっ!?楓さん、落ち着いて！」
　二水の止める声を置き去りにして楓が飛び出した。そしてその勢いのまま梨璃を抱きしめる。しかし、相手からは困惑した声が出る。
「やっと再会できましたわ！」
「えっ？楓ちゃん!?」

「ちゃん?あらあら、なんて可愛らしい呼び方でしょう…素敵ですわ、梨璃さん」
「えっ?」
　すると、梨璃の隣から困惑した声が飛ぶ。
「どういう事…楓さんが二人…?」
　そこには夢結がいた。楓は恐る恐る元居た背後へと振り返る。しかし、そこにも夢結がいる。これはつまり…
「こっちの世界のお二人!?」
　その光景を見ていた救出チーム残りの四人は唯々天を仰ぐ。そして、もう一人の自分の姿に気が付いたこちらの世界の夢結は唖然とし、口に手を当ててそのまま言葉を失っている。一方、部屋の中からも騒がしい声が響く。
「梨璃が二人だって!?なんだ、どうなっているんだ!!」
「まさか、新手のヒュージ!?」
　そして、外の異変に気が付いたのか次々と控え室からＣＨＡＲＭを抱えたリリィ達が飛び出してくる。それは物の見事に一柳隊の面々だ。そして、その飛び出した面々は外にいる救出チーム一行の姿を見てやはり愕然としている。そんな状況に楓は大慌てで後退し、一方の救出チーム一行は覚悟を決めてＣＨＡＲＭを構えた。
「なんてこと、揃いも揃ってダインスレイフばかり…嘆かわしいですわ、向こうの私まで他社製のＣＨＡＲＭを使っているなんて」
「軽口叩いている余裕はないわ、楓さん。問題はどうやって中から梨璃を無傷で救出するか…」
「しかし夢結様。この状況では中で既に拘束されている可能性も高いかと」
「でも、強行突破は避けたいわね…騒ぎになると他のレギオンまで大集合という最悪のパターンよ」
　双方はジリジリと距離を詰める…まさに一触即発の状況である。すると、そんな空気を崩すように端末の着信音が鳴り響く。その音の出所はこの世界の夢結からであった。鳴っているだけ気が散る。夢結はたまりかねて通話ボタンを押す、後でかけ直す…ただ一言そう伝

えようとしたところで相手からの声が飛んできた。
「おっと、切らないでね！今そこに自分がもう一人いるでしょ」
「…ちょっと、何故分かるの？百由」
「そっちより先に私が会ったからよ。で…彼女達は少なくとも敵じゃないわ、穏便に対処しなさい」
「一体どういう事なの？説明して頂戴」
「あー…今からそっちに行くわ、説明はその際に。いい？絶対に事を荒立てないようにね。後、他の人達に見られないようにして頂戴。騒ぎになったらお手上げよ。じゃあ、切るわね」
「ちょっと!!」
　そして、通話が切れてこちらの世界の夢結は盛大なため息をつく。そして、口を開いた。
「百由が何か知っているみたい。とりあえず、双方ＣＨＡＲＭを降ろして頂戴」
　こちらの世界の一柳隊一同は困惑しつつも指示に従う。そして、それを見た救出チームも同じくＣＨＡＲＭの切先を下へと降ろす。
「こちらの世界の百由が手を打ってくれたみたいね」
「ええ、夢結様…しかし、あちらとはどうコンタクトしましょう？」
「さて、どうしたものかしら…でも、このまま廊下にいるのはハイリスクと言えるわ。一刻も早く控え室に入った方がいいでしょうね」
　そして、夢結は一歩前に出ると口を開く。
「その、話しかけても大丈夫かしら？こちらに敵意はないわ」
「え…ええ、とても状況を飲み込めないのだけど…あなたは本当に私なの？」
「そうよ、私は正真正銘の白井夢結。厳密にはここと別の世界の…だけれど」
「違う世界…？」
「それは中で話しましょう。この光景をよそに見られるとまずいわ」
　二人の夢結がそう会話を交わすと、一行は控え室の中へと入る。そして、部屋の中にはソファーに腰かけた梨璃の姿があった。
「お姉様!!…えーと、どっち？」

そんな梨璃の視線の先には夢結が二人、見た目は全く同じで見分けがつかない。困惑するのも無理はない。すると、その内の一人がため息を一つ。そして、端末を取り出すと、通話ボタンを押す。途端に梨璃の端末が鳴った。

「お姉様！」

梨璃は満面の笑みを浮かべて端末を持った方の夢結へと飛びついた。そして、救出チームの面々はホッとした表情を浮かべる。

「これで二人を見つけ出せたね、神琳」

「ええ。しかし、ちょっと厄介な事になってしまったわ…そこに自分と同じ顔があるというのは複雑ね」

「これが深井大尉と同じ気分…なのかな」

「そうでしょうね…話しかけるだけでも勇気が必要だわ」

一方、この世界の梨璃は目の前にいるもう一人の自分の顔をまじまじと見ていた。

「うわあ、まるで鏡みたい。本当にそっくり…あ、よく見ると髪飾りが違う」

「あの…ごめんね。こんな大騒ぎ起こしちゃって」

「大丈夫だよ。誰も怪我したりしていないし…それで、何が起こったのか教えて欲しいな」

「うん、それがあんまりよく覚えていないの。百由様の依頼で部屋の監視をしていたら気を失って、気が付いたら別の世界…ここに飛ばされちゃったみたいなの」

「つまり事故？」

「そうなるのかなあ…どうしてこうなって、更には楓さん達までここに助けに来たのかまでは分からないけど」

「別の世界かあ…聞いてみたい事はたくさんあるけど。あなたもラムネは好き？」

「それは勿論！」

「やっぱり、そこは同じなんだね。じゃあ、冷蔵庫にあるから取ってくる」

「うん、ありがとう」

そんな二人の梨璃の様子をうっとり眺める二人の楓。
「ああ…梨璃さんが二人！数は倍、可愛さは２０００倍以上ですわ…」
「尊いですわ…これぞまさに奇跡…!!」
「梨璃さん達！もうちょい寄ってくださいまし！はい、そこでストップ」
「シャッターチャンス！ナイスですわ、流石は私!!」
そして、二人の楓はここぞとばかりに端末とカメラで撮影開始、室内にシャッター音が鳴り響く。また、部屋の片隅では二人の二水が興奮したような様子で写真らしきものを見せあっている。そんな光景を見て頭を抱える二人の夢結。
「苦労するわね…」
「お互いね…」
その一方、救出チーム側の神琳は端末を操作すると元の世界へと通信を開始。状況を報告する為だ。
「こちら救出チーム。深井大尉、聞こえますか？」
「こちら深井大尉、通信良好」
「状況報告ですが…梨璃さんを発見し、合流に成功しました」
「了解、映像でも確認している。こちらも生徒会の連中とジャックが来たので、状況を説明していたところだ。で、確認するが交戦はしていないな？」
「ええ。ギリギリで回避しました」
「フムン」
端末で通信する神琳を雨嘉はぼんやり眺めていた。耳につけたイヤホンからその会話の内容が聞こえてくる。どうやら向こうも大騒ぎになっているらしい。
「あの、雨嘉さん」
自分を呼ぶ神琳の声が背後から聞こえ、雨嘉は仰天する。目の前の神琳は通信を続けている…では、この声は？雨嘉は恐る恐る振り返る。すると、そこには神琳がいた…この世界の神琳だ。
「えっと、どうしたの…いえ、どうしましたか？神琳さん」
「そんなに畏まらなくてもいいですよ。普段、もう一人の私に話して

いるような口調でどうぞ」
「じゃあ…どうしたの、神琳？」
「ええ、もう一人の私は誰と会話しているのか気になって…」
「元の世界の百由様や深井大尉と…あ、こっちに大尉達はいないか」
「大尉という事は…相手は軍人かしら？」
「うん、パイロットだよ」
「パイロットですか？」
「えーと、正真正銘の異世界から飛ばされてきた異世界人」
「え？」
　雨嘉のその一言に神琳は絶句する。とてつもなくスケールの大きい話が出てきて困惑したのだ。そして、もう一人の自分達から詳細な話を聞く必要があると心の内で考える。
　一方、雨嘉はもう一人の自分へと視線を向けた。彼女は心配そうにこちらの世界の神琳を見つめている。その様子を見て、雨嘉はどこか安心した心地になった。こちらの世界でも自分と神琳の関係は同じような感じなのだろうと感じ取ったからである。
　そんな中、勢いよく部屋の扉が開く。すると、皆が何事かと反射的に扉の方へと視線を向けた。
「待たせたわね！」
　端末と小型ディスプレイを抱えたこの世界の百由の姿がそこにはあった。

何が違うか、何が起きたか

「さて、モニタも用意したので…ここでじっくり話をしましょうか」
　この世界の百由はそう言うと、救助チームから借りた端末をディスプレイへと接続する。そして、映し出された映像にこの世界の一柳隊一同は驚く様に声を上げる。そこにはもう一人の百由と見知らぬ人物が映っているからである。そして、その背後から梅、鶴紗、ミリアムの顔がぬっと出てくると、こちら側の三人が仰天した声を出した。
「えーと、聞こえるかしら？」
「ええ、聞こえるわ。そっちは？」
「大丈夫よ」
　画面の向こうとこっちで同じ顔と声が会話をしている光景にこちらの世界の梨璃は驚いたようにぽかんと口を開ける。
「さてさて…初めまして、そちらの一柳隊のみんな。じゃあ、そっちの私。話の続きをしましょうか」
「ええ。とりあえず、ギャラリー…いえ、この場合は全員当事者か。皆にも向こうとこっちが並行世界だって事から説明しないとね」
「そうね」
　そうして、画面の向こうの百由は咳払いを一つすると話始める。
「そっちとこっちは非常によく似た世界…つまりは並行世界というやつよ。聞いた事あるかしら？」
　それに対して皆は頷く。
「よろしい、話が早くて助かるわ。で…そちらとこちらはリリィがヒュージと戦っている事に変わりはないわ。でも、決定的に大きな違いがあるの。こちらにはさっき言った並行世界とはまた違う異世界から人間が航空機に乗ってやって来た」
「どういう事？」
　百由の言葉をよく理解できず、こちらの世界の夢結が説明を求めてきた。
「そうね…その世界にはヒュージは存在しないの」
「ヒュージがいない？」

「ええ。でも、別の脅威が存在するわ。宇宙からやってきたジャムという存在よ」
「宇宙…まさか宇宙人が攻めて来た、と？」
「そうとも言える。でも、航空機のような兵器を使ってくるけどその正体は全くの不明…人間に想像できる存在なのかも分からないというとんでもない化け物よ」
「そんな話、とても信じられないわ」
　こちらの世界の夢結がそう感想を述べると、同意するように画面の向こうの百由はため息をついた。
「でしょうね、普通ならそう考えるわ。でも、信じるしかなかった」
「何故？」
「物証が揃っていたからよ」
　そう言うと、画面の向こうの百由の視線は隣へと向けられる。そこにいるのは男性二人…こちらの世界では見た事がない人物だ、とこちらの世界の夢結は考える。
「そちらの方々は？」
「この二人がその異世界からやって来たという件の人物よ。乗ってきた機体もここにあるけれど、格納庫の中だから映す事は出来ないわ…ちょっと、深井大尉。そっちも自己紹介ぐらいしなさいよ。え？何、面倒くさいって…はあ、まったく」
　画面の向こうでは百由と異世界から来た人物が何やら言い合っている様子である。しかし、見た限りでは険悪な雰囲気ではないようだ。そうして、こちらの世界の夢結は画面に映る男性の姿を見る。その見た目は普通の人間に見える…異世界と言ってもファンタジーのように奇抜な世界では無いのだろう。そうして、口を開く。
「で、こっちとそっちはその異世界人が現れたかどうか程度の差しかない訳ね」
「詳しく比較しないと分からないけど、おおよそはそうね。あ、装備も違うか」
　しかし、それに対して向こう側の梨璃は異を唱える。
「いいえ、違う点はまだあります」

「それは何かしら、梨璃」
首を傾げる向こう側の百由に対して梨璃は言う。どこか悲し気な声色で。
「この世界には結梨ちゃんがいません」
「なるほど、そうきたか…」
梨璃の発言で向こう側の一柳隊一同の表情は曇る。一方、その聞いた事の無い名前ともう一人の自分達の反応にこちら側の面々は不思議そうな表情を浮かべていた。そして、こちら側の百由が質問を飛ばす。
「えっと…つまり、向こうとこっちでは一柳隊の人数が違うと?」
「いえ、結梨ちゃんという子がここには存在していないのです。桂城少尉が味わった気分というのはこんな感じなのでしょうね…」
梨璃のその発言に対して男性の声が飛んできた。
「さて、どうかな。でも、あの子の存在は僕やレイフと似たような感じって事か」
「その…あなたは?」
「僕かい?僕はＦＡＦ所属の桂城彰少尉。さっき話のあった異世界から飛ばされた人間だ」
異世界からやってきたという人間の言葉にこちら側の面々は目を見開く。そして、こちら側の神琳は桂城少尉の発言に疑問を浮かべた。
「質問ですが…その結梨という人物とあなたが似たような存在というのはどういう意味なのでしょうか?」
「さて、それを話すべきかどうか。話がややこしくなるけど」
その質問を聞いた桂城少尉は横を向き、百由と深井大尉に意見を求めた。深井大尉はフムンと呟き、百由は一つ頷くと自分が答えると言った。
「そうね、複雑になるから詳細は省くけれど…この二人は既に彼らの世界の並行世界に遭遇しているの。それで、その並行世界にはこの桂城少尉の存在が無かったという事態が起こったの」
「ある人物が他の並行世界には存在しないという…そういう意味です

か」
「ええ」
「しかし、現状で異世界と並行世界が四つも絡まっている…という事になりますね。これは複雑だわ」
　こちら側の神琳は唸る様に言うと、更に質問を続ける。
「では、もう一つ。その結梨という人物はどのような人物なのでしょうか？」
　それを聞いた画面の向こうの百由は困ったように唸る。そして、どこか悲し気な表情を浮かべる梨璃に問う。
「どうする？」
「ええ…説明はお任せします」
「分かったわ」
　そして、百由は語る。
「結梨という子は…端的に言うとゲヘナが作った人造人間。ヒュージの細胞から人造のリリィを作り出そうとした実験体よ」
「なっ…!?」
　あまりに衝撃的な発言に神琳は絶句し、こちら側の一柳隊の面々はゲヘナという単語に苦い表情を浮かべる。
「その様子だと、連中はそっちでもろくでもない存在のようね。で、その実験体を一柳隊がたまたま保護したという経緯よ」
「なるほど…確かにこちらでそういった事態は起こっていません。並行世界とは言っても、差異は大きいようですね」
　神琳がそう言いながら頷くと、先程とは違う男性の声が響く。
「それは当事者だからそう思うだけだ、こちらから見ればおおよそ似たようにしか見えない」
　深井大尉がそのように発言するが、画面の向こうの一柳隊からの怪訝そうな視線に彼は気がつく。こいつは何者なのだ、そんな事を言いたげな表情が並んでいる。
「失敬。深井零大尉、ＦＡＦ所属。噂の異世界人だ」
「先程の発言については、視点の違いという事でしょうか？」
「まあ、そんなところだ。ミクロとマクロのどちらに目が行くかとい

うだけの簡単な話だよ」
　そんな話が続く中、こちら側の百由が話題を変えようと口を開く。
「キリがないからそろそろ話を戻すわよ。で、そもそも何故こんな事態が起こったのか聞きたいのだけど」
「ええ、原因についてはよく分からないわ。でも、一つ言える事は…電波暗室の中が異常な空間になっていたという事。具体的には無数の可能性が同時に重なり合って存在する曖昧な状態らしいわ。まあ、それはあくまでもこの二人の考察だけど」
　画面の向こうの百由が問いに答え、こちら側の百由は更に質問する。
「まるでＳＦね…で、曖昧になってしまった結果、こっちとそっちがこうして繋がってしまったと。こっちに飛ばされてきた六人はワープしたみたいに姿が消えたの？」
「いいえ、意識を失って倒れているような状態よ。体は残ったまま、意識だけそっちに飛んで行ったと言えるかしら」
「意識だけ？それは変よ。彼女達は実体がここに存在しているもの、意識だけならそうはならないと思うけど。幽霊みたいな状態なら理解はともかくまだ納得できるのだけど」
「そこは分からない。しかし、こちらには確かに体はそのまま残っているの」
「ちょっと待って、初めに偶然飛ばされたのは二人だけと話があったわね。それが事故だとして…残りの四人はどうやってきたの？」
　それに対して、画面の向こうの百由はため息を出しながら答える。
「この二人の愛機の力を借りた…としか言えないわ。どうなっているのかは当事者にもよく分からないみたい」
「何よ、それ。つまり、その異世界の航空機は別世界に移動する能力があるって事？」
「いえ、そうではないみたい。異世界でジャムという化け物の攻撃によって今回と同じような状況に陥ったけど、機体のコンピュータの力で対抗した実績がある…と、この二人は言っていたわ」
「んん…？話がよく分からないわ…」

「…私もよ」
二人の百由は困惑したようにため息をつく。すると、深井大尉が口を開く。
「雪風…その機体や他の機械知性体が何をしたのかは明確には分からない。しかし、仮説はある」
「それは？」
「無数の不確実性を潰して一つの可能性だけを定めたというものだ」
「そんな無茶苦茶な…あみだくじの正解以外の線を全て消して回ったような話よ」
「あくまで仮説だ」
こちら側の百由は画面の向こうの深井大尉の発言に頭を抱える。そして、向こう側の百由がある考えを述べる。何がこの騒動を起こしたのかについてである。
「で…私はこの騒動の原因がそのジャムによるものと考えたわ」
「実績があるのなら説明は付くか…納得はできないけど」
「でも、困った事にこの二人がこれはジャムの仕業ではないと言うのよ」
「理由は？」
「事象の規模が小さいし、そもそもジャムに自分達以外を狙う理由がない。それにここにはジャムがいない。だから違う、と…」
それを聞いたこちら側の百由は軽く考える素振りを見せると、平然とした口調で言う。
「じゃあ、ヒュージの仕業ね」
しかし、それを聞いた向こう側の夢結は百由に対して疑問をぶつける。
「ジャムは空間をどうにかできるのよ。可能性が最も高いと考えるのは自然だと思うわ」
向こう側の一柳隊の面々は同意するように頷く、彼女達にとってそれだけ映像で見たジャムの衝撃は大きいものだったのだ。そして、向こう側の夢結がその理由を問う。
「原因がヒュージだと考えた理由は？」

「消去法…でもないな。そもそも私はジャムという存在がどの程度のものなのか知らないわ。それに当事者が違うと言っているし、こちらでもそんな化け物は確認されていない。よって、こんなおかしな事態を引き起こせるのはヒュージしか思い浮かばない」
「でも、私には納得できないわ。ヒュージにそこまで出来るかどうか…」
「よく考えてみなさい、夢結。ヒュージだって常識外れの化け物よ、ワームホールすら使えるのだから可能性としては捨てきれない。で…おそらく、向こうの私は犯人の候補が二つあるから迷っている。定食屋でメニューを見て迷っているようなものよ」
　そして、こちら側の百由は画面の向こうの自分に問う。
「ねえ、そっちのヒュージに何か変わった事は起こっていないの？」
「そうね…あるにはあるわ」
「やっぱりね。で、それは？」
「ヒュージが普段よりずっと活発化かつ狂暴化している、といったところかしら」
「ふーん…原因とかは分かっているの？」
「仮説が一つだけ。でも、それを言うにはちょっと…」
「どうしても？」
　画面の向こう百由はため息をつく。
「一つ聞くけど、そちらでは川添美鈴様は…？」
「ええと…残念ながら亡くなられているわ」
　川添美鈴という人名が出た途端、二人の夢結の表情は固まった。そして、呟くように聞く。
「何故、今その名が出るの…」
「あー…ごめん、やっぱり何でもないわ。気にしないで」
「何でもない？なら何故そんな事を言った。そいつは何者だ？」
　気まずくなった百由が話を切り上げようとした途端、深井大尉の問いが飛んできた。そして、その視線は突き刺さるように鋭いものであった。

残された花の種

「いえ、大尉…その話はまた別の機会にしましょう」
　深井大尉の問いに百由はそう返す。
「何故だ」
「確定もしていない仮説で関係者をいたずらに悲しませる訳にはいかないの」
「しかし、それ以外にヒュージ狂暴化の原因と思しき仮説は無いのだろう」
「ええ。では、後で話しましょうか」
「フムン。じゃあ、それでいい」
　百由からの提案に深井大尉は頷いた。しかし、それに対して画面の向こうの百由は抗議の声を上げた。
「いや、待って。それだと私がその内容を知れないじゃないの」
「あー、そうだった…さっきの雰囲気で察して諦めてくれない？」
「いやいや、無理に決まっているでしょ。一度気になったら納得できるまで我慢できない気持ち、あなたも分かるでしょう？」
「うーん…でもねえ」
　二人の百由がそんな会話を続けている一方、二人の夢結は互いの顔を見て頷いた。そして、画面の向こうの百由へ言う。
「百由、いいから話して頂戴。そんな半端な状態の方が気になって仕方がないの」
「私ももう一人の自分と同じ気持ちよ。だから話して頂戴」
「その当事者がこう言っているが」
「仕方ない…」
　そして、深井大尉の隣で百由は大きな溜息をついた。そうして、彼女は件の人物について語り始める。
「川添美鈴という人物は夢結のシュッツエンゲルだった優秀なリリィよ。表現が過去形なのは彼女が既に亡くなったから」
「この様子だと戦死か」
「ええ。二年前の甲州撤退戦で…夢結と美鈴様の二人だけになった状

況で、夢結だけが生還。詳細については不明となっているわ」
「ツーマンセルで行動していたのに不明だと？分断されたというのか」
「それについては…ちょっとね」
　百由はそう言いかけたところで視線をこの件における当事者…画面の向こうの夢結へと向ける。
「いいわ。話しても構わない」
「じゃあ、話すわね…詳細不明な理由は混戦になったのもあるけれど、夢結のレアスキルも関係しているの」
「それは一度聞いた。力と引き換えに暴走するのだったか…」
「あら、聞いていたの。そう、夢結のレアスキルはルナティックトランサー…戦闘中にそれを発動して戦っていたわ。そのせいか最後の方の記憶が曖昧になってしまったの」
「フムン。何か状況を記録するような機器は持っていなかったのか？」
　百由は盛大に溜息を吐き出しながら答える。
「それがあったらこんな苦労していないわよ」
「それもそうか。しかし…この話とヒュージの件の仮説に何の関係があるんだ？」
「あるのよ、関係が。で、回収された遺体からは夢結によるものと思しき刀傷がいくつも見つかった。だから、初めは暴走による同士討ちが疑われたの」
「フムン」
「でも、確たる証拠が無いからうやむや、疑わしきは罰せずね。なにしろ、検証しようにも肝心の夢結が使っていたＣＨＡＲＭすら所在不明。まあ、それもつい最近までだけど」
　百由の発したつい最近という言葉に深井大尉と桂城少尉は疑問そうな表情を浮かべた。
「最近？どういう事だ」
「あなた達が来る少し前の話よ。百合ヶ丘に一体のヒュージが襲来したわ。その見た目から一度損傷を受けてヒュージネストで再生を受

けた個体と考えられる。それで、そのヒュージが現れた辺りからヒュージの狂暴化が始まったの」
「一度損傷を受けた個体…この前見たような類か」
「ええ。で、問題は…そのヒュージに刺さっていたのよ」
「何が？」
「所在不明になっていた夢結のＣＨＡＲＭ…ダインスレイフよ」
「甲州…つまり、山梨から鎌倉に？そんな偶然があるのか？」
「分からない。偶然かもしれないし、必然かもしれない…でも、これで二年前何があったかを調べる糸口にはなった。なにしろ、ＣＨＡＲＭはああ見えてもコンピュータを載せた機械よ。当時のログはしっかり残っていたわ」
　不意に深井大尉への説明に熱中し過ぎた事に気付いた百由は画面の向こうへと視線を向ける。さて、どんな反応か…だが、画面の向こうの自分や一柳隊の面々は一様に首を傾げている。その様子を怪訝に思いつつも百由は説明を続ける。
「で、そのログを解析したところ、奇妙な点が次々出てきたの」
「フムン」
「まず、戦闘の途中で使用者が夢結から美鈴様に変わっていた点」
「いや、それのどこがおかしい？拾って使ったのかもしれない」
「おかしいのよ。他人が所有しているＣＨＡＲＭはそんな拾ってすぐ使えるような代物じゃないの。まず使うには契約…認証が必要で、その書き換えにはいくつもの手順が必要よ。あんな状況ではまず不可能」
「しかし、それが機械なら…その美鈴という人物が電子的な知識を有しており、通常とは違う手段を知っていた可能性だってあるだろう」
「彼女は工廠科ではないわ。それに仮に知識があったとしても設備や道具がなければ実施するのは不可能よ」
「フムン。では、どういう手を使ったんだ？」
「これはあくまでも仮説よ。少し言いづらいけど…」
　百由は少しためらうようなそぶりを見せると、意を決したように深井大尉の問いに答える。

「リリィとしての能力…レアスキルを使ったと考えられるわ」
　レアスキルという単語に深井大尉は顔をしかめる。
「結局、オカルト的な話か。そうなると俺には理解できない…が、画面の向こうの連中は唖然としているぞ。どういう事だ？」
　深井大尉の言うままに百由は画面へと視線を向けた。画面の向こうの面々は大尉の言う通りの表情を浮かべている。当事者であるこちら側の夢結も同様だ。
「これはまあ、予想通りの反応と言えるわね」
「何？」
「彼女があるレアスキルを有していたと仮定すると、辻褄が合うのよ」
「百由、ちょっと待って…どういう事よ？だって、美鈴様のレアスキルは…」
「今から説明するわ、落ち着いて」
　困惑する夢結の言葉を制し、百由は言う。
「そのレアスキルはカリスマ。その場のマギを介して周囲のリリィの能力と士気を高めるスキル」
「フムン。だが、そんなものがシステムの改編とどう関係あるんだ？」
「カリスマはマギを操作する…人によってはこれを支配のスキルと例える事もあるわ。よって、それを応用してＣＨＡＲＭの設定と術式を一瞬で書き換えた…と考えられるの」
「訳が分からんが…つまり、電子ではなく魔法でプログラムを書き換えたという話と考えればいいのか？」
「ええ、おおよそは…ただ、普通のカリスマではＣＨＡＲＭの設定と術式を弄りまわすなんてそんな芸当は不可能よ。私が疑っているのはそれより上位のスキル、ラプラスというもの」
　画面の向こうの百由から途端に指摘が飛び込んだ。その声はどうも狼狽している様子であった。
「あの…話が最早何もかもこっちと違っていて混乱しているのだけど、ラプラスですって？まだ予想されているだけの存在よ。そもそも美鈴様のレアスキルはカリスマではないし…」
「何が違うかは後にして…そうとしか考えられないのよ。ラプラスは

マギを使って人の記憶すら弄る事が出来るとされているわ。よって、美鈴様のレアスキルがカリスマだと誰も把握していないという事は…」

それを聞いた二人の夢結の顔が青くなる。何か心当たりでもあるのだろうか?そして、百由はため息一つつくと話を続ける。

「で、話を戻すと…術式が書き換えられたＣＨＡＲＭが突き刺さったヒュージがネストに入り、それを介してネストにいた他のヒュージに何らかの影響をまき散らし…それが偶発的に発動したのか、元々時限式のトラップだったのかは分からないけれど、二年経過してついに百合ヶ丘のヒュージに異常が生じた。私の仮説は以上よ」

「フムン。俺からは何とも言えない」

「僕も同じく。こっちの常識が分からないからそれがどれだけ非現実的な仮説なのかが判断できない」

深井大尉と桂城少尉は百由の仮説にそう答える。

「嘘よ…いえ、そんなまさか…」

「無茶苦茶だわ…だって、私のＣＨＡＲＭはブリューナクでダインスレイフを使っていたのは美鈴様…それにＣＨＡＲＭは両方とも回収されていたし、ずっと手元にあった…」

こちら側の夢結はただ下を向いて自問自答を始め、向こう側の夢結はただただ混乱した様子だ。

「落ち着いて、そっちの夢結。そっちとこっちで違うところが更にあったという事よ」

「ええ…でも、違うところはまだあるわ。こっちで回収されなかったのはＣＨＡＲＭではないのよ」

「じゃあ、それは何?」

「美鈴様の遺体…ヒュージに捕食されて回収できなかった…」

向こうの夢結の発言を聞いて、こちら側のリリィ達は目を見開いて驚く。そして、零の声が静かに響く。

「それはおかしい。俺が調べた時にはあの化け物は何も食べないとあった」

しかし、画面に映る深井大尉の口は動いていない。映像が止まった

か?向こう側の面々はそう咄嗟に考えるが、途端に驚きの声を上げる。混乱していた向こうの夢結すらも画面を凝視している。
「え?ええっ!?」
「ちょっと…どうなっているの!?」
深井大尉の背後にもう一人深井零が立っていたからである。
「何これ、ほんとにどうなっているのよ!?」
「心霊現象!?」
「いえ…先程、並行世界と話がありましたが…まさか!?」
向こう側の神琳の指摘に、隣に座るこちら側の神琳が苦笑いを浮かべながら答える。
「ええ、あなたの考えた通りですよ。彼は深井零中尉、別世界の更に並行世界の存在という少々ややこしい事情を抱えた人物です」
「あなた方が説明を省こうとした理由がこれで分かりましたわ…」
向こう側の神琳は頭を抱えた。
「こちらの問いに答えてほしい」
「少なくとも牙で噛みつくという事はあるし、マギを得る為かリリィを捕獲しようとする事例はなくもないけど…その、積極的に捕食というのは…」
百由は背後を振り返ってそう答える。すると、向こう側の百由も続けて答える。
「そっちがどうかは分からないけど、こちらでは稀にあるわ。やはりマギを得る為だと考えられるけど」
「つまり、こちらとそちらの違いという事か」
回答を聞いた深井中尉は納得したのかそのまま画面外へと歩いていった。それを見送るとこちら側の百由は口を開く。
「少なくともそっちとこっちで同じ事はまず起こらないわね。色々と違い過ぎるわ」
「ええ…そうね。でも、こちらも今思ったのだけど」
「何かしら」
「その件のヒュージが百合ヶ丘に現れたのは偶然ではないかもしれないわ。ヒュージに影響を与えたのなら、ヒュージの動きを操る事だっ

て出来たのかも」
「なるほど、そう考えると辻褄が更に合うわね。百合ヶ丘のネストを狙い撃ちか…ありがとう、参考になったわ」
「いえ、こちらもいい刺激になったわ」
　そうして話を終わらせようとする二人の百由。だが、そこで向こう側の梨璃がハッとしたような表情を浮かべるとこう言った。
「あの、この異変の原因って結局何なんでしょう？」
「あ、しまった。すっかり忘れてた」
　二人の百由は同時に考え込む。すると、桂城少尉が案を出す。
「まず、何故あの電波暗室の中で起こったのか考えてみたらどうだろう？」
「そうね…電波暗室、他の部屋との違いは…」
　すると、手を叩く音が画面の向こうから飛び込む。それと共に向こう側の百由が叫ぶ。
「電波暗室！そうよ、外から電波が入ってこないじゃない!!」
「それは当然だ。そういう用途の部屋だ」
　深井大尉がそう言うと、向こう側の百由は一度頷いて仮説を述べる。
「電波を利用するもので対ヒュージ戦略に欠かせないものがあるわ。それはエリアディフェンス。それが遮られてケイブが現れたとすればどうかしら？」
「それはワームホールだったか…しかし、室内にヒュージが出た形跡はないし、映像にも映っていなかった」
　二人の会話を聞いたこちら側の百由は軽く唸る。
「うーん、さっき言ったように百合ヶ丘のネストは異常な状態。もしかしたら、その異常によって発生するケイブもおかしくなった？そして、その効果はヒュージの通路ではなく、空間をおかしくする事…いや、先が繋がってはいるから通路のままとも言えるわね。そうだとすると…あれ？待って、この考え方ならあれもこれも辻褄が合うじゃない！」
「こっちにも分かるように言え。何の辻褄だ？」

「あなた達が現れた事よ！」
「何だって？」
今までいくら調べても手がかりすら見つからなかったあの難題の話が急に飛び出し、深井大尉と桂城少尉、こちら側の一柳隊の面々は驚いたような表情を浮かべた。そして、部屋の隅で様子を見守っていた生徒会一同とブッカー、更に深井中尉も同様に驚いた表情を浮かべていた。
〈Ｂ―１：ｃｏｌｌｅｃｔｉｎｇ　ｉｎｔｅｌｌｉｇｅｎｃｅ…〉
〈Ｂ―３：ＣＯＶＥＲＩＮＧ〉

帰らぬ花

百由の突然の発言に深井大尉は一瞬言葉を失う。しかし、すぐにその理由を問い質す。
「説明しろ、一から分かりやすくだ」
「と言っても…今咄嗟に思い付いた仮説だから具体的にはなんとも」
「そんな曖昧な話で騒がれても困る」
そんな百由の要領を得ない回答に深井大尉は顔をしかめる。
「でも、私の中で話が繋がったのよ。うーん、分んないかなあ」
「俺はお前ではない。分かる訳がない」
「仕方ない…かなり分かりやすく言うと、今回と同じ現象によってあなた達がこの世界にやって来たと考える事が出来たって事よ」
「そういう話か…いや、それなら感覚的には分かる。だが、今聞いただけでも疑問がいくつも浮かぶ。少尉もそうだろう」
桂城少尉は頷く。
「ええ。まず、今回はこの世界と近い並行世界に繋がった。でも、我々の世界はここととはかなり異なる。異世界と例えてもいいぐらいだ、だからこそ妙な話になってくる。まず、僕達の世界にはマギやヒュージなんてものはない。つまり、まるで縁がないと思えてしまう」
「うーん…あの穴からマギが一方的にあっちへ流れ込んだ、と考えれば辻褄は合うかしら。でも、何故あなた達の世界に繋がったのかは分からないけど」
一方、深井大尉は画面へと視線を向ける。そこにはただ困惑した表情が並んでいる。無理もない、これは向こうの世界には縁のない話だからだ。そして、深井大尉は溜息を一つ吐き出す。
「この話を聞いている向こうの連中は困惑しっぱなしだ。話はとりあえず後にして、まずはこの騒動を片付けた方がいいのではないか」
「そうね…長引くとどうなるか分からないし。あー、そっちの私、という事でそろそろこの事態を終わらせたいのだけど」
「ええ、終わらせましょう。いい加減頭が痛くなってきたわ…」
そして、こちら側の百由は深井大尉へ視線を向ける。

「で、向こうからこっちに帰還する方法は？」
「雪風に帰還命令を出す」
「やっぱりそうなるのね…」
「ああ、それしかない」
　もういいやと言わんばかりに百由は溜息を吐き出した。何がどうなっているのかもさっぱりである為、今は考えるだけ無駄だと思ったのである。すると、画面の向こうの百由が何かを思いついたように頷くと口を開く。
「しかし、向こうは大変ね。この現象がネストからのマギとケイブ発生時の粒子によるものと考えると、エリアディフェンスの効果が弱い地点はみんな異常域になっていると考えられる。こっちでも同じ事が起こった場合に備えて何か策を練っておかないと…」
「あ…そうか、そうなっていてもおかしくない。これは不味いわ」
　画面の向こうの自分の呟きを聞いた百由の表情は途端に険しくなる。すると、背後に向かって叫ぶと立ち上がる。
「ブッカーさん、この件は緊急で調査すべきよ！下手すればあちこちに異世界の入り口が出来ていてもおかしくないわ!!」
　その叫びを聞いた画面の向こうの面々は一斉に首を傾げた。それもその筈、それが百合ヶ丘では聞いた事のない人名だからである。しかし、ブッカー少佐とその現状について説明しては向こう側へ更なる混乱をまき散らすだけだろう。そう考えて深井大尉も画面の向こうの救出チームも何も語らない。
「救出チームへ、帰還する。装備を片付けて用意を整えろ」
「了解ですわ、大尉」
　深井大尉がそう無線を飛ばすと、画面の向こうの救出チームは各々動き出す。しかし、夢結の表情は未だ沈んだままだ。それでもなんとか作業を行っていると、この世界の夢結が話しかけてきた。
「大丈夫？さっきの話からずっとそんな調子だけど…」
「ええ、大丈夫…大丈夫よ」
「そうは見えないわ。別の世界の自分でもやっぱり分かるものね」
「あなたは悩んでいないの？お姉様の事…」

「悩んでいるわ。でも、最近やっと気持ちに一区切りついた、そんなところ」
「羨ましいわ、今の私にはとても…」
どこか憔悴しているようにも見える別世界の自分に対して、この世界の夢結は尋ねる。
「あなた…悩んでいるというか、他に何か隠していない？」
「…分かるの？」
「なんとなく…ね」
「隠していても自分には分かってしまうか。ええ、実は…」
そして、夢結はこの世界の自分にある悩みを打ち明ける。それは、たまに川添美鈴の幻覚が現れ、自分に語り掛けてくるというものだ。こんな無茶苦茶な話を他人に相談できるはずもなく、今まで一人でずっと抱え込んでいたのである。
そんな話を聞いたこの世界の自分は驚いたように二、三度瞬きをしている。
「その様子だとそっちでは起こってないか…突拍子もない話だけれど、信じられるかしら？」
「ええ。不思議とありえそうな話だと思ってしまうわ」
「これまでは単にトラウマやストレスのせいによる幻覚の類だと考えていたのだけど…さっきの百由の話で変な予感が浮かんでしまったの」
「美鈴様に実は何かやられていた…そんな予感か」
「ええ。あの方ならそれぐらいの力があっても不思議じゃない…そんな感じがして。あなたはさっき気持ちに一区切りついたと言っていたけど、どうやったのかしら？」
「そうね…最後はシルトに救われた、そんなところね」
微笑みながらそう答えたこの世界の自分を見て、夢結は驚いたような表情を浮かべる。
「あなたは梨璃の事を信頼していないの？」
「人としては信頼しているわ、優しくてそれでいて真っ直ぐで。でも、その…見ていてどこか危なっかしくて、リリィとしてはまだとても

…」
「分かるわ。でも、人としては信頼できるのよね？それなら十分よ」
「そういうものかしら…」
「そうね。それに頼れる仲間達だっているでしょう」
そう言うと、この世界の夢結はもう一人の自分の肩の上に手を乗せる。
「大丈夫、必ず何とかなるわ。だから、一人で抱え込まずにみんなを頼って」
もう一人の自分からそう言われた夢結はそのまま深く頷いた。
すると、自分達の世界の楓が撤収準備を終えたと伝えてくる。そして、一行はこちらの世界の面々に謝意と別れの挨拶を告げる。
「準備完了ですわ、大尉」
「別れの挨拶は？」
「ええ、済みましたわ」
「では、始めよう」
そして、深井大尉は端末に指示を出す。
「深井大尉よりB—1。捜索対象及び救出チームを帰還させろ」
〈B—1、了解。実行する〉
無線からそんなやりとりが聞こえた途端に一行の視界は暗転する。
その刹那、夢結は心の内で考える。帰ったら梨璃やみんなに先の件を相談してみよう、と。すると、耳元で囁くような声が響く。
「どうだろうね、向こうの夢結と今ここにいる夢結は違う存在だ。そう考えると、さっきのあのアドバイスが本当に上手くいくと思うかい？」
「その声は…」
「それに、僕が見えるなんて言っても信じてもらえるかな。そして、信じてもらえなかった時、君はどうするつもりだい？…おっと、怖がらせてしまったかな。でも大丈夫、ここには僕がいる」
「…お姉様」
「安心して、僕が君の心を守ってあげよう」
夢結はそうして差し出された手をそっと掴んだ。

「うーん、ここは…」
「電波暗室…帰ってきたみたいだね」
救出チームの四人はハッと目を覚ますと、咄嗟に周囲を見回す。そして、そこが元居た電波暗室の中である事を確認するとホッと胸を撫で下ろす。
「二人は？」
「そうでしたわ！」
楓は慌てて梨璃の傍へと飛びついた。
「梨璃さん！梨璃さん!!」
「うーん…楓さん？あれ、さっきのって…夢？」
「いいえ、先程の出来事は現実ですわ」
「じゃあ…つまり、無事に戻れたって事？」
「ええ！」
梨璃はよかったと言わんばかりに笑顔を浮かべる。そして、立ち上がった拍子にふと隣を見る。そこには確かに夢結の姿がある。しかし、ピクリとも動かない。
「お姉様、お姉様。起きてください。うーん…もしかして寝ちゃった？」
「いえ、これは…様子がおかしいですわ。深井大尉!!」
五人は慌てて扉を開けて外に飛び出す。すると、ちょうどこちらへと深井大尉、桂城少尉に百由の三人が速足でやってくる。
「大尉！夢結様が!!」
「分かっている。途中で何かが起こってアイツだけ帰還できていないらしい」
「それは…雪風がミスをしたと？」
「いや、こいつを見ろ」
そうして、深井大尉は端末の画面を見せる。
〈白井夢結が予定のコースを逸脱。修正不能〉
「コース？これはどういう意味でしょうか？」
一見して理解できないその文章に神琳が困惑したように聞く。

「雪風は可能性を選び抜いて事象を確定させたのではないか、とさっき言ったな」
「ええ」
「で、こいつは更なる仮説だ。白井は雪風が予想した結果と違う、外部からの干渉か自らの意思で別の選択肢を選んでしまった。結果、未だに元の肉体に精神が戻ってきていないという事態に陥った」
「選択肢？つまり、またどこかの並行世界に迷い込んだという事でしょうか…では、どうすれば？」
「それを今からどうにかするんだ」
　すると、騒ぎを聞きつけた深井中尉や他の面々も続々と集まってくる。
「何があった？大尉」
「少佐、一人だけ帰還できていない。白井夢結だ」
「どういう事だ？原因は？」
「確定はしていない。よって、今から策を練る」
「うむ…」
「事態をどうにかしているのは雪風だ。したがって、雪風と話し合わない限り方針は定まらない」
　そう言うと、深井大尉は端末に目を向ける。一方、深井中尉はブッカーの隣に立つと愚痴る。
「最早手に負えない問題だ。雪風に乗って空を飛んでいた方が余程気楽だよ」
「俺だって同じ気持ちだよ、零。だが、人の命がかかっている。訳が分からなくとも手を尽くすしかないんだ」
「厄介だ…雪風はB―1のやっている事をどう見ているのだろう」
「機械と機械のやり取りだ。もしかすると、人間よりもずっと今の状況を理解しているかもしれないぞ」
「それはなんか嫌だな。俺だけ仲間外れみたいだ」
「安心しろ、お前だけじゃない。ここにいる全員そうだ」
「でも、いい気分ではないよ」
　そして、深井中尉は視線を格納庫のある方向へと向ける。雪風は今

何を見ているのだろう、そう考えながら。一方、深井大尉は端末を見て唸る。
〈救援任務の再実施を求む。そして、救出対象に存在する不確定要素を排除されたし〉
「この不確定要素というのが何なのかが分からん」
「まあ、何にせよ…白井夢結の中に潜んでいた何らかのバグを探し出してデバッグしないと前には進まないって事だ」
「そんな乱暴な…コンピュータじゃないのよ、少尉。それこそ人の心の中に踏み入れないといけないような話になるかもしれない、そこで迂闊な事をするとどんな事態に陥るか…」
深井大尉、桂城少尉、百由の三人は端末に表示された一文を見て話し合う。
「それなら、仲のいい人間を送りこめばいい。そうすれば話が早い」
「大尉、あなたは他人に心の内を見せたいなんて思う？」
「いいや、全く思わない」
「そういう事よ。いくら仲のいい相手や家族でも心の内は迂闊に見せたくないでしょう」
「では、どうすると言うんだ。このまま放置しろと？」
「それは駄目よ。しかし、何が原因なのか…」
「原因か。しかし、行きに影響が無かったのは何故だろう？彼女に元々何かあったのなら、一柳とは別の空間に飛ばされていても不思議じゃない」
桂城少尉の意見に百由は唸りながら悩み込む。
「では、向こうに行っている間に何かあった？」
「このまま俺達だけで考えていても埒が明かない。傍にいた連中に話を聞こう」
「ええ」
そして、三人は救出チームと梨璃を呼ぶ。
「帰ってくる前、夢結に何か変わったところとか無かったかしら？」
「変わったところ…ですか？うーん」
すると、梨璃がハッとした様子で口を開く。

「あの話の後、どうも表情が沈んでいたような…」
「確かに…」
　その話を聞いた百由は頭を抱えた。原因が間違いなく自分の話した仮説だという確信を得たのである。
「やはり話さなかった方がよかったかしら…」
「今更どうにもならん。それに帰還の糸口を掴みかけたんだから無駄ではなかった」
「で、原因はそのトラウマか何かで確定なのかい？帰還に合わせてヒュージが何かやった可能性だって残っていそうだけど」
　そんな桂城少尉の疑問に深井大尉は即座に答える。
「そうは思わない。雪風が敵の妨害によるものだとは言わなかった」
「確かにそうだ。そうなると、さっきの話に逆戻りか」
「心の問題…ね」
「面倒だ、こういうのはフォス大尉でもいればな」
「いない以上、自力で何とかするしかないでしょう」
「で、そうなると結局誰を送りこむ？」
　深井大尉の一言に桂城少尉と百由はただ沈黙する。仲のいい人物を送りこんで何かあればその後に拗れたり、彼女の精神に何らかの悪影響を与える可能性だってある。よって、迂闊に誰をなんて提案をする事は無理であった。
「フムン、仕方がない…」
「深井大尉！私が行きます!!」
　梨璃が手を挙げた。すると、慌てた様子で百由が止めようとする。
「待って、何があるのか分からないのよ！最悪、夢結の心の中を見る事になるかもしれない。そうなったら彼女から嫌がれたり、あなたが夢結を嫌ったりする事になるかもしれないの！」
「構いません！私はお姉様に一度命を救われています。だから、例え何があろうともお姉様を救う覚悟です」
　梨璃の目を見た深井大尉はフムンと呟くと口を開く。
「覚悟の決まった目だ、他人が何を言っても無駄だろう。しかし、一人だけだとリスクがあるが…」

そう言うと、もう一人手を挙げる。その手を挙げた主を見て、皆が仰天する。それが深井中尉だからであった。慌てた様子で史房が理由を問う。
「深井中尉、白井さんとは特に関りもないでしょうにどうして…」
「だからこそだ。アイツとは関係が薄いし、そもそも俺はこの世界の人間ではない。よって、何があろうと後腐れを気にする必要が無い」
「いえ、しかし…」
「アイツの気持ちはどうでもいい。俺は機械知性体が…雪風が何を見ているのかを知りたいんだ」
その一言に深井大尉は大きく頷く。
「フムン、そう思ったのなら行った方がいい。その気持ちは俺にもよく分かるよ」
「深井大尉!?止めなくていいのですか!」
「止める理由がない。それに雪風が本質的に人の心を理解しているかというと確信が持てない。だからこそ、機械知性体の事が分かる人間も行くべきだろう」
「そして、これらは明確な偵察任務でもある。そうだな、ジャック?」
そう言われたブッカーは困ったように頭を掻いた。そして、溜息を吐き出す。
「それで偵察する理由は、中尉?」
「帰る手掛かりを探る為。そして、二機の雪風が今何を見ているのかを把握する為だ」
「よろしい、行ってこい」
深井中尉と梨璃は大きく頷くと駆け出そうとする。だが、ブッカーは二人を呼び止めた。
「いや、待て…何があっても必ず帰還せよ、これは命令だ」
「ああ、了解だ。ジャック」

花を探して

電波暗室の前に梨璃と深井中尉が立つ。
「そういえば…深井中尉はどうやって行くんです？なんか、さっきはＣＨＡＲＭを使ったって聞いたけど」
梨璃は小首を傾げてそう疑問を口にする。すると、桂城少尉が無線からその問いに答えた。
「さっきは君らの位置が分からないからああいう手を使った。雪風がＣＨＡＲＭのコンピュータを介して君らの痕跡を追ったんだ。でも、今度の場合は雪風が彼女の座標を把握しているらしい。だから、もうＣＨＡＲＭの有無は関係無いみたいだ」
「じゃあ、電波暗室にいるだけでいいって事ですか？」
「そういう事。でも、自衛用にＣＨＡＲＭは持っていて欲しい。正直、何が出てくるか分からない。そして、深井中尉ではヒュージとは戦えないからね」
「はい！」
梨璃は元気よく返事を返すと、電波暗室の扉を掴む。
「深井中尉、行きましょう」
深井中尉は無言で頷く。そして、それを見た梨璃は扉を開けた。中は先程と変わっていない、夢結も変わらず目を瞑って意識を失ったままである。楓達のサポートを受け、二人は準備を整える。もっとも、準備と言っても横になって覚悟を決めるだけだが。
「こちら深井中尉、準備は出来た」
「了解、待機せよ」
すると、楓がドアへと手を伸ばす。
「お二人とも、お気を付けて」
「はい」
そんな会話を終えると共にドアが閉まる。すると、途端に変化が起きた。全てのものにピントが合ったかのように、視界がやたらと鮮明に見えるようになった感じがしたのである。二人とも目はいい方であるが、それにしてもおかしい。そして、意識を集中すると壁の一点

が拡大されたように見える…まるで望遠鏡でその一点を覗いたように。
「なんだ…？」
「さっきと違いますね。それになんか目がおかしい…？」
そんな不思議な感覚に二人は困惑した声を上げる。すると、深井中尉の持つ端末が鳴る。
〈Ｂ―３：ＣＯＶＥＲＩＮＧ〉
「雪風？援護するとはどういう事だ…？」
「中尉、何が書いてあるんです？」
「いや、雪風…Ｂ―３が援護をすると…」
すると、端末にはマップが表示された。そこには色のついた線が書かれている。
「これに従って進めと言うのか？」
「外に出るんですか？私達まだ意識を失っていませんが」
「そういえばそうだ。しかし、雪風がそう言っている」
そんな会話を続けていると、無線が鳴った。
「こちら深井大尉、聞こえるか？」
「大尉、聞こえている。先程と同じ状況にならない、どうなっている」
「こちらからは室内が観測不能だ。状況を知らせ」
「何？視界は良好だが…カメラが壊れたか？」
「いや、靄で何も見えない」
「靄？」
その無線の一言に二人は顔を見合わせた。部屋の中は煙も靄もない。どうなっている、互いにそんな表情を浮かべながら。
「一柳、端末のカメラを動かせ。確認したい」
「分かりました、深井大尉」
梨璃がすぐさま端末の電源を入れ、カメラを起動する。
「電源入れました」
「確認した。驚いたな、室内の監視カメラとはまるで違うぞ」
「こちら深井中尉、そっちが何を見ているのかは分からんが…特に支障はない状況だ」

「フムン」
「報告だが、B―3が支援を行うと言ってきた」
「具体的には？」
「誘導すると言っているようだ。端末の地図に経路が映し出されている」
「こちらブッカー少佐。零、雪風はどこに行けと言っているんだ？」
深井中尉は端末を確認する。しかし、学院の施設に興味が無かった彼にはそこが何の部屋なのかさっぱり見当もつかない。
「ここは…どこか分かるか、一柳？」
「えーと、寮みたいですね。あっ、そうか…ここはお姉様の部屋です!!」
「なるほど、それなら納得だ」
彼女の自室なら夢結が一人はぐれて何も知らずに自室へ帰ったと考える事もできる。
「とりあえず、移動する。警戒しながら進むぞ」
「了解」
この空間がどうなっているのか分からない。下手をすれば移動すらできておらず、元の空間のままという可能性すらある。恐る恐る、梨璃が扉を開ける。
「誰もいない…？」
確かにいたはずの仲間達の姿が無い。それどころか人のいる気配がさっぱり感じられない、この建物全体がしんと静まり返っている。間違いない、自分達は別の空間にやって来たのだ。
「こちら深井中尉。別の空間にやってきた事は確認できた」
「こちら深井大尉、確認した。そのようだ」
同じ声の会話が無線に響く。そんな会話に奇妙な感覚を感じながらも梨璃は周囲を警戒する。相変わらず物音ひとつない、この場に響くのは二人の足音のみ。念のために持ち込んだヒュージを探知する為のセンサ…ヒュージサーチャーにも一切反応がない。それを見た梨璃はホッとしたように軽くため息を吐き出した。
「人もヒュージもいませんね」

「そのようだ」
　そして、梨璃は深井中尉に尋ねる。
「そういえば…深井中尉は雪風が何をやったのかって分かるんですか？」
「分からない。可能性の確立がどうのと言っていたが、それが何なのかさっぱり見当が付かない」
「やっぱり…そもそも可能性の確立ってどういう意味でしょう？確立って事は決まったという意味だし、そうするとわざわざ可能性なんて言い方しなくてもいいような…んー？」
　梨璃は困惑したように首を傾げる。
「どうした？」
「いえ、難しい話なのになんか不思議と言葉が並んでいくなって…」
「この空間のせいか？まあいい。可能性という言い回しは物事が決定する前にいくつも選択肢があったという事だろう。しかし、そこから確立したという事はどういう意味なんだ、まるで向こうの雪風がその人間の行動を決定したような言い方だ。例えるならこのマップの案内通りに歩かせる様なものだろう」
「つまり、雪風には人間を操る事が出来るって事ですか？」
　その一言を聞いた深井中尉の背に嫌な汗が流れる。そんなまさか…そんな事があってはならない。そんな思いが心の奥底から噴き出してくるような感覚に襲われる。
「いや、そうは考えたくない。それに雪風が人間を操る事は困難だ、機械に人間の思考を読み取る事なんて…いや、待て。あれを使ったとしたら…」
「あれって何です？」
「ＭＡｃＰｒｏＩＩ」
　聞いた事の無いような単語に梨璃はきょとんとした表情を浮かべる。
「心理学用の行動心理予測プログラムだ。雪風にはこれが入っている。よって、これを使って行動を一人一人予測したとすれば…」
「機械が行動を予測って…そんな事って出来るのですか？」

「分からない、確証は無い。しかし、現状だとこれが一番怪しい。個人の行動を都度予測、外部からの何らかの干渉を加えていく事で理想的な結果に導く…」
「途中でそれがうまくいかなかったからお姉様だけ戻れなかった、と」
　梨璃の頭の中は異常に冴えていた。こんな要領を得ない奇妙な話なのに、まるで友人と世間話をしている時の様に不思議と会話の内容がうまく頭の中に入ってくるような感覚だった。そして、それは思考だけに留まらない。視野すらも普段よりも広く感じる。
「でも、どうしてそうなったのでしょう？」
「ソフトがエラーを出した可能性だってある。その辺りは分からない」
「それを調べてほしいから雪風は私達を送ったのかもしれませんね」
　確証は無いが不思議と説得力がある、梨璃の言葉に深井中尉は心の内でそう考える。分からないからこそ雪風…B―1はその実態を知りたいのだろう。
「この先です」
「ああ」
　二人は誰もいない廊下を駆ける。今のところ何の障害もない、だからこそ不気味であった。これは何かの罠なのではないか？深井中尉の本能はそう囁く。しかし、B―3から警告が出る気配はない。今のところはこれでも安全だと言えるのだろう。そうして、梨璃が立ち止まる。どうやらこの目の前の部屋が目的地らしい、端末のマップにもそう表示されていた。
「鍵は？」
「閉まっていません。開けます！」
　梨璃が扉を静かに開ける。室内に異常はない、そのまま中に足を踏み入れる。深井中尉も後に続く。
「お姉様、いらっしゃいますか？」
「待て、誰かいる」
　深井中尉の声に梨璃は驚く。全くそんな気配が感じられなかったからである。戦場に身を置いていた経験の差だろうか…そして、見知

らぬ女性の声が場に響く。
「やあ、初めまして。一柳梨璃」
「あなたは？」
そこにいたのは見た事の無い女性の姿、短めの髪型に色素の薄い髪色…ベッドに腰かけている。そして、その姿を視認した途端に端末から警告音が鳴る。
〈Ｂ―３：ＣＡＵＴＩＯＮ：：ＵＮＫＮＯＷＮ〉
「誰だ、お前は」
「僕は川添美鈴、よろしく。あなたは深井零…中尉の方かな」
その口からは先程聞いた故人の名前が飛び出した。

幻影

「お前は戦死したとさっき聞いたが、何故ここにいる」
　深井中尉はそう呟きながらも眼前の女性を睨みつける。
「恐ろしい表情だ。何もそこまで怖がる事もないだろう」
「質問に答えろ。貴様はジャムか？」
「ジャムとかいう化け物ではないし、ヒュージでもない」
「まさか幽霊だとでも？こんなオカルトだらけの世界だ、いても別におかしくはないか」
　だが、自らを川添美鈴と称するその人物は首を横に振った。そうして、彼女はそっとベッドに手を置く…その布団の中に誰か寝ているらしい。なるほど、捜索対象はそこかと零は心の内で呟く。
「残念ながら幽霊でもない」
「では、何だと言うんだ？」
「教えてあげてもいいけれど…一つ条件がある」
「なんだ？」
　条件という単語に深井中尉は怪訝な顔を浮かべる。
「無線を切ってほしい」
「何だって？」
「無線だよ。それで他の人達もこの様子を見聞きしているのだろう？」
「えっ…何故、あなたがそれを知っているのですか!?」
　美鈴のその発言に梨璃が驚いたように問う。しかし、彼女は首を横に振る。
「それも含めて条件を呑んだら教えてあげよう。こればかりは不特定多数に話す訳にはいけないからね」
「中尉、どうしましょう…」
　深井中尉は相手の様子をじっと見る。一見して武器の類は持っていない様子である。そして、相手が襲い掛かって来てもこちらには武装した梨璃がいる為、その対処はどうにでもなるだろう。そして、決心する。

「分かった、要求を呑む」
「中尉!?」
「どうせ情報を得なければ先に進めそうもない。それにこっちには戦力もある」
「えっと、それって雪風ですか?」
「お前だ。いざという時の覚悟は決めておけ」
「ええっ!?」
「こちら深井中尉。情報収集の為、これより無線を封止する」
「了解、中尉。グッドラック」
　そして、深井中尉は無線の電源を切った。どうせ、無線を切っても雪風はこの場を見ている筈だ。何の心配もない…そう心の内で考えながら。

「深井大尉!何故止めなかった!?」
　ブッカーが叫ぶように問う。それに対して深井大尉は軽く首を振る。
「少佐、あなたは少々過保護すぎる。特殊戦なら単機行動に無線封止ぐらいはいつもの事だろう」
「いや、しかし…今の二人は生身の状態で孤立している」
「孤立だって?それはどうかな」
「どういう意味だ。これはどう見ても孤立状態だろう」
「あの二人には我が特殊戦機三機による直接的な援護がある。とても孤立とは言えないよ」
　その一言に桂城少尉を除く一同は唖然とした表情を浮かべる。それもその筈、二機の雪風とレイフは地上に留め置かれたままだからだ。あの状態では戦闘なんてとてもできない。
「援護だと?だが、雪風もレイフもここに存在している。よって、直接手は出せない筈だ」
「分からないか、少佐。今のあの二人は雪風から投下された外部センサと言ってもいい。だから、この場で無線を使ってやりとりをしてい

る俺達よりもずっと繋がりは深いと言える。それに現地には直接的な戦力もあるじゃないか」
　戦力という単語を聞いたブッカーは訝しむような表情を浮かべる。それが何なのか見当が付いていないらしい。そして、その様子を見た深井大尉はフムンと頷くと口を開こうとする。しかし、そこで別の人物の声が飛び込んだ。楓の声だ。
「ブッカー少佐、いるではありませんか。あそこには我らが一柳隊隊長の梨璃さんが」
「いや、しかし…彼女はまだ経験が浅い筈だ」
「いいえ、梨璃さんならどんな困難でもやってくれます。彼女はそういうお方ですから」
　真っ直ぐと見据えた瞳で彼女はそう言うと、たまらずブッカーは溜息を吐き出した。
「では、信じるとしよう。君達のリーダーと雪風を」
「ジャック、もう一人忘れているぞ」
「忘れてなんていないさ、あいつの事はとっくの昔に信用しているからな。わざわざ言う必要が無いだけだ」
「フムン。では、待つか」

「では、話してもらおうか。お前がいったい何なのかを」
　深井中尉は鋭い視線を向けたままそう言った。
「じゃあ、約束通り話すとしようか。この僕が何者で夢結とどういった関係なのかを」
「そうだな。だが、俺はオカルトのような類の話は分からない。分かりやすく頼む」
　そして、彼女は視線を窓の外へと向けると口を開く。
「僕は本物の川添美鈴ではない」
「何だって？」
「そうだな…シンプルに説明するとしたらただの幻、夢結が無意識のうちに作り出した心の内にいるだけの存在。いくら手を伸ばそうが

触れる事の出来ない、そういったもの」
　その言葉を聞いた二人は驚いた表情を浮かべた。
「心の内の存在？」
「そうさ、彼女は傷つき過ぎた。後悔や罪悪感、そんな気持ちが積もりに積もって僕という幻影を作ってしまった。無意識のうちにね」
「本物のお前が過去に何かしたという事は無いのか？さっき人の記憶を操る能力があるかもしれないと仮説を聞いたが」
「それは分からない」
「何？答えるつもりがないという事か」
「そうじゃない、本当に分からないんだ。僕は夢結が作り出した存在。よって、その彼女がその事実を記憶していなければ分かる訳がない」
「なるほど、俺達の事を知っているのはそれが理由か」
「じゃあ、あなたはここで何をしているんです？」
　梨璃の問いに美鈴はニヤリと笑みを浮かべる。
「それは決まっているだろう。シュッツエンゲルとして大事なシルトを守る為さ」
「守るって…ここにいたらお姉様は意識を失ったままじゃないですか！」
「そうだね。でも、こうしていれば彼女はこれ以上傷つく事は無い」
　梨璃は息を呑む。
「でも、そんなの…おかしいです」
「おかしいって？君は彼女がどれほど深く傷ついているのか正確に把握できるのかい？」
「え？それは、その…」
　梨璃は答えに窮する。しかし、深井中尉が呆れた様子で反論を叩きつける。
「分かる訳がない。他人の心の内なんて知る手段がない」
「それもそうだ。少し意地悪を言ってしまったかな、梨璃」
「いえ…」
　すると、今度は深井中尉が口を開く。
「俺達の仮説では、雪風が救出対象を帰還させる為に何らかの予測を

立て、その通りにあの連中の意識を導いたと考えている。そして、そこの白井だけが帰還に失敗した。で、お前はさっきそいつを守る為に動いたとか言ったな」
「ああ」
「この状況はお前が介入した結果か？」
「結果としてはそうだね。僕は夢結を守る為に動いたのだから」
「幻だろうと妄想の産物だろうとお前はアイツに影響を与えた。よって、雪風の予想と違う結果に至った…つまり、この一件はお前が元凶という事だ」
「いや、どうかな。僕は彼女の無意識が生み出した存在だ。つまり、彼女は自分自身を守らないといけないと無意識に考えてしまう程に追い込まれた状態だったと考えられる」
「何が言いたい」
「この場で僕をどうこうしても根本的な問題は解決しないという事さ」
　しかし、それを聞いた深井中尉はさもどうでもいいという様子でこう返す。
「だからどうした。アイツがどうなろうと俺には関係無い」
「中尉!?」
「何を言っているんだ…あなたは夢結を助けに来たのだろう？」
「それはおまけでしかない。俺の目的は雪風が何を見ているのかを自分の目で確かめに来ただけだ。それにアイツの問題はアイツ自身やその周囲の人間の問題だ、俺にどうにかする義理は無い」
「…呆れたね、こんな様子ではますます夢結を外に出してはいけないな」
　深井中尉は知ったことかと呟く。すると、梨璃は俯きながら言葉を発する。そして、その声は微かに震えていた。
「いいえ、ここに閉じこもっている方がもっと良くないです…このままだと、現実のお姉様はずっと意識を失ったまま。美鈴様、本当にそれがいいと思いますか？」
「でも、ここにいればこれ以上悪くはならない」

「良くもなりません！」
「もっと悪くなったらどうするつもりだい？」
「私が…いえ、私達が必ず助けます。だから…」
「だから？」
「お姉様を解放してください！」
　しかし、美鈴は梨璃の表情をじっと見てこう返す。
「いい答えだ。でも、僕に言われても困るな」
「どうしてですか」
「夢結の意思次第さ。彼女が未来をただ悲観しているならこのまま起きないだろう」
「では、本人に聞いてみます」
　そう言うと、梨璃はベッドへ向けて歩き出す。一方、深井中尉は美鈴へと視線を向けた。梨璃に何か手を出すのではと警戒する為である。しかし、彼女は動く様子が無い。
「僕が手を出すつもりはないよ。さっき言った通り、決めるのは夢結だ。だからそんな目で僕を睨む事もない」
「どうだか」
　梨璃はそっとベッドに手を置くと、軽く揺する。
「お姉様、聞こえますか？迎えに来ましたよ」
　しかし、夢結が布団の中から出る様子はない。だが、反応はあった。布団の中の彼女が微かに動いたのである。
「お姉様、大丈夫ですよ。ここには味方しかいませんから」
「…駄目よ」
「お姉様？」
「私は仲間を信じる事が出来なかった、心の声に負けてつい疑ってしまった…だから、今更戻るなんて…」
「誰だって怖くなってしまう時はあります。それにただ疑っただけじゃないですか」
「でも…このままだときっと皆に迷惑を…」
「大丈夫です。何かあっても皆はお姉様を助けてくれますよ。とてもいい人達ですから…さあ、まずはこの布団から出ましょう」

すると、夢結は体を起こした。説得が通じた事に梨璃はホッとする。
「さあ、お姉様。帰りましょう」
「ええ…」
「行くのかい、夢結？」
「はい」
「そうか」
そう言うと美鈴は窓の外へと視線を向ける。その表情は先程と異なり笑みが無い。
「やっぱり僕では引き留める事は出来ないか…羨ましいよ、夢結のシルトが」
その様子を見た夢結はハッとする。
「…あなたは憎んでいる、自分自身とそれ以外の全てを」
「そうさ、その通り。何か思い出したかい？」
「お二人とも…それはどういう意味ですか…？」
その只ならぬ雰囲気に梨璃の表情が強張る。
「人はね、憎むのさ。自分自身を認める事が出来ないと」
「認められない…？でも聞いた話だと、美鈴様はとても優秀なリリィだって…」
「それと自分自身をどう考えるかは別の話だよ」
「でも、そんな悲観する事なんて…私なんて成績もやっとなのに」
「だけど、夢結は君を選んだ。それが全てだよ」
「くだらない」
美鈴から向けられるその視線に梨璃は息を呑む。しかし、そんな雰囲気なんてまるで無視するように深井中尉がそう呟く。
「何だって？」
「くだらないと言っただけだ。それ以上でもそれ以下でもない」
「大人の余裕か？気に入らないな」
「お前に俺の苦労なんて分かる筈もないし、お前の苦労も俺は知らない」
そして、深井中尉は端末に目をやるとそのまま告げる。

「B―3雪風、こちら深井中尉。情報収集行動終了、捜索対象を確保。帰還したい」
「待て」
「お前が何を言って脅そうとも意味はない、別に本物の人物が言った訳ではないからな。よって、こんなものは幻聴や夢と変わらない。だから、そんな話を聞くだけ無駄だ。さあ、怯えてないで帰るぞ」
　梨璃は深く頷くと、夢結の手を握る。
「深井中尉…そうですね、分かりました。お姉様、帰りましょう」
「でも…」
「あれは幻です。中尉が言うように本物ではありません」
「そうね…でも、あの幻がこれでいなくなるとは限らないわよ。きっと、また現れる…」
「その時は皆で考えましょう、何かいい解決策を」
　そして、二人は瞳を閉じた。理由は分からないが、そうすれば帰れると本能的に察したのだ。刹那、警告音らしき音が聞こえたと共に足元の床が消えたような感覚に陥る。一方、深井中尉は馴染みのある感覚を覚えていた。そう、これは雪風の乗りなれたコクピットに座っている時のあの感覚。
　どうしてこうなっているのか理屈は分からない。だが、雪風が迎えにやってきたという事だけは確信を得た。
　さて、この分だとあの二人は後席か…まあいい、すぐに帰ろう。
「こちらB―3雪風、ＲＴＢ」

散った花の遺したものは

電波暗室で発生した事件から二日が経過。そして、状況確認の為に理事長代行のオフィスには関係者が次々と集まってきていた。
「ブッカーさん、先程理事長からお電話がありましたが…外出中という事にしてなんとかやり過ごしました」
「助かるよ。あの人相手だと誤魔化しきれる自信がない」
史房の報告を聞いたブッカーは大きな溜息をついた。そして、それを見た深井中尉が意外そうな表情を浮かべて口を開く。
「なんだ、本当に理事長なんていたのか」
「勿論いるさ。この体の人物の姉だよ」
「なるほど、そういう繋がりか」
つまり、この理事長代行より年上か…それを聞いた二人の零と桂城少尉の心の内に特殊戦のボスであるクーリィ准将の姿が浮かぶ。すると、ブッカーがこう言う。
「そうだな…理事長の姿を見たら、流石のお前達も仰天するだろう」
「どういう事だ?」
ブッカーは壁に飾ってある写真を指差す。
「それだよ」
そこにはまだ若そうな女性の写真があった。そして、写真を見た深井大尉が呟く。
「これが理事長…どの位前の写真だ?」
「史房君、確か…この写真は二年前ぐらいだったか?」
「そうですね、その辺りだったかと」
史房の話を聞いた三人は唖然とした表情を浮かべた。
「これが?とてもそうは見えないが」
「過去に色々あってな、不老ってやつだよ。それで姿が昔のままなのさ」
「またオカルトか」
深井中尉は呆れた表情でそう呟く。しかし、ブッカーは再び溜息をついた。

「早く事を片付けたいものだ。俺の事はともかく、雪風やお前達の件はあの理事長にも伝わっている筈だからな。彼女がいつここに飛び込んでくるか分からんぞ」
「それの何が問題なんだ、ジャック？」
「考えてもみろよ、零。自分の肉親の中に見ず知らずの他人が憑依して好き勝手している…なんて知ったら間違いなくトラブル一直線だよ」
「それはそうだ。十中八九、厄介な事になるだろう」
　桂城少尉が頷きながら言う。現状、この問題はいつ炸裂するか分からない時限爆弾と言える。その点についても対処が必要である。
「しかも、彼女はとてつもなく強い。ドンパチになったらお手上げだよ」
「それは面倒だ。そうなったら空の上に逃げるとしよう」
「ああ、少尉。それが確実だ」
「いや、待て。大尉、それだと俺はどうなる」
「そうだな…ジャックの犠牲は忘れないでおくよ」
　そんな会話をしていると、ドアをノックする音が室内に響く。そして、ブッカーが入れと言うと部屋のドアが開いた。すると、そこにいたのは先の事態の当事者である一柳隊一行と百由であった。
「さて、揃ったか。現在の状況を整理しよう」
　ブッカーがそう言うと、大型のディスプレイに学院周辺の地図が表示される。そして、百由と生徒会長達が説明を始める。その地図にはいくつも赤い点が表示されていた。
「えーっと…調査の結果、やはり危険と思しき個所が複数確認されました。案の定、地形が複雑でエリアディフェンスの電波が必然的に弱くなる地帯にある洞窟やトンネル。それに建物の地下ですね」
「そして、その個所というのがこの地図の赤い点になります」
「電波暗室の件の二の舞を防ぐ為、既にこれらの地点は建造物の倒壊や土砂崩れの恐れがあるという名目で封鎖済」
「よろしい、例えヒュージが現れたとしても生徒には近づかせないように周知徹底を。さて、一柳隊の諸君。その後、体調等に問題は？」

ブッカーの問いに対して夢結が答える。
「全員健康です。その…私もあの後は特に何も…」
「分かった、何かあった場合はすぐ報告するように。深井中尉、そっちは？」
「俺も雪風も異常無しだよ、ジャック」
深井中尉の報告にブッカーは頷く。
「さて、先の一件について原因の目星はついているか？」
「じゃあ、私から」
百由が手を挙げた。
「検証のしようが無いので、あくまでも仮説ですが…エリアディフェンスの電波が関係している点から、ケイブを発生させるヒュージの粒子が問題の引き金となっていると考えられます。また、他所で同様の事件が発生したとの報告が今のところ無い為、これはここ鎌倉に限定された事象とも言えますね」
その説明について深井大尉から質問が飛ぶ。
「その粒子だけが原因なのか？」
「この現象が鎌倉だけに限定されている事から、例のヒュージネストも絡んでいると思われるわ。具体的には…ネストから噴き出しているあの謎のマギね」
「フムン」
「このマギの影響下かつ、エリアディフェンスの効果の薄い箇所という二つの条件が重なった時にあの現象が発生する…私はそう考えた」
そして、百由は地図上のヒュージネストに目を向けると話を続ける。
「よって、あのヒュージネストの異常が収まらない限り、この事態は続くと思われるわね」
「どうやって異常を終わらせるつもりだ？」
「現状だとお手上げよ。自然に収まるのを待つしかないわ」
「フムン」
今度は別の方向から質問が出た、深井中尉である。
「では、そのネストを破壊するという手は？」

「現実的ではないわ、あれは文字通りのヒュージの巣。そして、強大なアルトラ級の討伐には相応の準備が必要よ」
「撃破する事自体は可能なのか？」
「不可能ではないし、実績もある。でも、今すぐに出来るかと言ったら不可能よ」
「そういうものか」
　専門家が出来ないと言った以上、どうしようもない。説明に納得したのか、深井中尉はそのまま視線の向きを地図へと変えた。そして、ブッカーからも質問が飛ぶ。
「異状がいつ頃収束するかの予測は？」
「単刀直入に言いますが、全く分かりません」
「やはりか…」
「予想のしようがありません。以前回収されたあのＣＨＡＲＭが異常を起こした原因なのは確実ですが、それがネストにどんな影響をまき散らしたのか…それすらまだ全容が…」
　百由はそのまま口をつぐむ。それ以上、今の時点では答えようが無いのである。
「どうしてこんな暴走をしたのかも掴めないか…帰還の糸口にもなりそうだが」
　ブッカーが頭を抱えながらそう口にする。すると、誰かがポツリと言葉を発した。
「お姉様は…その、この世の全てを憎んでいたのだと思うの」
　夢結が俯きながらそう呟いたのである。それを聞いた皆の視線が夢結へと集まり、百由がその意味を問う。
「憎んでいた…何故？」
「彼女は自分を認める事が出来なかった…だから、そうなったのよ」
「よく分からないけど…思い通りにならないもどかしさみたいなものかしら？うーん…いや、思い通りにならないなら世界を変えてしまえばいい…もし、彼女がそう考えたとしたら？」
「どういう事？」
「いえ、なんでもないわ。ふと思いついただけよ。理屈とか抜きにね」

百由は首を横に振ってそう言うが、深井大尉が口を開く。
「直感は大事だ。そのまま続けろ」
予想もしていなかったような言葉に百由が呆気に取れたような表情を浮かべる。しかし、深井大尉の視線は鋭く、とても冗談を言っているようには見えない。
「え？えーと、そうね…これはもう概念的な話になるけれど、マギは世界を変える力だと考える人も世の中にはいるわ。美鈴様が世界を変える為にそんな考えを使ったとしたら？それが故意かどうかは分からないけど」
「何？つまり、世界を変えたいという思いが原因であのネストから妙なマギが噴き出したと？」
「辻褄は合う…現にあのマギが作用する範囲で可能性が重なり合う不確定で奇妙な空間が発生している。それが世界を変えるという意味だと解釈するのなら」
「文字通り世界が書き換わっているな。そして、俺達がここに現れた事もこの世界を変えるという現象の一つにはなるか」
「ええ。問題はそれが主か、はたまた意図しない副産物の結果か」
「フムン。本気で世界を変える気ならこの程度では済まない、そういう事か？」
「そう。だからこそ、問題のＣＨＡＲＭを早急に解析しないと。どういう意図でＣＨＡＲＭを弄ったか、それを把握しないといけないわね」
ブッカーは頷くと、百由に言う。
「解析を急ぐようにしてくれ。何か手がかりが掴め次第、報告を」
「了解、最優先で調査します」
「では、今日はこれで解散としよう」
ブッカーがそう言うと、会議は終わる。ちょうど昼飯時であり、リリィ達はそのまま食堂へと向かっていった。一方、オフィスに残ったのはブッカーと二人の深井零に桂城少尉であった。
「オカルトはもううんざりだ」
「同感だよ、中尉。勝手が分からない話は面倒だ」

二人の深井零は不機嫌そうな顔でそう口にする。
「まあ、ジャムだって無茶苦茶だ。だからこそ、僕達はこんな事態でも柔軟に物事を考える事が出来ているのかもしれない」
「少尉の言う通りだ。考え抜かないとフェアリイの空では生き残れないからな。さて、こんな時間だ。昼飯を頼もう」
「ジャックの奢りか。そうだな、贅沢なものがいい」
「物事には限度があるぞ、零」
「じゃあ、僕はビフテキで」
「フムン、冷えたビールが欲しいな」
「まだ真っ昼間だぞ、大尉。それは駄目だ」
そう言いながらブッカーは受話器を取った。

不死鳥の叫び声

「とりあえず…ＣＨＡＲＭにどういった変更が行われたのか、おおよそのところまでは掴めました」
「分かった。詳細についてもこのまま頼む」
「了解です。そして、組み込まれた術式ですが…どうも、マギに介入するとかそういう雰囲気はするのですが、実際動かしてみない事にはなんとも」
「動かす、か…できそうか？」
「契約の書き換えが必要になるのですぐにとは…」
「そうか」
　百由はブッカーに作業の進捗を報告していた。美鈴が最後に使ったＣＨＡＲＭ…それこそが今回の異変の鍵となるのは間違いない。よって、百由はここ数日、その解析作業にひたすら没頭していた。
「では、作業に戻ります」
「頼んだ」
　ブッカーがそう言ったところで大地が小刻みに揺れた。
「これは地震か？」
「いえ、窓の外を!!」
　百由が窓の外を指さす。ブッカーがそちらを見ると、ネストの雲から凄まじいスピードで何かが上空高くへと飛び出していくのが見えた。
「まさか…ジャムですか？」
「いや、分からん…む？」
　すぐに史房から無線が飛んできた。
「ブッカーさん、たった今ネストから何らかの物体が射出されました！」
「ああ、見ていた。正体は？」
「数は三つ。おそらくヒュージ…ですが、大気圏を突破。そのまま弾道飛行中…落下予想地点は…」
「どうした、どこだ？」

「地球を一周して、ここにまた降ってきます！無茶苦茶な…ネストにもかなりの負荷が出る筈なのになんでこんな攻撃を…？」
「なんて事だ…」
　すると、ソファに寝転がっていた深井中尉が勢いよく立ちあがるとヘッドセットを掴む。
「深井中尉だ、迎撃は？」
「不可能です。防衛軍が保有する迎撃用のミサイルを撃ちこんだところで効果は見込めません」
「了解だ。では…ジャック、どうする？」
　深井中尉は振り返って、ブッカーにそう言った。
「退避だ、総員退避。あんな質量の物体が直撃した場合、ここの地下設備もただでは済まん。安全圏まで退避させる」
「では」
「ああ、全機緊急発進だ」

　格納庫内では警報が鳴り響く中、三機の特殊戦機の離陸準備が急いで進む。各機は念の為、武装も抱えている。それはこの世界の武装だけでは無い。特殊戦機がこの世界にやってきた時に積んでいた物も含まれる。
　機の周りを動き回る整備員達は急いで手順を進め、作業に関係無い人々は機材を片付けて逃げる準備を進めていた。一通り終えた後、彼らはそのまま車両に乗って退避するのだ。
「こちらB—1、今搭乗した。離陸チェックリスト対応中」
　感覚を確かめるように、深井大尉は操縦桿を握る。飛ぶのはここに不時着して以来だ。試運転は何度も実施しており、機体に問題が無い事は分かっている。しかし、普通であれば不安に思うだろう。だが、不思議とそんな気持ちは出てこなかった。
　自分のいるべき場所はやはりここなのだ。
「B—3雪風、こちらはもう済んだ。B—13は？」
「もう自動でチェックを終えている。異常無しだ」
「了解。さて、生徒会長殿。そちらは？」

「こちらは徒歩で退避中。なお、人員退避の護衛にレギオンを一隊残しています」
「こちらB―1、準備完了。整備の連中は今退避させた、収容と護衛は任せる。こちらはもう離陸する」
「幸運を」
　無線でのやり取りを終えると、三機の特殊戦機は足早に仮設滑走路へと進む。すると、桂城少尉が呟く。
「直接は見ていないけど、まさかあの化け物が宇宙まで飛ぶなんて」
「少尉、あれが無茶苦茶なのは今更な話だよ」
「そうですね、驚いていたらキリが無いか。さて、どこに逃げよう」
「当然、空に決まってる」
　そう言うと、深井大尉はスロットルを押し込んだ。アフターバーナーの轟音が鳴り響くとあっという間に機は浮かび上がる。桂城少尉が周囲を見回すと、他の二機も同様に飛び上がっていた。こうして、B―1…雪風は久々に空へと帰還した。
「僚機も無事離陸」
「了解、少尉。退避先の空域について地上に問い合わせろ」
「了解」
　桂城少尉が防衛軍の管制に無線を飛ばす。聞こえてくる無線は早口だ、ヒュージの異常な攻撃に向こうも忙しいようである。現にレーダーには複数の航空機が映っている、ヒュージ落下に備えて戦力を配置しているようだ。一方、こちらは指示に沿って太平洋上へと退避する。
「落下予想時刻まで残り３０秒」
　地上からそう無線が飛び込む。
「少尉、センサ類は？」
「全て問題なし、現在記録中」
　雲がある為、光学系での観測は難しいだろう。そう深井大尉が考えていると、頭上が光った。
「B―3からB―1、来たぞ」
「ああ、見えている。レーダーコンタクト、三機降下中。思ったより遅

いな」
「まさか、制御落下か？」
桂城少尉が訝しむように言う。
「分からない。自壊を防ぐ為、本能的にやっているのかもしれない」
「まあ、それでも普通の物体なら木っ端みじんのスピードですが…着弾、今」
雲の隙間から閃光が飛び込む。そして、B—1のフローズンアイ…空間受動レーダーは発生する衝撃波を捉えていた。
「高度を落とす、各機続け」
三機の特殊戦機は高度を落とすと、雲の下に出る。光学系のセンサを使って落下地点を調べるのだ。
「地域一帯纏めて吹き飛ぶかと思ったけれど、意外と被害が少ないな。だけど、各落下地点は大穴が出来ている。そして、真ん中に黒い物体…あれは何だろう？」
「フムン、防衛軍にも状況を伝えてやれ。さて、ジャックは逃げ切れたかな」
「こちらB—3、地上の連中と無線が繋がらない。敵の妨害か？」
深井中尉はそう言うが、それらしい妨害電波の反応は無いと桂城少尉が言う。そして、深井大尉は確かめるようにメインディスプレイへと目を移す。
「B—1よりB—3、そういう電波はこっちで捉えていないが…いや、待て。何かおかしい」
レーダーには巨大な反応があった。それはまるで鎌倉一帯を覆う壁のようであった。

一方、地上で退避中のリリィ達にも異変が起こっていた。ヒュージ落下による人的被害は出ていない。しかし、彼女達の持つCHARMは全て機能不全に陥っていたのだ。
「何故動かない？」
「三体のヒュージは地中深くに埋まった状態。周囲一帯に特殊な力場、マギの結界を形成…そして、結界中心部に新たなヒュージ出現…

無茶苦茶ね。ＣＨＡＲＭ不調はこの結界のせいか」
　百由はセンサによる観測結果を見ながらそう呟く。すると、隣で端末を操作していた祀が首を傾げる。
「外部と無線が繋がらない…どういう事？」
「どこにも繋がらない？」
「ええ、周囲のリリィとは通信できているのだけど」
「妙ね。妨害電波なら近くも駄目になっていそうなものだけど、まるで壁に遮られているような話…いや、そうだとするとこれは不味いわ」
　百由が端末を操作すると急に焦り出した。そして、それを見たブッカーが問う。
「どうした？」
「ブッカーさん、はっきり言いますが…状況は最悪です」
「どういう事だ、説明してくれ」
「相手の異常なマギの結界によって、エリアディフェンスを含む全ての電波が遮断。よって、鎌倉一帯があの電波暗室と同じ状態になった…ここまで言えば分かりますか？」
「なんだと…つまり、我々は…」
「ええ、このままだとあの時の一柳隊の様に並行世界へと投げ出されるでしょう」
　それを聞いた生徒会の面々とブッカーは絶句した。だが、ただ一人だけ動き出す。
「お姉様!?」
　夢結が背に抱えたケースからＣＨＡＲＭを取り出す。それはこの一件の鍵と目され、美鈴が最後に使ったＣＨＡＲＭであるダインスレイフ。そして、周囲のＣＨＡＲＭが動かない中、それだけは起動した。本来の持ち主の手によって。
「よかった、私の事をちゃんと覚えていたのね」
「ちょっと待て！動いたからってどうするつもりだ!!」
　梅が夢結を止めようとする。
「あのヒュージを仕留める。そうすれば、異変は阻止できるわ」

だが、夢結は駆け出した。マギを使えない他のリリィでは止めようがない。
「そんな、お姉様…」
梨璃はそんな夢結の後ろ姿を呆然と見つめていた。しかし、首を大きく横に振ると、自らのＣＨＡＲＭを握りしめる。必死でただ動けと念じながら。
「嘘!?」
「梨璃さん、どうやったんですか!?」
梨璃のＣＨＡＲＭが起動したのだ。周囲にいた他の一柳隊の面々は驚き、同じようにＣＨＡＲＭを動かそうとする。しかし、どのＣＨＡＲＭも動かない。すると、梨璃が一人で駆け出そうとする。だが、楓が梨璃を咄嗟に止める。
「無茶ですわ、梨璃さん！」
「止めないで、お姉様一人だけで戦わせる訳にはいかないから！」
「でも、たった二人なんて…」
「大丈夫。楓さん、後は任せたから」
梨璃は楓の手を一度握ると、そのまま駆け出して行った。そして、後には呆然とした様子の一柳隊が残された。だが、楓は自らの手をじっと見ていた。
「楓さん、どうかしました？」
「いえ、梨璃さんがこれを…」
そこにはノインヴェルト戦術用の特殊弾があった。

上空の特殊戦機三機は鎌倉の手前で旋回していた。この後どうするのか策を練っていたのだ。そして、その理由は鎌倉一帯を覆う謎の反応である。目に見えない何かがレーダー波を反射しているのだ。
「電波を遮る何かがあるのは間違いない」
「そして、下手に突っ込んで物体があれば木っ端みじんだ」
「電波を遮る…あの中は例の妨害電波も無い状況じゃないか？」
「そういえば、そうだ。大尉、あの中はかなり不味い状況なんじゃ…」
「フムン、あの仮説通りならそうだ。こちらＢ―１、Ｂ―３へ。どうす

る？」
　深井中尉は考えるように軽く唸ると、案を出す。
「物理的な障害物があるかどうか調べるのなら、機銃を撃てばいい。そうすれば分かる」
「いい手だ、それで行こう」
「だが、あの中があの部屋と同じ状態だとして、下手に飛び込めば俺達まで巻き添えだ」
「その点についてはいい手がある」
「なんだ？」
「電子攻撃を実施…エリアディフェンスの電波を模倣する。雪風なら出来る筈だ」
　面白そうな手だ、と後席から桂城少尉が言う。そして、深井中尉からも異論は来ない。
「では、決まりだ。機銃を撃つのはＢ―１がやる」
「了解、任せた」
　深井大尉はそう言うと、自機を加速させる。
「壁まで残り１０００ｍ」
「了解、マスターアームオン。撃つぞ」
　Ｂ―１から２０ｍｍ機関砲弾が放たれる。すると、着弾予測地点で機関砲弾は炸裂せず、遥か先で自爆する。
「弾は潜り抜けた。つまり、物理的な壁は無い」
「こちらＢ―３、こっちでも確認した」
「では、突入しよう。ＥＷ準備」
「了解、ＥＷ準備」
〈Ｂ―１：ＲＤＹ〉

　地上では百由が端末を見て唸り声を上げていた。既に空は暗く染まり、周囲ではケイブ発生の予兆が無数に出現している。だが、現状の戦力はたったの二人。敵は巨大で強大なヒュージであり、阻止するのも絶望的。もう奇跡を祈るしかない状況だ。
「まるであの時のような空だ…」

ブッカーはそう呟く。彼が思い出していたのは深井中尉と共に南極へ飛んだ帰り、ジャムに閉じ込められたあの奇妙な空間である。今の空はまさにあの時のような不気味なものであった。
「零、後は任せた…」
空を見つめてブッカーは呟く。だが、轟音が鳴り響く。
「エンジン音…?」
「これは…まさか。雪風か!!」
間違いない、それは正しくスーパーフェニックスのエンジン音…周囲の地形に反響し、不死鳥の叫び声が響く。そして、変化が起こる。百由の端末に表示されていたケイブ反応が次々と消えていく。
「ケイブが消えた…何が起こったの!?」
「あいつらがやったんだ、特殊戦機三機による電子攻撃だよ」
事態は好転した、空を翔ける雪風の影と共に。

ノインヴェルト

「どうなっているんだ、戦っているのはたった一人じゃないか」
「確かに妙ですね」
　深井大尉と桂城少尉は地上の様子を見てそう話す。地上には大きなヒュージとたった一人のリリィが戦っていた。先に落下した三つのヒュージと百合ヶ丘のリリィ達の姿は無い。何がどうしたのかと機上にいる三人のパイロット達は周囲を見回す。すると、地上から無線が飛び込んだ。
「深井大尉、聞こえますか!?」
「一柳か?」
「はい!よかった…繋がった」
「何がどうなっている?何故、誰も戦っていないんだ」
「それが、その…」
　梨璃は何が起こったのかを語る。曰く、ヒュージ落下以降に皆のＣＨＡＲＭが一斉に使用不能になったとの事である。通信不能もＣＨＡＲＭの機能不全も目の前のヒュージが引き起こしているらしい。
「で、実質戦闘能力を喪失して壊滅状態だと」
「はい…でも、何故か私とお姉様のＣＨＡＲＭは動いて…」
「何?だが、見た事の無いヤツが戦っているぞ」
　光学センサには白髪のリリィが映し出されている。
「それがお姉様です」
「アイツは黒髪だった筈だが」
「えっと、それがレアスキルの影響みたいでして」
「暴走だったか?名前は忘れた」
「ルナティックトランサーです!間違ってはいませんが、言い方がその…」
「フムン」
　眼下に見える夢結の戦いぶりは以前見た時のそれより圧倒的であった。通常時よりも速く、高く跳び上がって斬りかかる。ヒュージは巨大な浮遊物を次々飛ばしてくるが、夢結はそれを軽々躱し、刃で

受け流していく。
「深井大尉、お姉様を止めたいのですが…その、空から援護お願いできますか？」
　梨璃が無線でそう言ってくる。しかし、敵味方の距離が近すぎる、支援するにも危険である。Ｂ―１とＢ―１３の搭載する無誘導ロケット弾や無誘導爆弾では破壊力が大きすぎるのだ。
「無理だ、白井と敵の距離が近すぎる。撃てば爆風と破片で吹っ飛ぶぞ」
「こちらＢ―３、俺がやる」
「フムン、任せた」
　そう言うと、深井中尉は雪風…Ｂ―３の機首をヒュージへと向けた。ジャムセンスジャマーによって機体を赤く輝かせ、妖精は舞い降る。
〈Ｂ―３：ＲＤＹ〉
　そして、胴体下が一瞬輝くとヒュージの体表の一点が突如として爆ぜる。ミサイルや爆弾は見えなかった…何が起こったのかと梨璃が叫ぶ。
「大尉、あれは!?」
「レーザー機関砲、向こうの雪風がここに飛ばされてきた時に積んでいた唯一の兵装だ。そして、あれならピンポイントで目標を撃てる」
　だが、ヒュージに対するＢ―３の攻撃は殆どダメージを与えられていない。しかし、ヒュージの注意を上空へと引き付けるにはそれでも十分であった。ヒュージは夢結への攻撃を止めて、奇妙な形状をした浮遊物を次々と上空へと放つ。それは最早、どこか執念染みた勢いの攻撃とも言えた。敵はそれだけＢ―３を恐れているのだろうか？上空からその光景を見ていた深井大尉は心の内でそう考える。
　遅い…攻撃を受けていた深井中尉は心の内でそう呟く。Ｂ―３は敵の攻撃を軽々と振り切っていく。倒せないが、倒される事も無い…そういった状況だ。このままだとキリがない。しかし、それでも敵の隙は生み出す事は出来た。
「一柳。今だ、行け」

「はい、大尉！」
　深井大尉の無線を聞いた梨璃は瓦礫の隙間から勢いよく飛び出した。そして、夢結へ向けて一目散に突っ込んでいく…それをB―1のセンサは自動的に追う。梨璃はCHARMを振り回す夢結を止めようと飛び掛かった。そして、そのどさくさで二人のCHARMが接触…その場に白い光が強く輝く。
「少尉、あの光は何だ？」
「さあ…？爆発では無さそうだ。あの二人がぶつかった瞬間に光ったようにも見えましたが」
　そして、B―1のフローズンアイは一瞬の大気の変動を捉えていた。あの光と共に大気の流れに影響を与える何かが発生したらしい、深井大尉と桂城少尉はそんなデータを見て首を傾げる。敵の攻撃か？それとも、あの二人が何かやったのか？すると、地上から無線が飛び込んできた。
「B―1、B―3。聞こえるか？」
「こちらB―1、聞こえている。ジャックか？」
「そうだ、やっと繋がったか」
「一柳からおおよそ状況は聞いた。こっちは交戦中…ジャック、そっちの雪風はヒュージに何かしたのか？白井のヤツを無視してひたすらB―3を狙っているぞ」
「何…？損害は？」
「無いよ、被弾すると思うか？」
「確かにそうだ。だが、何故雪風を狙う…？」
　無線の向こうからはブッカーの困惑したような声が聞こえてくる。
「まだ、そちらは戦闘不能か？」
「いや、たった今CHARMが動いた。原因は分からん…いや、ちょっと待て」
「フムン」
　すると、無線の相手がブッカーから別の人物に変わる。
「深井大尉、聞こえる？こちら真島」
「ああ、聞こえている」

「では、手短に現状を報告するわ」
　そして、百由が説明を始めた。
「件のヒュージはある種の力場…結界のようなものを発生させているわ。で、その結界がＣＨＡＲＭに悪影響を与えていたみたい」
「で、動いたという事はその怪しげな力場は消えたという事か？」
「いいえ、規模が小さくなっただけ…あのヒュージに近づいたらまた停止するでしょう。それにリリィが下手に近づいたらもっと厄介な事になりそうなの」
「なんだ？」
「似ているのよ、ヒュージの発するマギのパターンが…レアスキルのルナティックトランサーのそれとね。だから、リリィが近づくとその影響を受けて大変な事になりかねないわ。最悪、暴走よ」
「だが、一柳と白井は敵の目の前で戦闘中だ。何故、あの二人は平気なのか？」
「分からない…ルナティックトランサー持ちの夢結は能力発動状態になったのだとしても、梨璃の方はどうしてなのか分からなくて」
「フムン。しかし、この後はどうするんだ？あの二人の攻撃は弾かれて通用しているようには見えないが。それに、さっき落下したヒュージの姿が見えない、放置すれば奇襲されるリスクがある」
「えーっと…さっき落ちてきた三体のヒュージは消失したわ」
「何だって？」
　思いもよらぬ回答に深井大尉は驚いたような声を上げる。
「あのヒュージ達は地下深くに落ちた後、力場を形成。その後は現在存在しているあのヒュージにマギを全て吸収されて消滅…という具合ね」
「訳が分からん」
「同感よ。やる事が回りくど過ぎるわ」
　百由は溜息を一つ吐き出す。
「で、ヒュージに対する攻撃については…現状、お手上げね。何か対策を考えるとかしないとどうにも」
「フムン」

すると、別の相手から無線が飛び込む。
「深井大尉、こちらにいい手がありますわ」
「ヌーベルか」
「はい、大尉。それで、その手を使う為にヒュージと梨璃さん、夢結様の正確な座標をこちらの端末に送ってもらう事は可能でしょうか？」
即座に桂城少尉が後席のメインディスプレイを操作する。そして、深井大尉に送信した事を告げる。
「ああ、今送った。それで、何をするんだ？」
「ええ、私達が使える最強の攻撃手段…ノインヴェルト戦術を使います」
「だが、近づけないのだろう？」
「その通りですわ。でも、とどめは最前線のお二人に託しますわ」
「手前で他の人員分のパスを終えて、最後だけあの二人に任せるつもりか」
「ええ、大尉。あと、お二人にこの内容を伝えてもらっても？こちらからはどうも無線が繋がりにくくて」
「構わない。桂城少尉、任せた」
「了解」
一方、B—3は未だに敵の攻撃を回避し続けていた。
「零、状況は？」
「ジャック、相手がどうにもしつこい」
「大丈夫そうか？」
「問題ない」
深井中尉はそう言うと、機を左に急旋回。飛んできた巨大な浮遊物を回避。すると、その外れた浮遊物は百合ヶ丘女学院の校舎へと直撃する。そして、深井中尉は静かにその様子を無線で伝える。
「学院の施設が被弾した」
「ああ、見えているよ。校舎に当たったな…」
何かしらの対策をしているのか、巨大な物体が命中しても校舎が倒壊する事は無かった。
「キリがない」

浮遊物にレーザーと機銃弾を浴びせるが、本体同様こちらも効果が無い。深井中尉はうんざりしたような様子で溜息を吐き出す。すると、視界の隅で何かが光った。視線をそちらに向けると、光る球体が飛んでいる姿が見えた。
「こちらB―3、謎の発光体を視認」
「B―1よりB―3、心配無用。あれは味方の攻撃だ」
「誘導弾か何かか？」
「ノインヴェルト戦術とかいうやつだ。知っているか？」
その単語を聞いた深井中尉は以前に見た資料を思い出す。たしか、対ヒュージで最も威力のある攻撃方法だったか…その光る球体を目で追うと、いきなり進行方向が変わった。まるで何かで弾き飛ばされたようだ。そして、別の異変も起こった。B―3を追っていた敵の浮遊物が一斉にヒュージ本体へと戻って行ったのだ。
「こちらB―3、敵の優先目標が変わったらしい」
「そのようだ」
一柳隊の残りのメンバーによって複数個所で光球…マギスフィアがパスされる。そして、ヒュージのいる方向へとマギスフィアが飛ばされる。それと共に楓からも無線が飛び込んだ。
「大尉。七人分のパスが終わりましたので二人の方向へパスを回しましたわ」
「視認している。一柳、聞こえるか？」
未だに地上の通信状態が不安定な為、B―1が通信支援を行う。
「はい、大尉」
「そっちにマギスフィアが飛翔中。南側からだ」
「見えました、後は任せてください！」
しかし、マギスフィアは到達しなかった。ヒュージの浮遊物が途中でそれを奪い取ったのだ。
「失敗よ、総員退避を」
夢結が無線に叫ぶ。
「なんだ、正気に戻ったのか」
「今はそんな事を話している場合ではないわ。深井大尉」

「フムン。あれを何とかすればいいのか」
「何とかって…何をするつもりなの」
「決まっている、撃ち落とす」
「でも、通常兵器は効かないわ」
「撃破は狙っていない。要は敵の行動を阻害すればいいだけだ」
　深井大尉はそう言うと、後席の桂城少尉に指示を出す。
「少尉、雪風にマギスフィアというものが見えているかどうか分からない。よって、俺達の目で見て標的を狙う」
「了解、スタンバイ」
　レーダー上には複数のシンボルが表示されている。それは全てヒュージとヒュージが飛ばしている浮遊物である。武装はＦＡＦ製の短射程空対空ミサイルを選択、深井大尉はマギスフィアの位置を確認する…先程までとは違い、マギスフィアの色は禍々しい色に変色していた。浮遊物はマギスフィアを別の浮遊物へと次々回している様子だ。
「気味の悪い色だ…白井、一柳。こちらで攻撃する、一度下がれ」
　マギスフィアの位置と動きを見ながら目標を選択。ＨＵＤ上にターゲットを示す四角いＴＤボックスが表示され、ミサイルのシーカーが目標をロックオンした事を示す表示も続けて現れる。そして、タイミングを見計らってミサイルを放つ。鳴り響く発射音…ミサイルは軽々と音速を突破、真っ白な煙が凄まじい勢いで伸びていくと瞬く間に目標へと接近。
「命中」
　一瞬の閃光と煙…その中から禍々しい色をした光球が飛び出していった。深井大尉はそれを目で追う。
「大尉、ありがとうございます！」
　梨璃が高く飛び跳ねてＣＨＡＲＭでマギスフィアを取り返す。だが、様子がおかしい…夢結が飛び込むと、ＣＨＡＲＭでそれを弾き飛ばしたのだ。そして、光球の色が再び変わる。
「白井、何をしている」
「マギを吸い過ぎてこのままでは危険と判断したのよ！梨璃のＣＨＡ

ＲＭが負荷で破損、使用不能…それで、マギスフィアはどこに!?」
「誰かが弾き飛ばした」
　深井大尉と桂城少尉はマギスフィアの行方を追う…木々の間で何度も光球の軌道が変わる。地上でマギスフィアを受け止めてパスを回しているのだろう。しかし、その回数がやたらと多い。
「九人でやる戦術という話ではなかったか？」
「さあ…確かにそう聞いたけれど」
　ヒュージはそれを阻止しようと浮遊物を撃ち込もうとするが、頭上から攻撃を浴びる。レイフがロールしながら降下し、ロケット弾と機関砲弾を叩きつけたのだ。それに気を取られたのか、ヒュージの攻撃は遅れた…パスを終えたリリィ達がいる地点に浮遊物が突き刺さる。その間にマギスフィアは移動。そして、楓が無線に叫ぶ。
「大尉、もう一度二人の所に飛ばしますわ！」
「了解」
　深井大尉が無線で夢結に知らせていると、視界の隅で一柳隊の残りのメンバーが集まってマギスフィアをパスする様子が見えた。そして、その刹那、彼女達のＣＨＡＲＭから破片が飛び散った。
「連中の装備が壊れたらしい…Ｂ―１からＢ―３へ、一度離れるぞ」
「Ｂ―３、了解」
　三機の特殊戦機は安全の為、ヒュージとの距離をとる。あの戦術の威力は極めて大きいと説明を受けていたからだ。そうして、スロットルを押し込んでアフターバーナーを点火。轟音と急加速の衝撃を感じつつ、桂城少尉は光学センサを操作。あの二人の姿を追う。
「大尉、マギスフィア確保！このまま攻撃するわ」
「幸運を」
　夢結が無線にそう叫び、二人はヒュージ目掛けて飛び込んだ。そして、猛烈な閃光。その後には轟音と衝撃波が飛んでくる。
「なんて威力だ」
　桂城少尉がそう呟く。すると、前席から無線が飛ぶ。
「どうなった？」
「ヒュージとその浮遊物体はレーダーからロスト。あの二人は…い

た。無事です」
「フムン。こちらＢ―１、目標の撃破を確認。我に損害無し」
「こちらＢ―３、同じく損害無し。ジャック、聞こえているか？」
「ああ。聞こえているよ、零。すぐに帰投せよ」
「了解、ＲＴＢ」

「で、攻撃をやり過ぎてこの学院が配備する大部分の装備…ＣＨＡＲＭが破損して戦闘能力を完全に喪失したと…今襲われたらどうするつもりだ」
　先の戦闘報告を聞いた深井中尉は呆れたような目でそう呟く。
　ヒュージは撃破した。だが、その際のノインヴェルト戦術で使用したマギスフィアがヒュージに奪われた辺りでかなりの量のマギをため込んでいた事。そして、大人数で問題のマギスフィアを回した事。その結果、膨大なマギの負荷に耐えきれずに次々とＣＨＡＲＭが損壊する事態に至った。よって、現時点で学院が保有するＣＨＡＲＭで使用可能なものはゼロであった。
「いやー、ちょっと場の勢いに呑まれたというか…なんと言うか」
「私達もその…まさかここまでの状況になるとは思ってもおらず…」
　反省したように百由と史房が言う。
「で、何故こんな状況で人を集めたんだ。ジャック」
　深井大尉が部屋の様子を見てそう言う。先の戦闘で校舎は倒壊を免れたものの、各所が破損。よって、室内の照明と空調が使用不能となっていた。窓や壁の破損によって隙間風が入り込んで室温は低下…暖房器具を慌てて引っ張り出すような状況である。
「ああ。こんな状況だが、絶好のチャンスが舞い込んできたんだ」
「チャンスだって？」
「そうだ。この学院の目と鼻の先にある最大の脅威…７号由比ヶ浜ネストを撃破するチャンスだ」
　それを聞いた三人のパイロット達と梨璃、夢結の二人は驚いたような顔を浮かべた。そして、深井中尉が説明を求める。
「どういう事だ、説明してくれ」

「では、私から」
　百由が端末を操作すると、ネストの推定図を表示する。
「ネスト最深部にはアルトラ級ヒュージがいると前に説明したわね」
「ああ、全長１ｋｍはある化け物だったな」
「ええ。で、ここ最近の異常行動によって、他のヒュージに膨大な量のマギを奪われ…先の攻撃でついに枯渇。結果、ネスト全体が機能不全に陥ったと考えられるわ。要はガス欠ね」
　ほう、と深井中尉は呟く。しかし、桂城少尉から質問が飛ぶ。
「攻撃と言ってもどうやってするんだ？通常弾は効かないし、ＣＨＡＲＭは全て使用不能なんだろう」
「ええ、保有するＣＨＡＲＭはね。でも、員数外のＣＨＡＲＭが一つ…」
「白井が使ったやつか」
「そうよ」
　深井大尉の発言に百由は頷く。
「そのＣＨＡＲＭはやはりヒュージを狂わせる術式が込められていたわ。美鈴様が仕込んだものね。で、急ごしらえだけど…それを応用してアルトラ級ヒュージのマギを狂わせて自壊させる術式を作成したの」
「フムン。それで倒すという事か」
「そうよ。で、この攻撃を実施可能なのはこの術式の影響に耐えられる素質を持つリリィだけ」
「それは誰だ」
　百由は頷くと、視線を変える。そして、その先にいたのは梨璃であった。当人は驚いたような表情を浮かべる。
「私ですか!?」
「そうよ、あの場でヒュージと至近で戦えたのはあなた達二人だけ。で、ルナティックトランサー持ちの夢結は別として、あなたはそれ無しで活動出来た…つまり、美鈴様のレアスキルと同様の力を有している可能性がある」
「それって…つまり」

「レアスキル、カリスマよ。正確にはその上位スキル」
「本当に私にそんな力があるのでしょうか…」
「可能性は高いわね。さっきの大人数のノインヴェルトの時にね、明らかに全員のパフォーマンスと士気が跳ね上がったのよ。だからあんな無茶な状況になったのだけど」
そして、ブッカーが口を開く。
「危険な任務だが…行ってくれるか？」
「はい！任せてください」
即座に梨璃は頷く。すると、夢結が口を開く。
「私も同行します。梨璃は私が守りますので」
「お姉様…では、私もお姉様の事をお守りします」
「すまん。二人とも、頼んだ」
そんな雰囲気の中、深井中尉が問う。
「で…俺達がここに呼ばれた意味はあるのか？関係があるとは思えない」
「いや、重要な話だよ。ネストの破壊は我々が帰還するチャンスでもあるからな」
「…何だって？」
二人の深井零は同時にそう言葉を発した。